

第Ⅶ章 出土遺物の詳説

第1節 亀井遺跡における剝片生産技術

Iはじめに

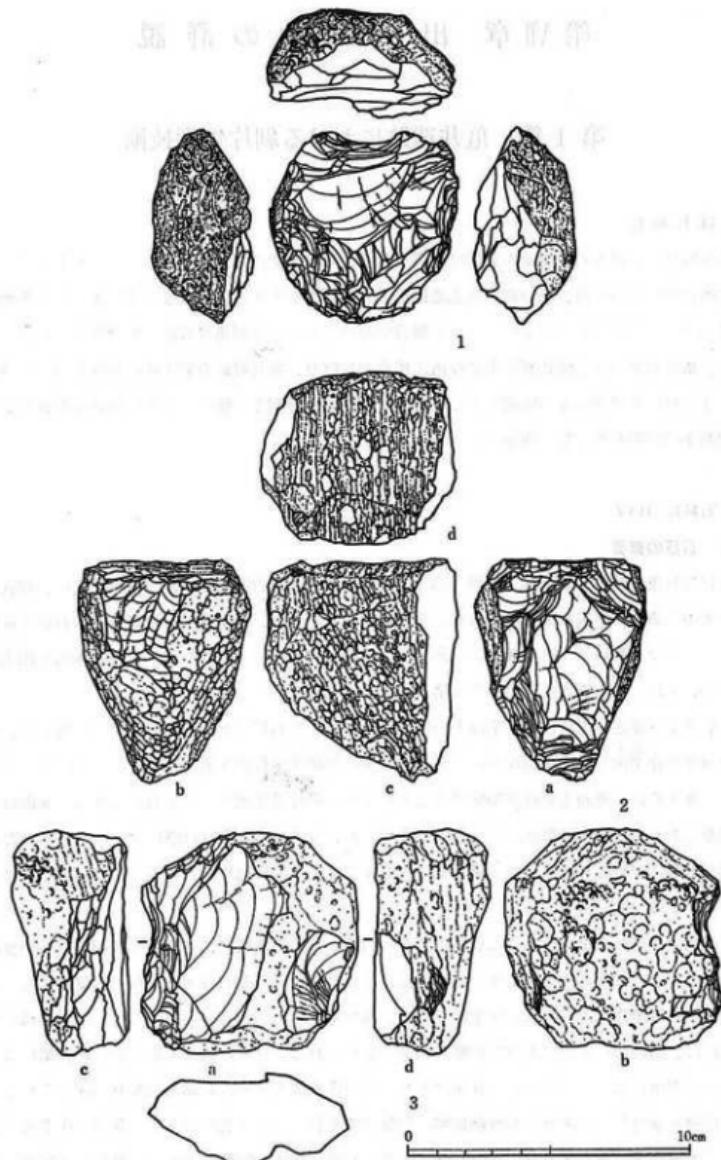
弥生時代における石器生産の実態は、近年酒井氏等の研究により解明にむかいつつあるが、剝片生産技術については、森の宮・喜志遺跡等の分析作業をのぞき、今日までまとまった分析研究作業がほとんどなされていないといつて過言でない。そこで今回亀井遺跡の整理作業を行うにあたり、亀井遺跡の弥生時代剝片生産技術に焦点をしほり、亀井遺跡石器生産の特性を見ていきた。また石核及び剝片等の時期であるが、各遺構の所属時期等を踏まえ、弥生時代中期後半より後期前半の時期を想定して間違いないであろう。

II 石核について

(1) 石核の概要

当報告対象地区においては、5例の出土が確認された。報告対象外の地区においては、現在整理作業中であり、詳細な実態は報告Ⅱに委ねたいのであるが、その中でも現在3例の石核を確認することができたので(第138図)を使い、この機会に報告しておきたい。なお具体的な出土地点については、他の石核と合わせて(第9表)に一括した。

1. 形状より推定して直径6~7cm大の円錐を素材とした石核である。石核としての構成は、素材面及び作業面という単純なものであり、特別に剥離平坦打面を設けるようなことはしていない。要するに、錐面上を直接加撃することにより、剝片を生産している石核である。a面は作業面であり、複数の剥離面の切り合いで認められ、縁辺部の剥離には階段状に止まる小刻な剥離が顕著に認められる。打点は錐面上の周囲を巡るように移動していく、そのため形状は半球状を呈する。
2. 亜角錐の自然錐を素材とした石核である。石核としての構成は、素材面(打面としての機能をもつ)及び2面の作業面となる。作業面は、c面に対し左右両面に対称して位置する。a面は主に剥離作業が行われた作業面であり、複数の剥離の切り合いで認められる。縁辺部の剥離には、階段状に止まる小刻な剥離が顕著に認められる。打点は側縁を巡るように移動していくが、完全には巡っていない。b面はもう一方の作業面であり、数面の剥離痕が認められる。
3. 円錐を素材とし、錐面上を直接加撃し剥離作業を行っている石核である。a面は作業面であり、剥離作業は左右2方向より行われている。c面に接する剥離作業痕は、複数の剥離面の切り合いで認められ、縁辺部には階段状に止まる小刻な剥離が顕著に認められる。なお打点部付



第138図 他地区出土の石核 (4)

近には、作業面方向からの加撃により、階段状に止まる粗雑な打面調整を施している。d面に接する剝離作業痕は2面の剝離面よりなり、両剝離作業痕は作業面上において切り合はない。

(2) 石核の分類

石核の分類基準については、打面の位置及び剝片剝離方向により分類した。

石核を分類すると、大別して石核Ⅰ～Ⅲに分類することができる。以下分類案を説明する。

石核Ⅰ：円錐及び亜角錐を素材とする石核である。打面調整は主に施していないが、粗雑な調整を施している類例もある。打点は作業面の周囲を移動している。そのため作業面に残る剝離方向は多方向からの加撃による。残核の形態は、素材の形状をよく留めている。
(第84図1・第139図1～4・第138図1～3)

石核Ⅱ：扁平な剝片を素材として、素材の主要剝離面を作業面としている石核である。打面の転位は認められず、背面の隕面及び剝離面上を直接加撃している。剝離方向は、主に両側縁方向より長軸に対し直交するように施されている。そのため残核の形態は扁平な指円形及び三角形状を呈する。(第49図64・第81図1～2・第140図1～3)

石核Ⅲ：節理に直交する剝離平坦打面を有する石核である。作業面は1面あるいは表裏2面存在し各々打面上及び素材面上を加撃面として、節理にそって、並列ぎみに剝離作業を行っている石核である。そのため残核の形態は、下面に素材面を残す扁平な板状を呈する。
(第141図・第49図63)

(3) 石核の観察

以上のように分類された石核をここでは(第139～141図)の石核剝離面構成図及び(第142図)の打撃方向度数分布図等を用い、石核の有する諸属性をより具体的に述べていきたい。そこで稿を進めるにあたり、石核剝離面構成図に用いている記号(\uparrow ・ \downarrow ・ \leftrightarrow)、剝離面中の数字及び打撃方向度数分布図の説明をしておきたい。石核剝離面構成図に示されている記号は、剝離面相互の関係を表したものであり、剝離面に記されている数字は、剝離の順番を示している。なお図中に示されている剝離面には、縁辺部に施された小刻な階段状剝離等は省略している。以下記号を説明する。

「↑」一剝離面の切り合関係を示す記号であり、剝離の「新、旧」関係を示す。「○」印は、切り込んでいる剝離面を表し、「|」印は、切り込まれている剝離面を表わす。

「↓」一矢印の方向に向けて、剝離していることを示す。

「↔」一剝離の方向と、打点の所在を表す記号である。「↔」の方向は、剝離の方向を示し、「•」印は、打点の位置を示す。

作業面に残る剝片剝離痕より観察できる、打撃方向の傾向を把握することを目的としたグラフ(注5)が作業面打撃方向度数分布図である(第142図)。石核Ⅰに関しては、最終剝離時に使用された打面を基準に、中心を求めた。石核Ⅱに関しては、長軸線をc-g線に置きかえ中心を求めた。

そして、石核Ⅱに関しては、打面の両端を結ぶ直線を基準とし、中心を求めたため、長軸線がc—g線に置きかえられる結果となった。

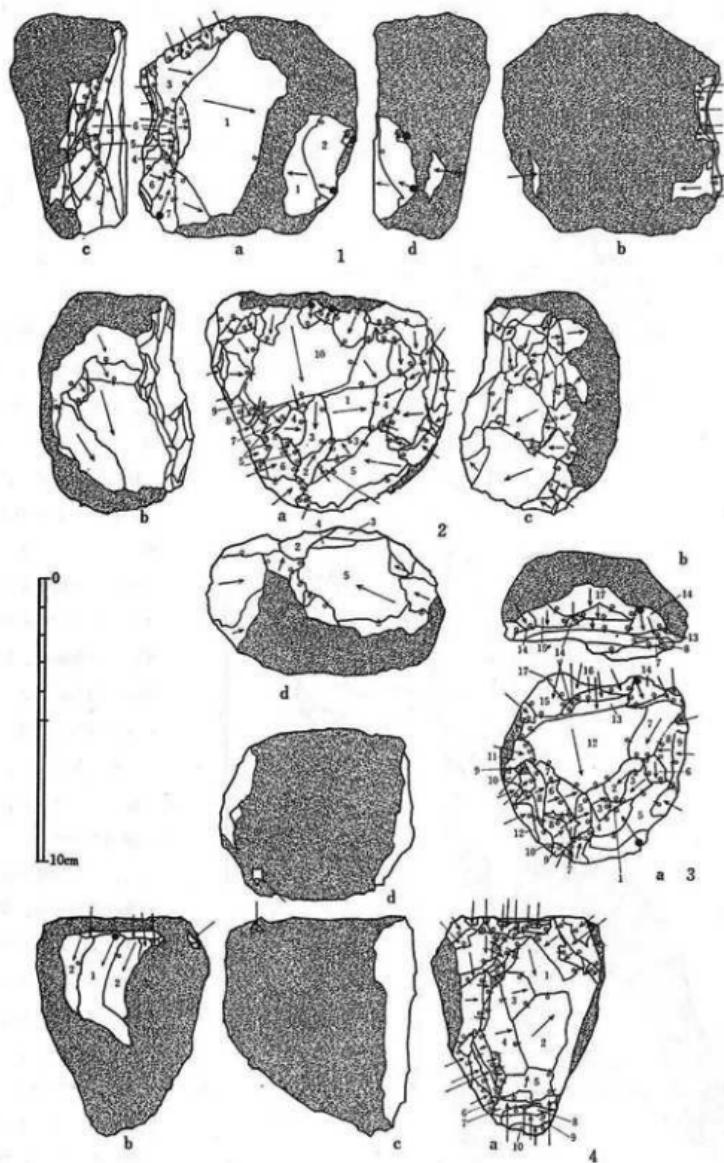
以下分類案に従い、説明したい。

a. 剥片剥離の進行について

石核Ⅰ（第139図）

1. 自然礫を素材とし、礫面上を直接加撃し、剝離作業を行っている石核である。その作業痕は、素材の一面に2面設けられていて、左右2方向より剝離作業が進められている。2つの作業剝離痕は切り合はず、そのため作業痕の新旧関係はわからない。c面側の作業痕より述べれば、剝離は素材の節理に沿うように、面1が剝離され、連続的に面2・面3と剝離している。剝離の方向はほぼ同方向である。それ以後の剝離は、さほど大きな剝片が剥ぎ取れたとは思えず、端部が階段状に止まる小さな剝離痕を残している。その間打点は左右に移動している。剝離の終末段階には理想的な目的剝片を得るための試みとして、粗雑な打面調整を施したり、作業面上端部にみられる剝離方向のまったく異なる複数の剝離を施したりして、新たな加撃点を探している。最も大きな剝離面は、面1であり、長さ37mm、幅66mmを計るこの剝離は、剝片のみを目的とするだけではなく、作業面作成を意図しているのであろう。d面側の作業痕は、3面の剝離面と1つの加撃痕よりなる。加撃痕は作業面に隣接し施されていて、加撃の力がおよばなかったものと思われる。作業痕の加撃方向は、c面側の加撃方向と逆方向であるが、同一軸線上にある。同石核は、石核Ⅰの初期段階の形状を示す石核である。2つの作業痕の剝片剝離作業が、進行すれば、2・3等の典型的な石核Ⅰの作業面の形状を示すものと考えられる。
2. 形状より考へるに剝片を素材にしたものとは考えられず、拳大の円礫を素材とした石核である。石核としての構成は、礫面（打面としての機能を有する）及び作業面という単純なものである。打点は全周を巡るように加撃点が移動している。番号は剝離の順番を示しているのであるが、同一条件を持つ剝離面が多数存在し複雑化するために、確かなものにのみ番号を示した。剝片剝離方向は、細分すると3方向に分けることができる。a作業面に残る剝離方向を分析すれば、b面方向からのもの、c面方向からのもの、上部からのもの等に分けられる。各々条件のよい加撃点を探すように打点を移動させている。また各剝離面を節理面との関係より観察すれば、半順目であり節理面を利用し剥ぎ取ろうとしていることがわかる。b面は他の剝離面と異なり、剝離の切り合はず認められず、その中でも比較的大きな平坦な剝離面が目立つ。a面中にはb面方向の加撃により剝離されている剝離面があり、b面が一時期打面として機能していた可能性をもっている。c侧面方向からの加撃は複数の小さな剝離面よりなり、素材面付近の剝離は節理面に規制され、階段状に止まるものが認められる。素材面との境には粗雑な打面調整が認められる。
3. 形状より推定して、直径6～7cm大の円礫を素材とした石核である。石核の構成は、礫面（打面としての機能を有する）及び作業面という単純なものである。剝離の進行を順に追いか

順序の順序

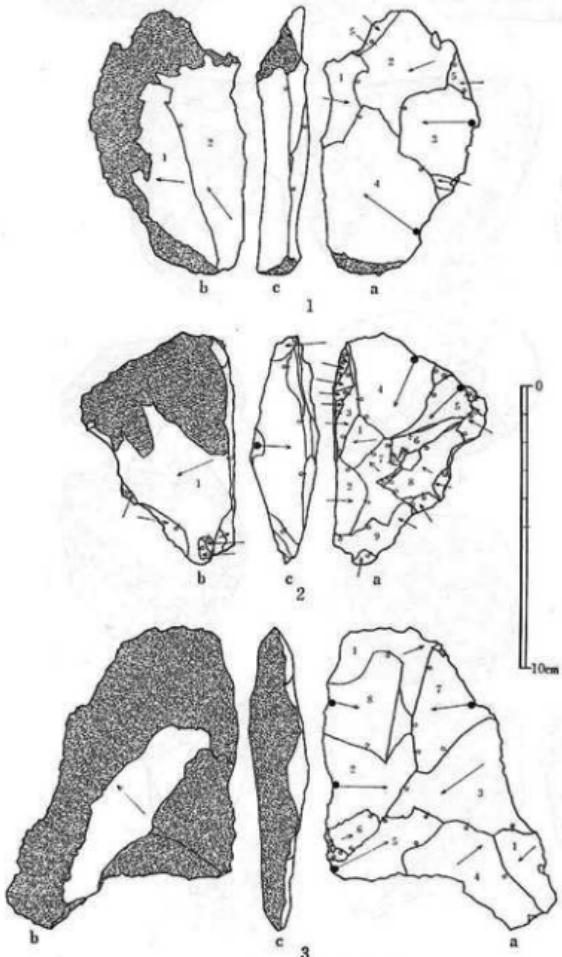


第139図 石核 I 剥離面構成図 (3分)

けていく。最も古い剥離面である面1をわずかに残し、そこを切り込む剥離が、下半部に集中している。打点は下部の周囲を巡るように移動して最終的には、上半部に移動している。(註6)また節理面との関係を観察すれば半順目であり、節理を利用しようとしているために剥離面の末端が、階段状を示す剥離が顕著にみられる。

4. 他の石核Ⅰと異なり、亜角礫を素材として選び、a・b両面に作業面をもっている石核である。作業面より見れば

逆三角形状を呈し、そのコーナーの稜線上を主に加撃している石核である。a面の作業面に残る剥離面を分ければ、中央に残る剝片剥離痕と、それを切り込む階段状剥離痕とに分けられる。剥離の順を追っていけば、①かなり大きな剥離である面1をまず上部からの加撃により剥離し、同剥離面を切り込むようにc面方向から面2～4の剥離を施した後、②下部のコーナーに打点を移動させている。そして、その剥離の後にc側面方向から、側縁を巡るように打点を移動させていている。③そして、上部からの加撃に移り、最後に上部右コーナーの剥離で作業は終了している。②③の作業においては、コーナーをうまく利用して



第140図 石核Ⅱ剥離面構成図 (3)

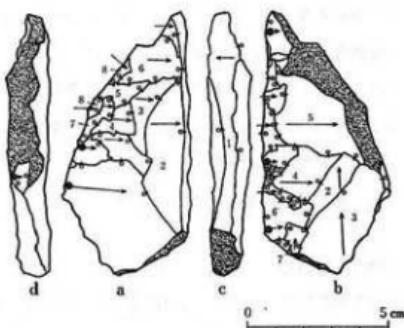
全周を巡るように剥離を施しているのであるが、その剥離が全周に至っていない。b 作業面にはd面を打面として少数の剥離面と1つの加撃痕が残る。b面が作業面として適していなかったのだろう。節理面より観察すれば、剥片剥離の方向は節理に対し順目であり、節理を利用して作業していることがわかる。

石核Ⅱ（第140図）

1. 剥片を素材とした石核である。b面に残る面1～2は、素材剥出を目的とする連続的な剥離作業痕と思われる。b面には、素材の剥離面として面1が認められ、剥離作業は右側縁方向より面2～5と剥離作業を進めている。そのため残核の形状は、扁平な梢円形を呈する。
2. 剥片を素材とした石核である。b面に残る面1は、素材剥出を目的とした剥離作業痕と思われる。a面には素材の主要剥離面である面1が認められる。剥離作業は、まずc側面方向より進められ、側縁を巡るように打点が移動している。c面にはb面方向からの加撃による折断面が存在し、作業面の打撃点をとばしている。節理との関係を観察すれば、半順目の剥離作業である。^(註6)
3. 明瞭な素材の剥離面は残さないが、形状より考えて剥片を素材とした石核である。b面には節理面に規制をうけながらも、素材剥出を目的とした剥離面を残す。a面には左右両側縁方向よりの加撃により、長軸線に直交するように剥離作業を行っている。そのため残核は不定形ながらも、長軸線を基準にして扁平な梢円形を呈する。節理との関係を述べれば半順目の剥離作業である。^(註6)

石核Ⅲ（第141図）

a・b両面に作業面を持つ石核である。素材に最初に加えた剥離は面1である。面1は打面として準備したものである。a面は面1を打面として用いて、d面の縁面上を直接加撃している。剥離の方向は面1に直交するように剥離が進行している。打点はd面の縁面上を巡るように移動している。b面はa面と異なり、面1を打面として用いて打点を移動させながら、d面の縁面を切り込む

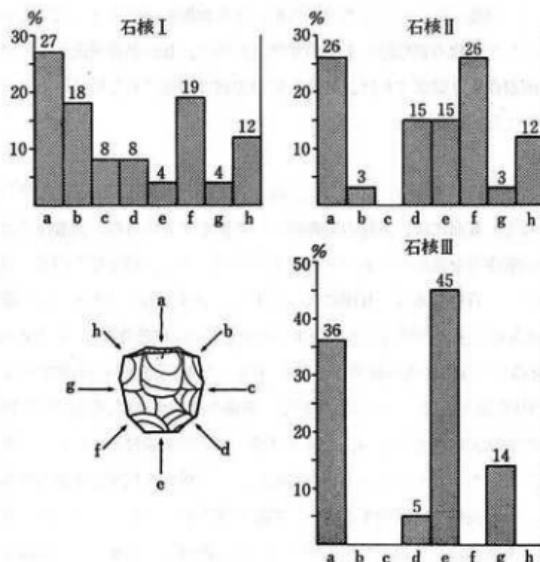


第141図 石核Ⅲ剥離面構成図 (34)

ように剥離作業が進行している。剥片剥離は節理をうまく利用し、節理に対し順目である。例外的な加撃方向による剥離面として、面2～3があげられる。剥離の最も初期の段階に剥離された面であり、面1より先行する剥離面である可能性がある。

b. 作業面打撃方向（第142図）

作業面の打撃方向をグラフ化すると（第142図）となる。石核Ⅰ類は、全周より剥離作業を施



第142図 石核作業面剥離方向度数分布図

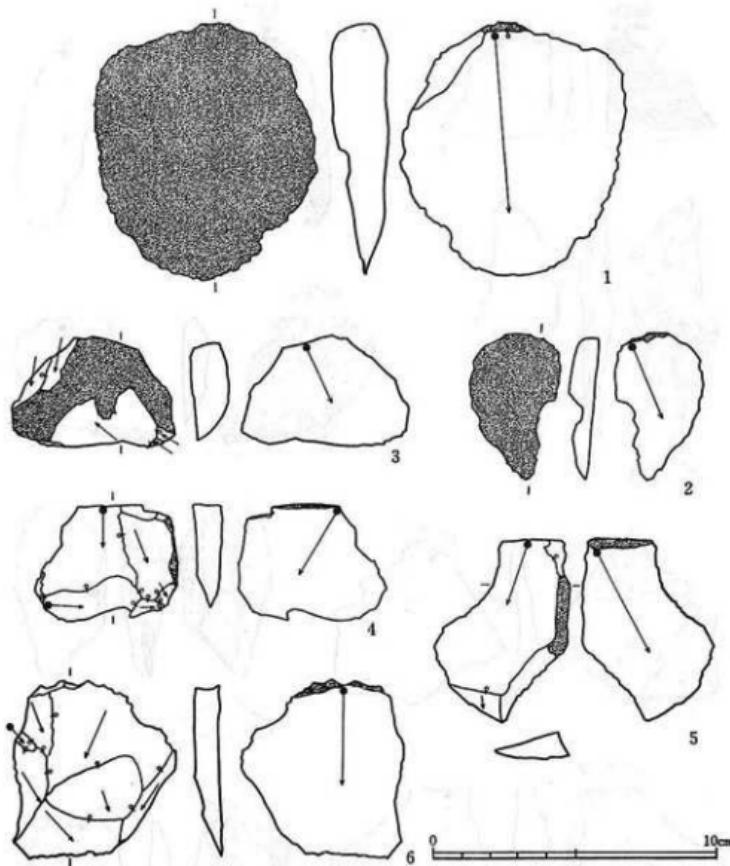
しているため、さしたる特徴はみられない。また a・b 方向に剥離が片寄るのは、最終剥離に近いからであろう。石核Ⅱは、a 及び d～f 方向に剥離が集中しているが、それは長軸線を保つように両側縁より剥離作業を展開させているからである。その証拠に長軸線上である g・c 方向からはほとんど剥離は施されていない。石核Ⅲは a 及び e 方向からの打撃が、群を抜いて多く、全体の中で 80% 以上の比率を占める。それは準備された打面からの加算による a 方向からの剥離と、礫面上より打面に直交するような加算による剥離とに 2 分され、またその剥離が打点を移動しながらも、並列ぎみに打面上を移動しているためである。

Ⅲ 剥片について

当報告対象地区においては、473点の出土が確認され、その内計測可能な277点を資料操作の対象とした。また剥片と碎片との分離基準であるが、一括して長さ幅とも 1 cm 未満は碎片として資料操作の対象外とした。

(1) 剥片の分類

剥片の分類基準としては、打面が礫面よりなるものをⅠ類、打面が剥離平坦打面よりなるものをⅡ類とし、調整打面よりなるものをⅢ類とした。背面における礫面の有無によりさらに細分した。なお剥片の中には、板状の素材より剥離したと思われる数点の剥片が認められるが、点数が少なく、今回分類の対象外とした。以下分類を説明していきたい。



第143図 刈片I類剝離面構成図(3分)

I i類：背面及び打面が全て礫面よりなる剝片である。

(第68図2・第76図44) (第143図1・2)

I ii類：打面は礫面よりなるが、背面は礫面と剝離面より構成される剝片である。

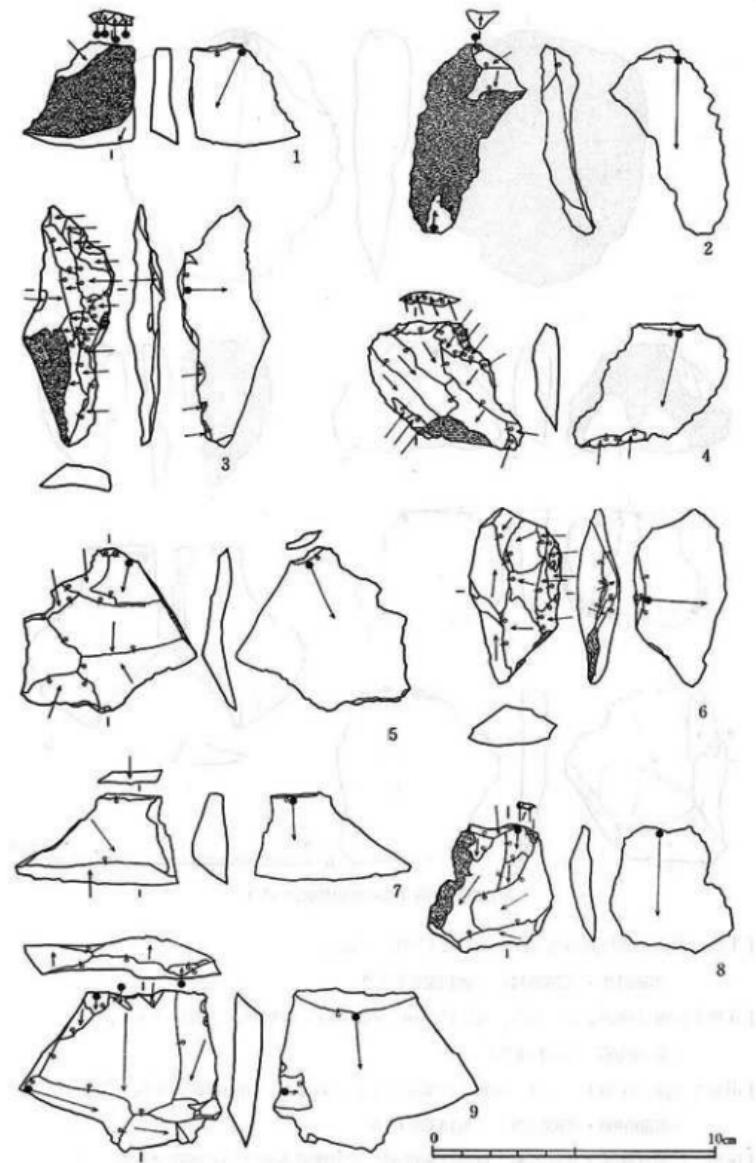
(第50図65) (第143図3)

I iii類：打面は礫面よりなり、背面は剝離面で構成されるが、側面に礫面を残す剝片である。

(第50図66・第93図23) (第143図4・5)

I iv類：打面は礫面よりなるが、背面は剝離面のみで構成されている剝片である。

(第77図45) (第143図6)



第144图 刮片 I·II 预剥离面構成図 (上)

II ii類：打面は剝離平坦打面よりなり、背面は礫面と剝離面より構成される剝片である。

(第68図3) (第144図2)

II iii類：打面は平坦剝離打面よりなり、背面は剝離面で構成されるが、側面に礫面を残す剝片である。(第50図69・第82図3・第93図24) (第144図5)

II iv類：打面は剝離平坦打面よりなり、背面は剝離面のみで構成される剝片である。

(第51図71・第77図48・第130図2) (第144図7・9)

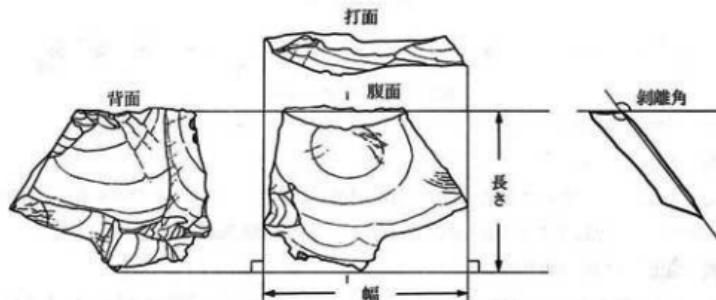
III 類：打面は調整打面よりなる剝片である。資料が少量であり、細分はこころみなかった。

(第50図67～68・第51図70・第64図4・第76図42・第82図5) (第144図1・3～4・6・8)

(2) 剥片の観察—数値的検討—

今回剝片の計算値的検討を行うにあたり、分析対象を剝離角・長さ・幅に限定し分析を行った。

また稿を進めるにあたり計測値の基準を(第145図)に示しておいた。以下順に説明していきたい。



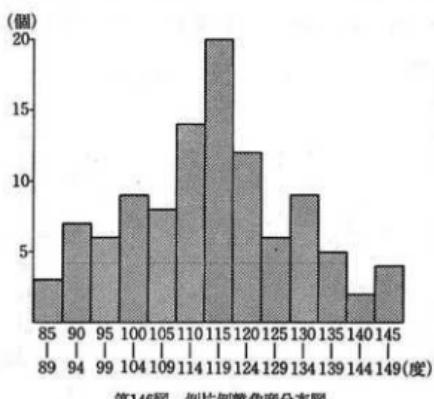
第145図 剥片計測位置模式図

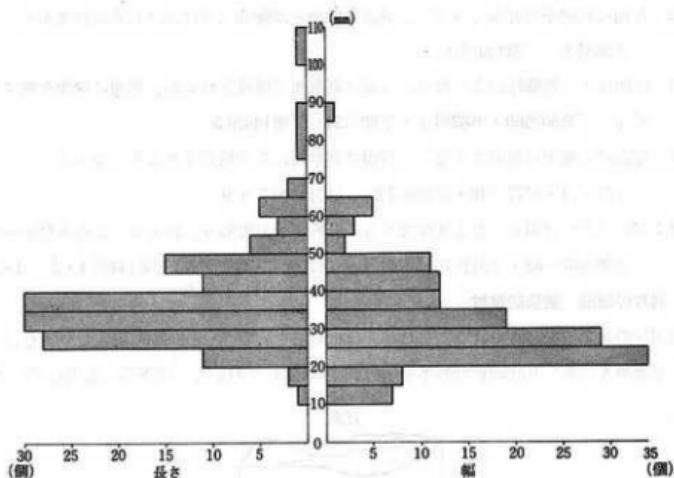
a. 剥離角 (第146図)

剝離角が計測できる剝片は、105点を数える。角度は、85～149度の間に分布する。集中的に分布するのは、110～124度の間であり、46点を数え、全体の44%を占める。また90度より120度までに分布する剝片は、全体の61%を占める。平均値は115.6度である。

d. 長さ (第147図)

長さが計測できる剝片は、142点を数える。長さは、10～90 mmの間に分布する。集中的に分布するのは、20～60 mmの間であり、117点を数え全体の82%を





第147図 刃片長幅値分布図

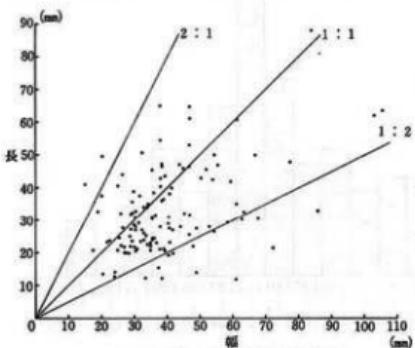
占める。平均値は32.2mmである。

c. 幅 (第147図)

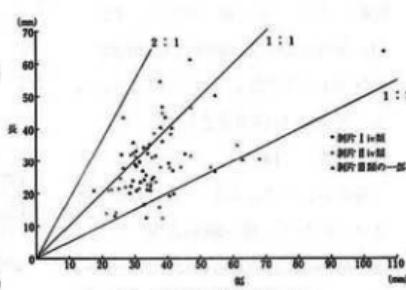
計測できる刃片は、150点を数える。10~110mmの間に分布する。集中的に分布するのは、20~50mmの間であり、125点を数え全体の83%を占める。平均値は38.5mmである。

b. 長／幅比 (第148~149図)

長幅ともに計測できる刃片 117 点をグラフに表わした。その結果、刃片の主体が 1:1 の軸線より、1:2 の軸線の間にかたよっていることがわかる。これは刃片の幅が長さにくらべわずかに長い刃片が多いことを示している。また分布の中心は、長さ 2 cm より 4 cm 間、及び幅 2 cm より 5 cm 間の両者が交わる空間に集中している。同空間に集中しているのは、I iv、II iv 及び背面が



第148図 刃片長幅比分布図



第149図 目的刃片長幅比分布図

剥離面よりなるⅢ類の剥片であり、他の剥片にくらべれば比較的定形的剥片と言える。言い換えれば剥片Ⅰiv、Ⅱiv及びⅢ類の一部は目的剥片と言える。そのため他の剥片は、石核調整及び石器調整剥離により生じた剥片の可能性が強い。

Ⅴ まとめ

前項において、石核及び剥片の分析作業を行ったが、両者の成果を踏まえ、龜井遺跡における剥片生産技術を復原していきたい。

(1) 剥片剥離技術

龜井遺跡より現在までに確認できた石核は、わずかであるが、各々諸特徴を持ち、大別して石核Ⅰ～Ⅲまでに分類することができた。前項において各類の諸属性についてふれたが、とりまとめてみたい。

石核Ⅰは、形状より推定して、拳大の円礫あるいは亜角礫を素材として、主にその一面に作業面を設定し、礫面上あるいは、任意的な調整打面上を加撃し剥離作業を行っている。またその打点は、作業面の周囲を巡るよう移動している石核である。石核の構成を見れば、礫面（打面としての機能を有する）及び作業面という単純な石核である。石核Ⅰの剥離作業初期の状況をよく残しているものが、（第139図1）の石核である。1は、作業面を自然礫の一面に設定した後に、左右両方向からの加撃により、剥離作業を行っている。そして、剥離の最終段階には、剥離作業がゆきづまり理想的な新しい打撃点を探すため、まったく別の方向に打点が移動している痕跡を、よく留めている。そして、そのまま作業が進行していくと（第139図2・3）のような石核になるのであろう。言い換えると、石核Ⅰは、同一作業面内で剥離作業がゆきづまった場合、作業面再生作業簡略化のため便宜上打点を移動させたり、打面調整を行う石核とも言える。

石核Ⅱは、大型の剥片を素材としているところに、石核Ⅰと隔りがます認められる。それは、作業面に残る素材の主要剥離面、及び打面上に残るネガティブな剥離面より推定される。すなわち石核Ⅱには、石核素材生産という工程が含まれているのである。また石核を作成できるような長幅9cmの大さきを有する（第143図1）のような剥片は、数点出土しているのみであり、またその剥片を生産できるような石核も確認されていない。そのため、石核Ⅱの素材は、他地域からの搬入によるものと考えるのが妥当であろう。石核Ⅱの作業面は、素材の主要剥離面側に設けられており、素材の背面を打面として両側縁より加撃している。またその剥離方向は、剥離方向度数分布図に示されたように石核の長軸線に直交するように剥離されていて、長軸線に平行するような加撃はさほど認められない。そのため石核の形態は不定形ぎみながらも、梢円形及び三角形を呈する石核である。また視点を変えて石核Ⅱの形態及び技法を見れば、尖頭器状石器の未製品と類似する点が、しばしば見られる。（第135図）に示した尖頭器状石器未製品の製作工程を簡単に説明すれば、①まず腹面の成形がなされ、その後に②背面の礫面を削るよう剥離を施した後③両面に押圧剥離を施して仕上げている。このような技法により製作される石器であるため、

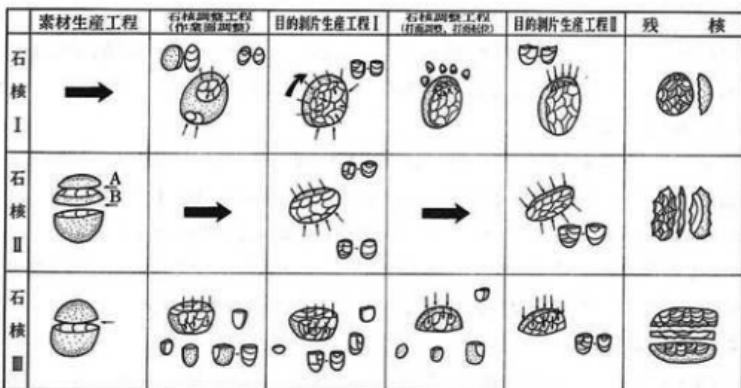
将来石核Ⅱの資料が増加した際には、尖頭器状石器の未製品との間に、分類しかねる資料が現わることが想定できる。そして、思考を進めると、石核Ⅱの残核類中に残核転用として、尖頭器状石器のトール・プランクとなるものが存在する可能性を指摘できるだろうが、なにぶん資料が少量であり速断はできない。そのため可能性を指摘して今後の資料の増加を待つことにする。

石核Ⅲは、他の石核と異なり、石核素材製作時に設けた平坦な剝離面を打面として使用している石核である。その剝離は節理面に対し直交するように設けられている。石核の長さと幅は、平均すると4cmと10cmであり、その素材を想定すれば、かなりの長さと幅と厚さを持つ大きな剝片あるいは、分割礫を想定しなければならない。そして石核Ⅲの素材も石核Ⅱの素材と同様確認されている剝片の中には、その条件を満たす剝片は見あたらず、素材生産工程を他地域において行われでき上がった剝片、あるいは分割礫のみを撮入したものと考えられる。石核Ⅲの作業面は、一面あるいは表裏二面存在し、各々剝離平坦打面上及び下面の礫面上を打撃点として、節理に対し順目(註6)に並列ぎみに剝離作業を行っている。またその剝離方向は剝離方向度数分布図(第142図)に示しているように、平坦打面に平行する長軸線に直交し、打面上、あるいは礫面上から打面転位を行なながら加撃されている。また石核の中には、同一作業面内で上・下両方向からの加撃による剝離が切り合う事例があり、石核Ⅲは、作業面再生作業を簡略化するための便宜上、打面転位を行なっている石核といえる。その場合、同一作業面では同一方向の剝離で完結するのが、一般的なようである。(第141図)の石核の場合は、作業面を裏面に転位した事例である。また素材が異なるれば、石核素材製作工程の便宜上打面が簡略化されることも考えられる。例えば、素材面に加撲点として理想的な平坦面が存在するような場合、改めて平坦な剝離打面を設けることは行わず、そのままその平坦面を使用する石核も、将来現われることも想定できるであろうが、同種の石核は、石核Ⅲの範疇の中でとらえられよう。石核Ⅲに類似する石核として、大福、桜ヶ丘(註11)第1地点土坑1等の遺跡より出土している石核の中に類似する石核が認められる。

以上のような剝片剝離技術を有する石核及び剝片の剝離工程を(第150図)に試みとして模式図にまとめてみた。この模式図は、現段階で推定できる工程図であり、今後の剝片剝離技術研究の一つの叩き台としたい。

剝片剝離生産の順序を、工程順に理解するために、工程を大別して、石核素材生産工程、石核調整工程(作業面調整)、目的剝片生産工程、石核調整工程(打面調整、打面転位)、目的剝片生産工程、合せて5工程に分割しましてみた。以下工程順に追ってみたい。

石核素材生産工程: 素材生産工程を持つ石核は、Ⅱ及びⅢである。素材生産工程における資料は、現在確認できていない。そのため図中に表わした分割法は、石核に残る素材の剝離面より推定したものであり、今後の資料の増加を待ち検討していきたい。例えば、石核Ⅲの場合母岩を2分割するように表わしたが、3分割あるいは4分割する場合も考えられる。石核Ⅲの素材生産法は母岩に加撃を加え大型の剝片を生産する。図中においてはA、B2つの素材を生産するように表わしたが、それに規制されるものではない。



第150図 剥片生産工程模式図

石核調整工程（作業面調整）：作業面作成を意図した作業工程である。同工程の経過を経る石核は、石核Ⅰ、Ⅲである。石核Ⅰの場合、自然縫的一面を作業面に見立て、縫面上を直に加撃する。その加撃により剥離される剥片は剥片Ⅰi類である。そして剥離が進行すると、Ⅰii～iii類の剥片が剥離されると考えられる。石核Ⅲの場合、石核素材生産時に剥離された平坦な面を打面として、打面上で並列するように打点を移動させながら、節理に対し順目にして作業面作成を意図した剥離作業を行う。この作業により生じる剥片は、剥片Ⅲi～iii類と考えられる。剥片Ⅲ類の平坦打面は、石核Ⅲの剥離平坦打面のなごりであろう。

目的剥片生産工程Ⅰ：この工程は、石器生産に使用する剥片の生産を意図した工程である。作業面上に存在する縫面を排除された石核Ⅰは、作業面の周囲を巡るように打点を移動させ剥離作業を進行させる。この作業は、作業面再生作業を便宜上省略化させている。またこの作業は、次の工程である石核調整が必要となるまで繰り返される。この剥離作業により剥ぎ取られる剥離は、主に剥片Ⅰiv類と考えられる。石核Ⅲの場合、母岩より剥ぎ取られた剥片A、Bを石核素材としてその主要剥離面を作業面とし、左右両側縫より剥離作業を進める。そのため作業が進行すると梢円形の形態を呈する。この時剥離される剥片は、主にⅠiv類の剥片と考えられる。また素材Bより剥ぎ取られる剥片の中には、剥片Ⅲiv類も含まれる。作業面調整を終えた石核Ⅲは、同工程を継続するように剥離作業を続ける。この時剥ぎ取られる剥片は、主にⅢiv類と考えられる。

石核調整工程（打面調整、打面転位に伴なう。）：目的剥片生産工程が進行すると、打面と作業面のなす角度はだいぶ増大することとなり、剥離の進行に対して大きな障害となる。^(第132)そこでこの事態を回避するために、打面調整を施したり、作業面を他所に移動したりして、次の目的剥片生産工程に備える工程である。同工程を経る石核はⅠ及びⅢの石核である。石核Ⅰの場合は、打面部に任意的な調整剥離を施し打面を形成し剥片剥離を行ったり、(第139図4)の石核の事例の

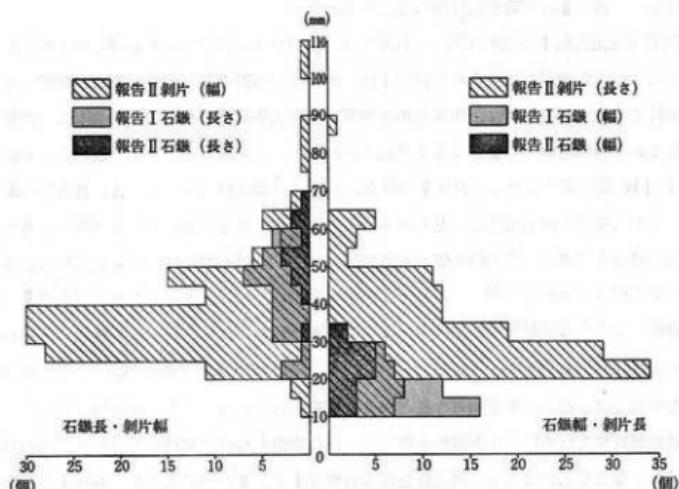
ように作業面を他所に転位し、目的剝片生産に備えている。また石核Ⅱの場合、同一作業面での剝離がゆきづまった場合、他所に作業面を転位し新たな作業面を形成する。その場合、旧作業面に対し、対称関係の位置を呈する位置に設置される事例が多い。作業面作成時には剝片Ⅰi、ii類が主に剥ぎ取られるだろう。

[目的剝片生産工程]：石核調整工程を経た石核Ⅰ及びⅡの石核は、新たに設けた作業面及び調整打面上を加算して剝離作業を進める。その時剝離される剝片は、石核Ⅰからは、剝片Ⅰ類が剥ぎ取られ、石核Ⅱより剥ぎ取られる剝片は、剝片Ⅰiv類が主な剝片となるであろう。

以上亀井遺跡の剝片剝離技術についてかいつまんでまとめてみた。今後の課題として、詳細な時間的・空間的な検討が必要であるが報告Ⅲの整理作業を踏まえ今後検討を行っていきたい。

(2) 剥片の生産目的

剝片生産技術の復原で、石核同様に重要な資料操作対象となるのが剝片である。これらの剝片は、長幅の大きさにおいて石核の作業面の最大長幅内にはほとんど納まり、亀井遺跡より出土した石核Ⅰ～Ⅳにより生産された剝片と思われる。また剝片の生産目的についてであるが、剝片と石器の関係を表わす一つの試みとして(第151図)を作成してみた。(第151図)は、剝片の幅と石核の長さの関係と、剝片の長さと石核の幅を表わした図である。この作業には、一つの前提条件がある。それは、剝片より石器を製作する場合、剝片の幅を石核の長さに置き、また剝片の長さを石核の幅に置きかえて石器を製作することが一般的ではないか、ということである。それは、石核に残る素材の剝離面を観察すればわかる。例えば、(第52図74・77、第81図50)の石核に残る



第151図 石核、剝片長幅分布図

素材の剥離面の打点の位置を推定すれば、石器の長軸と打点の関係は直交しているのである。この現象は、生産される剝片の中で横長状の剝片が多いためと言える。また石器を資料操作するにあたり、今回の報告点数では量的に少量であり、報告^(注13)の資料を加え検討することにした。2つの計測値より読みとれる事項について述べれば、石器の長・幅値は、剝片の長・幅値の中に納まっていることである。言い換えれば、これらの剝片より石器を製作することができるということを示している。もっとも剝片より石器を製作する時に調整剝離を施すために、若干石器の数値に上乗せしなければ本来の石器を製作した剝片の数値を求めるることはできないが、これらの剝片より石器を製作したという仮説を否定することはできないであろう。そしてこれらの剝片を生産した石核^(注14)～^(注15)は、石器を生産した石核と言える。また石器と同様に石核に限っても、この石核より生産されたものと考えて差し支へはないであろう。

以上のように、亀井遺跡より出土した石核は、石器及び石錐を生産するための石核であることが判明した。またそのことより、亀井遺跡より出土した石核では生産できない石器の存在が、明らかになる。例えば石槍等の大型石器があげられる。整理作業途上の現段階において、石槍を製作できるような条件を満たす剝片は確認されていないため、他地城よりの搬入品と考えねばならない。それは、亀井遺跡の石器生産の二面性を肯定するものであり、亀井遺跡を含めた河内の弥生時代の諸集落間と、サヌカイトの原産地である二上山地城との比較検討が必要となるであろう。これは、弥生時代の生産・流通・分配等の実態を解明するにあたり、非常に有効な方法となるであろう。またこの作業を進めるにあたり、石槍等を中心とした、サヌカイトの科学的な原産地同定が有効な手段といえる。

最後に、本稿をまとめるにあたり、御教示を賜わった佐藤良二、森本晋、蜂屋晴美、山中一郎の各氏に、末筆ながら記して感謝したい。

(注)

註1 亀井遺跡「石器の生産と消費をめぐる二つのモデル」「考古学研究」第21巻第2号 1974

「弥生社会の体系的理理解に關する認識論」「大阪文化誌」第2巻第1号 1976

「弥生中期社会の形成—畿内社会の形成とその構造」「歴史公論」3.1978

「亀井遺跡の石器生産—畿内・弥生集落における一様相一」「亀井・坂山」

大阪文化財センター 1980

註2 山中一郎「森の宮遺跡出土の石器について」「森の宮遺跡」姫波宮址調査会 1978

森本晋・蜂屋晴美「喜志遺跡79-1区土塁3の遺物について」「喜志遺跡・東坂田遺跡調査概要」

大阪府教育委員会 1981

註3 剥片剥離作業面については、略称として、「作業面」と呼ぶことにする。

註4 これらの表示法については、松沢氏により考察されている。

松沢重生「石器研究におけるテクノロジーの一方向」「考古学手帖」7・1959

「石器研究におけるテクノロジーの一方向(II)」「考古学手帖」12・1960

註5 剥離方向度数分布図については、「二上山・櫻ヶ丘遺跡」に用いられているものを参考にした。

松藤和人ほか「二上山・櫻ヶ丘遺跡」奈良県立橿原考古学研究所 1979

- 註6 節理と石器の関係については、松藤和人氏による分析研究があり、その用語（頸目・半順目・逆目）に準ずる。
- 松藤和人「再び“瀬戸内技法”について」『二上山・桜ヶ丘遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
1979
- 註7 計測値の基準は、林謙作氏の基準に準ずる。つまり、剝離角は、打面と打面から下ろした直線上での剝離の末端が打点をはさんでなす角度。長さは、打面の両端を結ぶ線上に上下両端を投射した距離。幅は、剝片の左右両端でもっとも飛び出した部分に打面からおろした垂線のあいだの距離である。
- 林謙作「第3地点第4文化層の出土遺物」『星野遺跡—樹木県星野遺跡
第3次発掘調査報告一』ニューサイエンス社 1970
- 註8 橋本正「石器の機能と技術」「日本の旧石器文化」1 総論編 雄山閣 1975
- 註9 近く報告予定である、近畿道亀井遺跡より出土している石核¹も、計測の範囲に入れた。
- 註10 近く報告予定である、近畿道亀井遺跡に、その類例が認められる。
- 註11 増田一裕「Ⅲ遺構と遺物—5 大幅遺跡の石器」「大福遺跡」奈良県立橿原考古学研究所 1978
- 麻柄一志 古森政次「第4章出土遺物、第2節土坑1出土遺物」「二上山・桜ヶ丘遺跡」奈良県立
橿原考古学研究所 1979
- 註12 柳田俊雄・藤原紀敏「瀬戸内技法と石刃技法—調査技術のもつ意味—」『旧石器考古学』23 旧石
器文化講話会 1981
- 註13 高島徹・尾谷雅彦・寺川史郎・金光正裕・畠 鴨子・清原弘美「第Ⅳ章—遺構及び遺物」「亀
井・城山」大阪文化財センター 1980
- 註14 酒井龍一「亀井遺跡の石器生産一畿内・弥生集落における一様相—」「亀井・城山」大阪文化財
センター 1980
- 註15 二上山地域には、石槍の未製品を多量に出土する石器製作遺跡が確認されていて、今後同種の遺跡
出土石器との比較、検討が必要であろう。
- 高田勉「中谷遺跡」「ふたがみ」同志社大学旧石器文化講話会 1974

第9表 石核計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	出土地点	備考
第84図1・第139図2	413	I	78.85	55	442	サスカイト	H1、N7		
第138図3・第139図1	748	I	77.78	41	304	サスカイト	H4、SD-09E		
第138図2・第139図4		I	78.61	68	389	サスカイト	H7、SD-11E下層		
第138図1・第139図3	417	I	67.66	36	172	サスカイト	H7、SD-11E下層		
第81図1・第140図2	414	II	82.54	24	891	サスカイト	H1 ブロック土層最下層		
第49図IV・第140図3	416	II	107.72	22	1.5	サスカイト	H2、SD-03		
第81図2・第140図1	473	II	93.56	18	8.6	サスカイト	H1、ブロック土上面		
第49図63・第141図	178	II	93.46	15	6.1	サスカイト	H1、SD-03		

第10表 削片 I i類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	偏離角	重さ	石質	出土地点	備考
	630	50.6	32.4	7.8	143°	11.8	サスカイト	H1、ブロック土層	
第76図47・第143図1	682	88	84	20.7		149.7	サスカイト	H1、SX-02	
第68図2・第143図2	726			10.0		14.8	サスカイト	H1、SX-01	

第11表 削片 I ii類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	偏離角	重さ	石質	出土地点	備考
第50図65・第143図3	012	42.5	59.5	12.1		28.5	サスカイト	H1、SD-03	
	257	20.3	49.5	7.3	125°		サスカイト	H1、SD-06	
	338	21.7	30.1	6.7	118°	4.5	サスカイト	H1、SD-04	
	452	31.1	40.4	10.2	132°	10.4	サスカイト	H1、SX-02	
	561	20.7	48.0	4.0		3.9	サスカイト	H1	

第12表 削片 I iii類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	偏離角	重さ	石質	出土地点	備考
第50図66・第143図4	018	43	50.6	11.4	87°	23.7	サスカイト	H1、SD-03	
第93図23・第143図5	350	64.9	47.5	13.3		25.3	サスカイト	H1、SD-02	
	647	21.3	38	8.1	118°	4.8	サスカイト	H1	
第76図43	677	62	102.9	16.3	111°	88.3	サスカイト	H1、SX-02	調整痕あり

第13表 削片 I iv類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	偏離角	重さ	石質	出土地点	備考
	039	30.6	68		53°	23.8	サスカイト	H1、SD-03	
	128	28.9	30	5.0		2.3	サスカイト	H1、SD-03	
	128	22.4	25	4.9		2.8	サスカイト	H1、SD-03	
	128	25.7	34.5	4.1	128°		サスカイト	H1、SD-03	
	135	23.7	29.5				サスカイト	H1、SD-03	
	139	16	32.9	9.7	110°	4.2	サスカイト	H1、SD-03	
	144	29.5	31.9	8.4		8.1	サスカイト	H1、SD-03	

	145	20.6	30.6	6.5	87°	3.1	サスカイト	H 1、 SD-03	
	155	46.4	38.5	9.5	86°	6.6	サスカイト	H 1、 SD-03	
	157	21.8	35	7.4	123°	3.8	サスカイト	H 1、 SD-03	
	183			8.5		8.9	サスカイト	H 1、 SD-03	
	199	23.7	32.7	5.0	96°	3.5	サスカイト	H 1、 SD-04	
	254	25.1	33.6	5.8	124°	3.7	サスカイト	H 1、 SD-06	
	280	20	28.6	5.6	93°	2.7	サスカイト	H 1、 SD-06	
	290	26.5	54.5	8.3	115°	8.8	サスカイト	H 1、 SD-06	
	291			4.2		2.9	サスカイト	H 1、 SD-06	
	313	33.9	33.1	7.5	127°	5.1	サスカイト	H 1、 SD-06	
	334	23.9	35.5	8.7	139°	6.4	サスカイト	H 1、 SD-04	
	336	12.6	33.5	9.4	116°	5.0	サスカイト	H 1、 SD-04	
	339	28	28	7.5	118°	4.8	サスカイト	H 1、 SD-04	
	428	22	29.2	14.1	55°	1.6	サスカイト	H 1、 SX-01	
	433	28.9	40.3	9.8	92°	13.2	サスカイト	H 1、 SX-01	
	435	24.4	36.1	4.8	111°	3.6	サスカイト	H 1、 SX-01	
	436	33	30.5	6.6	107°	5.8	サスカイト	H 1、 SX-01	
	441	43.4	39.5	3.8	91°	7.0	サスカイト	H 1、 SX-01	
	451	63.3	105.5	15.8	88°	16.9	サスカイト	H 1、 SX-02	
	455	33.7	34.2	11.4	83°	9.7	サスカイト	H 1、 SX-02	
	459	20.7	17.3	3.3	143°	1.4	サスカイト	H 1、 SX-02	
	465	30.6	28.4	3.4			サスカイト	H 1、 SX-02	
	484			11.3		34.0	サスカイト	H 1、 SX-02	
	484					68.2	サスカイト	H 1、 SX-02	
	504	19.4	41.8	8.0	121°	6.7	サスカイト	H 1	
	527	32.2	26	5.3	100°	4.7	サスカイト	H 1	
	554			8.1			サスカイト	H 1	
	588	32.3	45.5	3.5	127°	3.9	サスカイト	H 1	
	597	21.3	34.1	7.6	115°	5.2	サスカイト	H 1	
	603			6.3	136°	6.4	サスカイト	H 1	
	633						サスカイト	H 1	
	638	31.5	36.6	5.2	102°	6.1	サスカイト	H 1	
第 77 図 45・第 143 図 6	681	61	46.9	10.6		34.4	サスカイト	H 1、 SX-02	

第14表 刺片 II ii類計測一覧表 (m/m · g)

図版 挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	傾角	重さ	石質	出土地点	備考
第 68 図 3・第 144 図 2	136	28	35.5	4.0	121°		サスカイト	H 1、 SD-03	
	156	24.3	36.1	9.6	110°	14.1	サスカイト	H 1、 SD-03	
	345			4.7		2.9	サスカイト	H 1、 SD-02	
	420	67.5	41.0	13.0	115°	16.0	サスカイト	H 1、 SX-01	
	563			4.7		2.9	サスカイト	H 1	
	568			9.7			サスカイト	H 1	
	611			8.1		3.6	サスカイト	H 1	
	637	22.3	25.9	25	77°		サスカイト	H 1	

第15表 剃片Ⅱiii類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	側面角	重さ	石質	出土地點	備考
第50図69	020	64.9	38	8.4	101°	22.0	サスカイト	H1、SD-03	
	048	46.9	44.1	5.6	115°	10.2	サスカイト	H1、SD-03	
	052	25.0	28.4	2.1	52°	1.2	サスカイト	H1、SD-03	
	057	37.3	31.7	6.5	127°	4.7	サスカイト	H1、SD-03	
	068	25.6	46.7	8.2	136°	10.5	サスカイト	H1、SD-03	
	090	41.2	14.9	9.0		11.2	サスカイト	H1、SD-03	
	101	13.4	48.3	9.4	104°	6.8	サスカイト	H1、SD-03	
	104	40.5	25	6	101°	4.8	サスカイト	H1、SD-03	
	121	47.7	35.3	9.9	101°	8.9	サスカイト	H1、SD-03	
	281	26.8	30.5	7.1	95°	3.2	サスカイト	H1、SD-06	
第93図24・第144図5	341	60.5	61.7	7.8		22.2	サスカイト	H1、SD-02	調整痕あり
	420						サスカイト	H1、SX-01	
	442	35.5	35.3	3.8	147°	4.8	サスカイト	H1、SX-01	
第82図3 第131図3	472	47.1	55.3	16.8	124°	28.2	サスカイト	H1、ブロック土層	調整痕あり
	476	62.0	64.0	12.8	105°	46.5	サスカイト	H1、旧平野川包合層	
	479	39.0	30.2	6.9	116°	6.1	サスカイト	H1、ブロック土層	
	492	27.1	29.4	6.6	99°	7.5	サスカイト	H1、ブロック土層	
	567			7.1	86°	6.1	サスカイト	H1	
	614	22.1	48	5.7	134°	4.7	サスカイト	H1	
	652	23.2	41.2	8.4	73°	6.7	サスカイト	H1	
	696	53.1	47.6	13.6	114°	34.6	サスカイト	H1、SX-01	
	790						サスカイト	H1、ブロック土層	

第16表 剃片Ⅱiv類計測一覧表 (m/m・g)

図版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	側面角	重さ	石質	出土地點	備考
第51図71・第144図7	017	32.0	58.0	12.0	97°		サスカイト	H1、SD-03	
	032	38.3	41	6.3	116°	6.9	サスカイト	H1、SD-03	
	034	38.6	35.8	15.0	115°	5.7	サスカイト	H1、SD-03	
	058	21.9	27	6.3	98°	3.1	サスカイト	H1、SD-03	
	067	28.7	53.3	11.6	120°	20.6	サスカイト	H1、SD-03	
	111	15.5	37.4	5.1	120°	3.3	サスカイト	H1、SD-03	
	122	22.2	31.2	3.6	56°	2.2	サスカイト	H1、SD-03	
	131						サスカイト	H1、SD-03	
	134	35	61.3	9.7		16.5	サスカイト	H1、SD-03	
	136	26.4	26.3	3.1	114°		サスカイト	H1、SD-03	
	138	20.9	22	3.9	145°	1.6	サスカイト	H1、SD-03	
	151	44.8	38.5	10.0	121°	12.9	サスカイト	H1、SD-03	
	153	31	35.3	6.1	118°		サスカイト	H1、SD-03	
	179	24.5	25.5	5.5	131°	2.3	サスカイト	H1、SD-03	
	195	44.5	49.6	8.7	108°	19.0	サスカイト	H1、SD-04	
	267	22.8	34	4.2	111°	3.9	サスカイト	H1、SD-06	
	279	25.6	28.8	3.3	122°	2.4	サスカイト	H1、SD-06	
	314			7.0		7.1	サスカイト	H1、SD-06	

第 77 図 48 · 第 144 図 9	33144	26.5	9.0 127°	8.9	サスカイト	H 1, S D -04
第 130 図 2	36229.0	22.7	3.4 132°	1.4	サスカイト	H 1, S D -02
	42731.7	47.2	6.7 107°	5.7	サスカイト	H 1, S X -01
	45456.0	71.0	10.0 128°		サスカイト	H 1, S X -02
第 77 図 46	475			88.8	サスカイト	H 1, 旧平野川
	48232.5	29.3	5.0 130°	4.4	サスカイト	H 1, ブロック土層
	48525.8	33.2	4.1 103°	3.4	サスカイト	H 2, 旧平野川
	48928	44.2	8.7 78°	9.8	サスカイト	H 1
	50627.8	40.7	5.0 101°	4.9	サスカイト	H 2
	52132.5	29.3	5.1 107°	2.9	サスカイト	H 1
	52623.1	34.8	5.3 117°	4.9	サスカイト	H 1
	55328	27.2	8.2 92°	6.8	サスカイト	H 1
	57314	24	5.4 138°	1.9	サスカイト	H 1
	59913.7	20.4	5.1 130°	1.5	サスカイト	H 1
	60230.8	30.8	5.1 108°	4.4	サスカイト	H 1
	60512.3	38.5	5.6 112°	3.9	サスカイト	H 1
	67023	37	6.4 47°	4.7	サスカイト	H 1, S X -01
	67621.2	25	5.0 91°	2.8	サスカイト	H 1, S X -02
	68515.2	27	5.1 112°	1.7	サスカイト	H 1, S X -02
第 77 図 46	79640.0	78.0	8.0 115°		サスカイト	H 1, S X -02

第 17 表 削片Ⅲ類計測測定一覧表 (m/m · g)

図版番号	資料番号	現幅	厚さ	側面角	重さ	石質	出土地点	備考
第 50 図 67	01349.7	54.4	12.9	134°	30.9	サスカイト	H 1, S D -03	調整度あり
第 51 図 70 · 第 144 図 6	01432.5	63.4	19.4	123°	25.8	サスカイト	H 1, S D -03	
第 50 図 68 · 第 144 図 3	01533.0	86.0	10.0	85°		サスカイト	H 1, S D -03	
	03530.6	62.8	8.2	107°	9.4	サスカイト	H 1, S D -03	
	10728	32.7	4.2	116°	3.7	サスカイト	H 1, S D -03	
	12921.4	39	4.5	116°	3.5	サスカイト	H 1, S D -03	
	13020.4	39.6	7.1	137°	9.6	サスカイト	H 1, S D -03	
	136			5.8	4.8	サスカイト	H 1, S D -03	
	15948.5	28.3	5.9	108°		サスカイト	H 1, S D -03	
	18037.5	20.4	8.1	132°	9.5	サスカイト	H 1, S D -03	
	19419.3	40.6	11.8	84°	6.7	サスカイト	H 1, S D -04	
	26519.8	27	2.8	112°	1.3	サスカイト	H 1, S D -06	
	26722.8	34	4.2	111°	3.9	サスカイト	H 1, S D -06	
	27019.7	28	5.1	148°	2.7	サスカイト	H 1, S D -06	
	28836	38.3	9.2	94°	11.0	サスカイト	H 1, S D -06	
第 68 図 4 · 第 144 図 4	41945.0	54.5	9.5	115°		サスカイト	H 1, S X -01	調整度あり
	44523.3	31.7	5.8	118°	3.8	サスカイト	H 1, S X -01	
第 82 図 5 · 第 144 図 1	47736.6	39.2			11.8	サスカイト	H 1, ブロック土層	
	47840.6	38.5	8.5	99°	20.5	サスカイト	H 1, ブロック土層	
	52227	41.5	3.1	139°	2.8	サスカイト	H 1	
	57627.5	25.4	3.8	123°	2.2	サスカイト	H 1	
	57734.5	34.8	6.5	93°	5.4	サスカイト	H 1	

598	21.7	35	5.2	117°	3.8	サスカイト	H 1
601	54.6	38	5.6	117°	6.7	サスカイト	H 1
613	35.3	29.5	4.9	110°	3.6	サスカイト	H 1
679	53.1	47.6	13.5	114°	34.6	サスカイト	H 1、S X-02

第18表 その他の剖片計測一覧表 (m/m・g)

図版番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	倒産角	重さ	石質	出土地點	備考
第51図72	01932.079.0			146°			サスカイト	H 1、S D-03	
	04126.924	20.1			21.8		サスカイト	H 1、S D-03	
	042		6.3				サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	049		4.0				サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	05120	29.8	7.4		2.4		サスカイト	H 1、S D-03	
	059		8.5		3.0		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	061		5.0		1.6		サスカイト	H 1、S D-30	折断面が存在し計測不能
	08118	36.8	8.2	121°	4.4		サスカイト	H 1、S D-03	
	093		9.5		4.6		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	099		8.2		8.7		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
第51図73	10512.061.0	18.0	149°				サスカイト	H 1、S D-03	
	118		11.4		5.0		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	126		11.1		9.0		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	12722.632.2	6.3			3.8		サスカイト	H 1、S D-03	
	140		8.8		7.4		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	14135.229.6	5.6			5.1		サスカイト	H 1、S D-03	
	14243.333.3	5.8			6.9		サスカイト	H 1、S D-03	
	154		4.0		2.8		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	176		17.8		6.5		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	181		4.3		2.6		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	182		2.6		1.6		サスカイト	H 1、S D-03	折断面が存在し計測不能
	217		11.1		5.2		サスカイト	H 1、S D-05	折断面が存在し計測不能
	318		14.7		26.7		ハリ賀安山岩	H 1、S D-06	折断面が存在し計測不能
	45031	29.6	8.4		10.1		サスカイト	H 1、S X-01	折断面が存在し計測不能
第130図1	47341.096.0	15.0	137°		56.0		サスカイト	H 1、旧平野川包含層	
第131図4	47450.072.0	15.0	107°		102.2		サスカイト	H 1、旧平野川包含層	
	478		9.4				サスカイト	H 1、旧平野川包含層	折断面が存在し計測不能
	47926.822.6	6.8			3.5		サスカイト	H 1、旧平野川包含層	
	48026.848.8	11.4			11.4		サスカイト	H 1、ブロック土層	
	483		4.8		3.1		サスカイト	H 1、ブロック土層	折断面が存在し計測不能
	484		13.4				ハリ賀安山岩	H 1、ブロック土層	折断面が存在し計測不能
	486		3.9		2.8		サスカイト	H 1、ブロック土層	折断面が存在し計測不能
	491		4.0		4.3		サスカイト	H 1、ブロック土層	折断面が存在し計測不能
	550		9.2		3.3		サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	551		11.1		4.9		サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	55449.535				13.5		サスカイト	H 1	
	556		3.8		1.6		サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	558		4.5		2.1		サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能

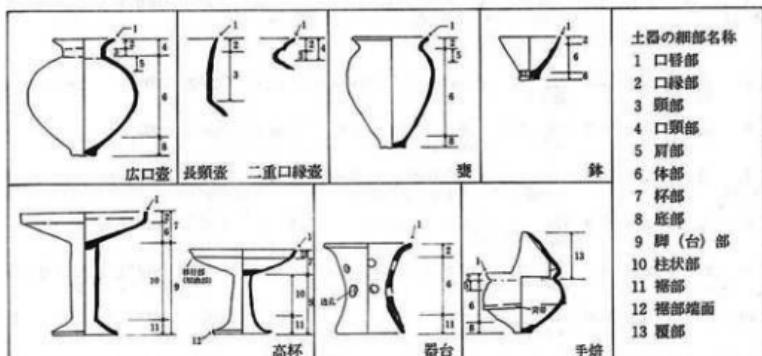
	570		2.5	0.9	サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	583	26.8	22.6	2.2	サスカイト	H 1	
	587		5.9	4.9	サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	604		8.1	4.4	サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	606	28.3	23.6	4.6143°	サスカイト	H 1	
	610		4.1	2.8	サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	617		4.8	2.5	サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
第 61 図	625	63.5	41.0	30.0	0.113°	サスカイト H 1、SD-08	
	629		6.2	6.9	サスカイト	H 2	折断面が存在し計測不能
	635	21.8	20.3	3.0	0.123°	サスカイト H 1	
	645		4.9	2.0	サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	650		11.2	4.4	サスカイト	H 1	折断面が存在し計測不能
	443		20.3	98.5	サスカイト	H 1、SX-01	
	471	50	67	124°	サスカイト	H 1 旧平野川包含層	
	545		10.2	20.4	サスカイト	H 1	
	555	29.5	58.6	12.4	102°	サスカイト H 1	
第 77 図 47	678	47.5	76.0	11.0	0.113°	サスカイト H 1、SD-X02	

第19表 石礫計測一覧表 (m/m · g)

回版挿図番号	資料番号	現長	現幅	厚さ	重さ	石質	出土地點	備考
第108図 86	169	54.2	22.0	9.9	10.5	サスカイト	H 1、SD-04	未製品
第 67 図 8	424	43.0	26.7	9.1	12.0	サスカイト	H 1、SX-01	未製品
第 69 図 7	464	48.1	31.2	11.7	17.3	サスカイト	H 1 ブロック土層	未製品
第132図 6	467	64.4	29.7	12.3	23.5	サスカイト	旧平野川	未製品
第132図 5	468	48.2	27.4	8.9	12.3	サスカイト	旧平野川	未製品
第 69 図 6	669	69.0	31.4	20.1	37.8	サスカイト	H 1、SX-01	未製品
第 69 図 9	797	59.0	26.5	16.8	19.0	サスカイト	H 1、SX-01	未製品
第 52 国 74	002	55.1	16.1	8.3	6.2	サスカイト	H 1、SD-03	未製品
第 52 国 77	003	39.0	23.1	4.6	3.4	サスカイト	H 1、SD-03	
第 52 国 76	011	29.0	13.5	14.0	5.7	サスカイト	H 1、SD-03	
第 52 国 75	019	50.6	12.3	5.7	2.8	サスカイト	H 1、SD-03	
第120図 46	310	55.1	15.0	4.7	3.6	サスカイト	H 2、SD-06	
第 69 国 10	421	32.3	16.0	4.0	1.9	サスカイト	H 1、SX-01 6号主体部	
第 78 国 41	457	51.5	24.0	6.9	6.0	サスカイト	H 1、SX-02 2号主体部	
第 83 国 7	475	60.0	24.0	9.7	18.0	サスカイト	H 1、ブロック土層	
第 70 国 14	680	61.5	23.1	6.7	12.6	泥岩	H 1、SX-01	
第 78 国 50	675	36.5	26.1	3.9	3.8	サスカイト	H 1、SX-01	
第 78 国 49	469	41.8	11.6	6.5	3.7	サスカイト	H 1、SX-02	磨製石礫

第2節 出土土器の観察

(註1) 亀井(KM-H1・2)遺跡出土土器のうち実測図を掲載し、かつ観察結果をここに報告する土器は280個体である。観察結果は以下に示す規準・要領で、表20~28に一括してまとめていく。なお掲載土器の時代的内訳は、弥生土器273、土師器7である。



第152図 土器細部の名称

<観察事項と記載方法について>

(番号) 上段は造形ごとの実測図番号。下段は左に図版番号、右に遺物写真番号を付す。

(器種) 壺の場合、広口壺・細頸壺・長頸壺・短頸壺・無頸壺等と機能差に由来すると思われる形態的特徴をメルクマークとする従来の呼称に據っている。

(法量) 器高・口径・体部径・底径をcmで表示。

(調整・成形法) ○で項目を設けている。

(形態的特徴) ●で項目を設けている。文様も含む。

(色調) 外面の色調をしるしている。また、生駒西麓製の特徴をもつ場合はそれを明示した。

(土器番号) 土器それ自体にネーミングしている番号、及び原図番号である。

(備考) スス付着、黒斑の有無及び出土層位、取り上げ番号を記す。

次に、土器の細部名称については代表する各器種ごとに第152図に示している。

註1 観察にあたって以下の文献を参考としておこなっている。寺沢・森下・藤田・宮崎・松本「出土土器の観察報告」『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書 第34集) 1980

第20表 落ち込み1出土土器観察表

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器 番号	備考
1 29-6	壺	口径 25.1	(口頭部) • 付加状口縁 • 口縁部ナデ • 頸部に横描直線文	暗褐色	012	上層 黒斑あり
2 29-8	壺	口径 19.4	(口頭部) • 付加状口縁 • 口縁部ヨコナデ • 頸部タテハケ	茶褐色	014	上層
3 29-9	鉢	口径 19.0	(口頭部) • 口唇円頭状 • 横描直線文4帯 • 内面ヨコヘラミガキ	茶褐色	013	上層 内外面スス付着
4 29-12	鉢	口径 23.2	(口頭部) • クの字状に外反し、口唇部に面をもつ • 口縁外面ヨコナデ(内面はハケ後) (体部) • 外面ヨコヘラミガキ • 内面タテのハケ状ナデ	灰褐色	019	上層 内外面スス付着
5	高脚杯	底径 12.3	(底部) • 捵部外反 • 外面ヘラナデ、内面ヨコナデ	灰褐色	009	スス付着
6	底部	底径 6.2	(底部) • 突出したややあげ底 • 内面ユビナデ • 側面指頭圧痕	灰褐色	003	
7 29-15	底部	底径 6.3	(底部) • やや突出し、わずかにあげ底 • 外面タテヘラミガキ、内面指頭圧痕	茶褐色 (生胸西院)	002	上層
8	底部	底径 7.0	(底部) • 突出したあげ底 • 内面ナデ、側面指頭圧痕	灰褐色	016	上層
9	底部	底径 4.4	(底部) • わずかに突出したあげ底 • 内面ハケ、外側ナデ	暗茶褐色	016	上層 底部外面黒斑
10	底部	底径 8.6	(体部) • 外面ナナメヘラミガキ(底部) • わずかに突出したあげ底 • 外側面ヨコナデ	暗褐色	017	上層 外面スス付着
11 28-5	底部	底径 10.6	(体部) • ナナメヘラミガキ(底部) • 内外面ナナメヘラミガキ • 突出しない平底	暗褐色	020	上層
12 28-3	甕用蓋	口径 15.9	(体部) • つまみ部よりゆるやかに外反 • 内面ハケ、外側ナデ		007	上層 ハクリしている
13 28-2	甕	口径 18.2	(口頭部) • ゆるやかに外反 • 外面ハケ後ヘラミガキ(体部) • 倒錐形 • 外面ハケ後ヘラミガキ	暗褐色	005	下層 全体スス付着
		底径 5.9	(底部) • 突出しないややあげ底 • 外面指頭圧痕後ヘラミガキ			
14 28-4	甕	口径 16.4	(口頭部) • ゆるやかに外反し、面をもつ、内外面ヨコナデ(体部) • 外面ヘラミガキ 内面ハケ	茶褐色 (生胸西院)	008	下層 燃成やや甘い
15	甕?	口径 21.0	(口頭部) • ゆるやかに外反し面をもつ • 内面ヨコヘラミガキ、外側面ヨコナデ(体部) 内面ヨコヘラミガキ	暗褐色	015	下層
16	甕	口径 27.9	(口頭部) • ゆるやかに外反し面をもつ • 内外面ヨコナデ(体部) • 内外面ヨコヘラミガキ	暗褐色	018	内外面ともにスス付着
17 29-10	甕	口径 27.9	(口頭部) • ゆるやかに外傾 • 内外面強いヨコナデ(体部) • 内外面ハケ後ヨコヘラミガキ	茶褐色	001	外面体部に黒斑あり

第21表 S K-03出土器観察表

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器番号	備考
1 36-2	壺	口径 15.1	(口頭部)・口縁部外面に施状紋2帯。頭部外面上に横捕直線紋2と施状紋1。口縁部内外面ヨコナデ。頭部外面タテハケ。頭部内面ヨコハケ	暗緑褐色 (生駒西陵)	005	下層 全体に摩滅著しい
2 36-1	壺	口径 9.55	(口頭部)・口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。口頭部は直立して外反。口最部内外面ヨコナデ。頭部外表面タテ方向、ハケ後タテ、ヨコ方向へラミガキ。頭部内面上半ヨコ方向ハケ状ナデ。頭部内面下半、タテ方向ハケ状ナデ(体部)。体部外面、タテ方向ハケメ後タテヨコ方向へラミガキ。体部内面ナナメ方向ハケメ。体部内面上端ナナメ方向ナデ(しばり目痕あり)	淡黄褐色	007	下層 外面スス付着
3	鉢	口径 35.6	(口頭部)・外に聞く体部から内側する口縁部をもつ。口唇部外面上に刻目を施す。(体部)・浅い碗状の体部。体部外面ヨコヘラミガキ	褐灰色	006	(2) 内外面に炭化物付着
4	甕	口径 33.75	(口頭部)・付加状口縁。内外面ヨコナデ(体部)・外面斜ヘラミガキ。内面斜ハケ	暗緑褐色	008	(1) 外面スス付着
5	甕	口径 37.2	(口頭部)・垂下口縁。外面ヨコナデ。内面ヨコナデ(体部)・外面斜ハケ後、ヨコヘラミガキ内面斜ハケ後ヨコヘラミガキ	暗褐色	009	内外面スス付着
6 36-2	甕	口径 18.0	(口頭部)・口縁部は強く外反し、口唇部は面をもつ。口縁内外面ヨコナデ。口最部内外面ヨコハケ後ヨコナデ(体部)・長脚の体部。体部の外面上半、内面ハケメ。体部外面上半ヨコヘラミガキ(底部)・やや突出するあげ底。底部内面指頭圧痕	淡褐色	001	(8)(9)(10)(11) 底部にもススが付着していることから支脚部を使用した
7	壺	底径 5.55	(体部)・外面ナナメのヘラミガキ。内面タテハケメ(底部)・わずかに突出したあげ底。側面斜ヘラミガキ	淡黄褐色	002	下層 内外面スス付着
8	壺	底径 7.9	(体部)・摩滅(底部)・?・内面指頭圧痕明瞭	灰褐色		下層 底部のふち著しく摩滅

第22表 S D-05出土器観察表

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器番号	備考
1 35-1	鉢	口径 33.15	(口頭部)・口縁部は内側し口唇部は面をもつ。口縁部外面上に凹線1条(横横ナデ?)。口縁部内外面横ナデ(体部)・半球部の体部。外面上半斜ハケナデ。内面上端横斜ナデ。内面縦ヘラ削り	淡茶褐色	003	II層 (1) 内外面スス付着
2 35-2	甕	口径 33.45	(口頭部)・口縁部は外傾し口唇部に面をもつ。口縁部端に2本の脛凹線。口縁部内外面横ナデ(体部)・扁球形の体部。外面上中央に押捺紋。外面上半斜ハケの上から縦ヘラミガキ。内面上位あらい横ハケ。内面ハケナデ。内面上半下から上方方向ヘラ削り	褐灰色	004	II層 (2)
3 35-4	台付鉢	口径 12.5 高さ 18.1 底径 10.0	(口頭部)・口縁部は外傾し口唇部に面をもつ。口縁部端横ナデ(体部)・扁球形の体部。外面上半斜ハケの上から横及び斜ヘラミガキ。外面上半縦ヘラミガキ。内面上半横ヘラミガキ。内面中央部横ハケ。中央部に粘土紐の縫目(底部)・円	茶褐色	005	II層 (3) 脚部に黒斑

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
4 35-3	壺	口径 17.05 器高 30.35 底径 7.0	(口頸部) • 口縁部は外傾し口唇部に面をもつ。• 口縁端部に凹線 1 条(強い線ナデ?) (体部) • 捩形の体部。外面上半縦ハケ後ナデ。• 外面上半縦ハケ削り後ヘラミガキ。• 内面上半縦ハケ。内面上半縦ハケナデ。• 内面下端ナデ(底部)。やや突出したあげ底。• 侧面指頭圧痕。• 外面ナデ	淡茶褐色	001	I 層 (4) 内面体部中央にスス付着

第23表 S D-03 出土土器観察表

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
1	壺	口径 24.3	(口頸部) • 垂下口縁。• 口唇部は面をもつ。• 口縁部外面横状紋 2 条。• 頸部は直立的に外傾。• 頸部外面に横状紋 4 条。• 口縁部内外面横ナデ。• 口縁部外面下端斜ナデ。• 頸部内面縦ハケとナデ(指頭圧痕)。• 頸部外面調整不明	赤褐色	054	I ブロック V 層
2	〃	口径 20.4	(口頸部) • 口縁部は内傾し口唇部は面をもつ。• 口縁部外面波状紋 2 条。• 頸部は直立して外傾気味。• 頸部外面に直線状の紋 1 条。• 口縁部内外面横ナデ。• 頸部外面調整不明。• 頸部内面斜横ナデ	淡茶褐色	042	V 層 外面スス付着
3	広口壺	口径 21.9	(口頸部) • 口頸部は外傾。• 垂下口縁。• 口最部外面に横状紋と刻目。• 頸部外面に直線紋 2 条。• 口最端部内外面横ナデ。• 頸部外而斜ナデ後横ヘラミガキ。• 頸部内面横ナデ後横あらいヘラミガキ	淡茶褐色	053	I 層 スス付着
4	広口壺	口径 1.7	(口頸部) • 直立的にのびた口頸部と外傾した口縁部。• 垂下口縁。• 口縁部内外面横ナデ。• 頸部外而縦ハケ。• 頸部内面横ハケ後ナデ	暗緑褐色	052	I 層 1 ブロック
5 31-5	広口壺	口径 18.6	(口頸部) • 口頸部は外傾。• 口縁部内外面横ナデ。• 頸部外而縦ナデ。• 頸部内部横ナデ	暗緑褐色	036	I 層 (6)
6	壺		(口頸部) • 頸部外而縦ナデ。• 頸部内面ナデと横ハケナデ。• 頸部外面横状と直線紋(体部) • 扇形の体部。外面上半縦ナデ。• 外面下半ナデ後横あらいヘラミガキ。• 内面ナデと横ハケナデ。• 外面に波状紋 3 条、直線紋、横状紋、点状紋	橙褐色	032	
7 31-6	壺	底径 7.5	(体部) • 縱長の球形。• 外面太いヘラミガキ。• 内面ヘラナデ。• 口縁部に近い方の外而指ナデ。• 口縁部に近い方の内面指押えナデとしづり目(底部)。• 突出した平底。• 侧面指頭圧痕。• 外面指押えとヘラナデ。• 内面ヘラナデ	灰黒褐色	011	Ⅲ 層 (34)
8	鉢	口径 37.2	(口頸部) • 垂下口縁。• 口縁部外面に横状紋と刻目。• 口縁部内外面横ナデ(体部)。• 外面に横状紋 3 条。• 内面横ナデ。• 外面紋様開窓痕	淡茶褐色	043	I 層
9	〃	口径 36.1	(口頸部) • 付加口縁。• 口縁部は内反。• 口縁部内外面横ナデ(体部)外面ナデ(?)。• 内面横ハケ	暗褐色	033	Ⅲ 層 (37)

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
10	高杯	口底 26.2	(口頸部)・口縁部は内傾し口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ。口縁部外面に暗紋(休部)。外面斜線ヘラミガキ。内面横ナデ後縫のあらいヘラミガキ	暗灰褐色	049	I層
31-4	ふた	口径 9.8	(底部)・円錐状の脚部・透孔1対。端部外面横ナデ。外面ナデ(ヘラ削り状面取り)。内面(?)	淡茶褐色	030	I層 1プロック
32-9	高杯	脚径 8.05 (復元)	(休部)。外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ(底部)。外反・透孔上8コ下9コ(焼成前に表から)。外面縫ヘラミガキ。内面ナデ(最下部横ナデ)。休部との縫ぎ目に指押え	赤褐色	006	I層
13	高杯脚部		(休部)。内面ハケ目(底部)・円筒状の脚部・外反。外面縫ヘラミガキ。内面横ナデ。端部横ナデ	暗緑褐色	031	V層(48)
32-8	高杯脚部	脚径 12.6	(休部)。杯部は大きく。外外面ヘラミガキ(底部)。外反。透孔が不ぞろいな間隔で6コ(焼成前にあけた)。外面ヘラミガキ内面ヘラナデ。休部との縫ぎ目の内面に指押え。脚部内面上部にしづり目痕。端部横ナデ	灰褐色	007	IV層(5)
15	甕	口径 23	(口頸部)・受口状で口唇部は面をもつ。外外面横ナデ(休部)扁球形。外面縫ナデとハケ。内面縫横ヘラ削り	淡茶褐色	014	(41) 外外面スス付着
16	〃	口径 11.2 (復元)	(口頸部)・口縁部はゆるやかに外反。口縁部は指頭によるつまみあげ。外外面横ナデ(休部)。内面ナデと指押え	黒色(外面) 黒茶褐色と 綠茶褐色 (内面)	008	I層 外外面にスス付着
33-11	〃	口径 13.8 (復元)	(口頸部)・口縁部は外傾し口唇部に面をもつ。外外面横ナデ。口縫部外面指押え(休部)。蝶形の休部。外面ハケ。内面上部ハケ。内面中間横ハケナデ。内面下部縫ハケナデ	黒茶褐色	010	(12) 3プロック
33-13	〃	口径 13.6	(口頸部)・口縁部は外傾し口唇部に面をもつ。外外面横ナデ(休部)・長胴形の休部。外面表面側壁・部分的にヘラ削り。内面上半ハナデ。内面下半ハケナデ	黒褐色 (外面) 灰茶褐色 (内面)	009	(4)
19	底部	底径 7.9	(底部)・やや突出したドーナツ底。外一面方向ヘラミガキ。側面外面内面ナデ	暗緑褐色	022	
20	底部	底径 7.4	(休部)・外外面ヘラミガキ(底部)・やや突出した平底。外一面方向ヘラミガキ。内面ナデ	暗褐色	023	I層
29	甕	口径 11.9	(口頸部)・垂下口縁。口唇部は面をもつ。口縁部は外傾。口縁部外面に縦状紋2条。頸部外面下端に縦状紋1条。頸部外面に直線状の紋様あり。口縫上端部内面横ナデ。口縫下端部外面指押え(跡めの跡我す)。頸部外面縫ナデ後縫様両研磨。口縫部内面横ナデ。頸部内面しづり目痕	茶褐色	055	I層 N・7地区
30	広口壺	口径 16.6	(口頸部)・垂下口縁。口縫部内外面横ナデ。頸部内面縫ナデ	灰褐色	045	I層 N・7地区
31	〃	口径 15.7	(口頸部)・口頸部は外傾。付加状口縁。口縫部内外面ヨコナデ。頸部外面縫ハケ状ナデ。頸部内面横ハケナデ(休部)。外面縫ハケナデ。内面ナデ	淡茶褐色	046	II層 O・8地区
32	短頸壺	口径 11.9	(口頸部)・口頸部は直立し。口縫部は外傾し。口唇部は尖頭状。頸部外面ナデ。頸	淡灰褐色	044	I層 N・7地区

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
33 31-3	短頸壺	口径 11.5 器高 27.2 底径 5.8	(口頸部) • 口縁部外反 • 口唇部は尖頭状 • 口縁部内外面横ナデ • 下位(体部との継 ぎ目あたり)に1条の刻目突帯 • 頸部内面 縦斜ナデ(体部) • 中位のはる縦長の球形 • 外面上半縦斜ナデ • 外面下半縦斜ヘラ削 り • 内面上半縦斜ナデ • 内面下半縦斜ヘラ 削り(底部) • やや突出した平底 • 外面 ナデ	淡茶褐色	056	
34	長頸壺	口径 11.8 (復元)	(口頸部) • 直立する頸部 • 口唇部に面を もつ • 口縁部横ナデ • 頸部外面間隔のあ らいヘラミガキ • 横ナデの上からヘラミガ キもある • 内面(ヘラ)ナデ	灰茶褐色	012	I層 O・8 地区
35	"		(口頸部) • 直立する頸部 • 外面ヘラミガ キ • 内面指捺えナデ	淡白褐色	013	I層 N・7 地区
36	細頸壺	口径 6.1	(口頸部) • 口頸部は直立し • 口唇部は尖頭 状 • 口縁部内外面横ナデ • 頸部外面縦ヘ ラミガキ • 頸部内面横ナデ • 内面に粘土 紐の継ぎ目	茶褐色	027	I層 (2-3) 外面赤彩色
37 34-15	コップ 形土器	口径 8.5 (復元) 器高 8.3 (復元)	(口頸部) • 口唇部は尖頭状 • 口縁部内外 面横ナデ(体部) • 把手が対称についてい る • 外面ハケの上からヘラミガキ • 把手 にはナデの上からヘラミガキ • 内面ヘラナ デ(底部) • 突出しない平底 • 外面ナデ • 内面ヘラ	淡褐色	003	I層
38 31-2	無頸壺	口径 5.0 (復元) 器高 7.9 (復元)	(口頸部) • 口縁部はゆるやかに内擱 • 口 縁部外面細かいハケ • 透孔(?) (焼成前に 表からあけた) (体部) • 球形 • 外面ヘ ラミガキらしき細いヘラナデ • 内面指捺え ナデ	淡褐色	002	I層
39 32-7	タコ壺	口径 4.4	(口頸部) • 口唇部は尖頭状(体部) • 内 外面ナデ • 透孔1つ(底部) • まるい	淡茶褐色	016	I層 N・7 地区
40	甕(?)	底径 2.5	(体部) • 外面縦ヘラ削り • 内面ナデ (底部) • やや突出したあげ底	淡茶褐色	015	I層 N・7 地区
41	鉢	口径 26	(口頸部) • 口縁部は外傾 • 付加状口縁 • 口縁部外面に円形容溝 • 口縁部外面と頸 部内面横ナデ • 口縁部内面と頸部内面横斜 ヘラミガキ	淡茶褐色	037	I層 O・7 地区
42	"	口径 34.2	(口頸部) • 口縁部は外傾 • 付加状口縁 • 口縁部横ナデ • 口縁部直下外面横ハケ (体部) • 外面横ヘラミガキ • 内面斜ハケ	暗褐色	034	I層
43	有孔底部		(底部) • 突出しない平底 • 底部中央に円 孔(焼成後にあけた) • 外面縦ヘラミガキ • 内面ナデ	暗褐色	019	I層 N~O・6
44	把手付 底部		(底部) • 突出した平底でややあげ底気味 • 外面縦ナデと横ナデ • 内面ナデ • 側面 指頭圧痕(?)	淡黄褐色	020	I層 外面スッ付着
45	底部		(体部) • 外面縦ヘラミガキ • 内面斜ハケ (底部) • やや突出したドーナツ底 • 外 面ともナデ	淡黄褐色	021	I層 O・7 地区
46	高杯		(口頸部) • 垂下口縁 • 口縁部に突帯 • 口縫端部内面横ヘラミガキ • 口縁部外面 下端横ナデ • 口縁部外面横斜ヘラミガキ • 口縁部内面横斜ヘラミガキ • 口縁部突帯 横ナデ	淡茶褐色	051	I層 N・7 地区
47	"	口径 28.6	(口頸部) • 口縁部は外傾し口唇部は円頭状	暗灰褐色	050	I層

項目番号	器種	法量	形態、測定・成形法	色調	土器番号	備考
			・口縁部内外横ナデ (体部)。外面、縦、横ヘラミガキ。内面横ナデ			N・7 地区
48	高杯	口径 25.6	(口頭部)。口縁部は外傾し口唇部は円頭状。 ・口縁部内外横ナデ(体部)。浅い椀状の杯部。外面、横ヘラミガキ。内面横縦ヘラミガキ	暗褐色	048	I層 O・7 地区
49	"	口径 23.75	(口頭部)。口縁部は内傾し、口唇は面をもつ。 ・口縁部外面縦ナデ。口縁部内面、横ナデ後、あらい横ヘラミガキ	淡茶褐色	047	I層
50 32-10	高脚杯部		(体部)。外面ヘラナデ。内面横ヘラミガキ(底部)。唇部は外反。透孔2つ1対で3対。外面縫ナデ。内面縫ナデ(ヘラ痕ややあり)	灰褐色	005	I層 N~O・7
51	高脚柱状部		(底部)。唇部は外反。円筒状の長い脚部。外面縫ヘラミガキ。内面ナデ。唇部外面斜ハケと斜ヘラミガキ	暗褐色	026	I層 (2-10)
52	"		(底部)。唇部は外反。外面縫ヘラミガキ。内面縫横ヘラ削り	淡茶褐色	024	I層 N~O・6
53	"		(体部)。内面ナデ(底部)。外反。外面縫ヘラミガキ。内面にしぼり目痕	淡赤褐色	025	I層 N~7
54	高脚杯部		(底部)。唇部は外反し、端部は円頭状。脚部は円錐状。端部内外面ナデ。外面縫ナデ。内面ナデ。比線1条	暗褐色	017	I層 (2-11)
55	"		(体部)。内面ヘラミガキ(底部)。円錐状の脚部。外反。外面縫ヘラミガキ。内面ナデと粘土の堆ぎ目あり。端部内外面横ナデ		029	I層
56	"		(体部)。内面縫ヘラミガキ(底部)。円錐状の脚部。唇部外反。外面縫ヘラミガキ。内面斜ハケナデ。端部内面、横ナデ	淡茶褐色	028	I層
57	甕	口径 17.6	(体部)。口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。口縁部端部横ナデ。口縁部外面あらい横ハケ。口縁部外面に刻目。口頭部内面、横斜のあらいハケ。脇部外面縫ハケ	淡茶褐色	039	I層 O・7 地区
58	"	口径 18.0	(口頭部)。口縁部は外傾し、口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナデ	暗褐色	040	I層 O・7 地区
59	"	口径 16.0	(口頭部)。口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面タタキ。内面指ナデ痕	暗褐色	038	I層 O・8 地区
60	"	口径 11.9	(口頭部)。口縁部は外傾して、口唇は尖頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面タタキ。内面指ナデ痕	淡灰褐色	044	I層 N・7 地区
61 33-14	"	口径 11.3	(口頭部)。口縁部は外傾。内面ナデ(体部)。肩のはらない絶長の球形。外面縫ヘラミガキ。内面縫ナデ	淡茶褐色		I層 N~O・7 地区
62 33-12	"	器高 13.5 口径 12.0	(口頭部)。口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。外面縫ナデ(体部)。長胴形。外面タタキ。内面ヘラ削り(底部)。きわめて突出したあげ底。外面ナデ。内面ヘラ(?)	淡褐色	004	I層

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器 番号	備考
1 73-6	広口壺	口径 20.9	(口頭部) ・口頭部はやや直立し、口縁部は外反・垂下口縁。口縁部外面に凹線 3 条。口縁部内面に列点紋。口頭部外面に瘤状紋 1 条。口頭部内外面横ナデ(体部)。外面に瘤状紋 2 条。内面斜ハケ。外面横ナデ	茶褐色	007	S X-01出土 内面に黒斑
2	〃	口径 15.3	(口頭部) ・頭部は直立し、口縁部は外翻・口部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ。頭部内面横ナデ(?)。頭部外面下半斜ハケ(体部)。球形。外面縦ハケ。内面斜ハケ	淡茶褐色	005	内面スス付着 包含層
3	〃	口径 28.0	(口頭部) ・垂下口縁。口頭部は外傾。口縁部外面に列点紋。口縁部内外面上端横ナデ。口頭部外面縦ヘラミガキ。口頭部内面ナデ。頭部内面に粘土紐の織ぎ目	灰褐色	008	包含層
4 37-7	〃	口径 15.2	(口頭部) ・口頭部は直立的に外傾・付加状口縁に凹線 2 条。口縁部内外面横ナデ。頭部内面縦横ナデ。口頭部外面横ナデ	淡茶褐色	006	包含層
5	短頸壺	口径 11.3	(口頭部) ・直立する頭部に外傾する口縁部。口縁部外面に凹線 4 条。口頭部内外面横ナデ	淡茶褐色	011	S X-01出土 内面に一部スス付着
6	〃	口径 10.3	(口頭部) ・口頭部は外傾・口唇部は円頭状。口縁部内外面、ハケ状横ナデ。頭部内外面ナデ	淡灰褐色	012	S X-01出土
7 37-9	細頸壺	体径 18.3	(休部) ・扁球状の休部。外面縦ヘラミガキ。外面中央部のみ横ヘラミガキ。内面ナデ(粘土紐の織ぎ目残す)。(底部)・やや突出したあげ底。側面ナデ。外面ナデ	暗褐色	009	包含層
8 37-8	台付無頸壺	口径 16.2	(口頭部) ・口縁部は内傾。口縁部外面に瘤状紋 2 条刻目かな(?)。口縁部内外面、横ナデ(休部)。外面に瘤状紋 3 条と瘤状浮紋 4 条 1 集と 2 孔 1 対の紐孔。外面下半斜ヘラミガキ。内面上半横ナデ。内面下半斜ハケナデ後横あらいヘラミガキ	暗緑褐色	015	〃
9	〃	口径 14.9	(口頭部) ・口縁部内傾。口縁部外面に列点紋。口縁部内外面横ナデ(休部)。外面に瘤状紋 2 条棒状浮紋 3 条 1 対の上に刻目。外面下半横ヘラミガキ。内面斜ハケナデ後横あらいヘラミガキ	暗褐色	014	〃
10	無頸壺	口径 15.65	(口頭部) ・口唇部は面をもつ。口縁部に 2 孔 1 対の紐孔。口縁部外面に凹線 1 条。口縁部内外面横ナデ(休部)。外面中央に沈線 2 条。外面横ヘラミガキ。内面斜ヘラミガキ	赤褐色	013	〃
11	鉢	口径 43.9	(口頭部) ・口縁部内傾。口縁部外面に突唇。口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ(休部)。外面ナデ。内面横ハケナデ	淡褐色	029	S X-01出土
12	高杯	口径 22.3	(口頭部) ・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ。口縁部外面凹線 2 条。口縁部内外面横ナデ(休部)。外面上半横ヘラミガキ。外面下半横ヘラミガキ。内面上半横ナデ後横ヘラミガキ。内面下半斜ヘラミガキ		044	S X-02出土
13	〃	口径 17.6	(口頭部) ・口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ(休部)。内面縦ヘラミガキ。外面斜ヘ	暗褐色	040	S X-02出土 口縁部外面に黒斑 あり、杯部内外面 赤彩色

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器番号	備考
			ラミガキ			
14	高杯	口径 17.0	(口部) ・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ。口縁部外面に波状紋。口縁部内外面横ナデ(体部)。内外面磨滅	淡茶褐色	039	S X-02出土 口縁部上端に赤彩色
15	〃	口径 17.2	(口部) ・口縁部は外反し、口唇部は円頭状。口縁部外面に凹線 3 条。口縁部内外面横ナデ(体部)。内外面縦ヘラミガキ	淡茶褐色	038	包含層
16 37-4	〃	口径 18.2	(口部) ・口縁部は直立し、口唇部は面をもつ。口縁部外面に凹線 3 条。口縁部内外面横ナデ(体部)。内外面縦ヘラミガキ ・深い杯部。外面縦ハケ後ヘラミガキ。縦ヘラミガキ(底部)。円錐状の脚部。外面縦ハケ後ヘラミガキ。内面ナデ	淡茶褐色	031	外面スス付着 S X-01出土
17	〃	口径 16.2	(口部) ・口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面縦ヘラミガキ。内面ナデ後あらい縦ヘラミガキ。半球状	暗褐色	042	S X-01出土
18	〃	口径 13.95	(口部) ・口唇部は尖頭状。口縁部前面に凹線二条。口縁部外面上半横ヘラミガキ。口縁部内面横ナデ(体部)。半球体。外面上半横ヘラミガキ。外面下半横ヘラミガキ。内面ナデ	淡黄色	041	S X-02出土 外面に黒色物質塗布
19	高杯 柱状部		(底部) ・円筒状の長い脚部。外面磨滅。内面ナデ。底部外面縦ヘラミガキ。底部内面斜ハケ	暗褐色	036	外面スス付着 包含層
20	〃		(体部) ・外面縦ヘラミガキ。内面不明(底部) ・円筒状の脚部。内外面ナデ内面に 2 本の粘土紐。脚部外面縦ハケ。脚部内面横ハケ	暗褐色	033	S X-01出土
21	〃		(体部) ・外面縦ハケ後ヘラミガキ。内面縦ヘラミガキ(底部) 外面ナデ	淡茶褐色	045	底部内面黒斑 包含層
22	〃		(底部) ・円筒状の脚部。外面縦ヘラミガキ(かな?)	暗褐色	037	スス付着 包含層
23 37-5	高杯脚部	底径 11.4	(体部) ・外面縦ヘラミガキ。内面ヘラミガキ(?)。底部・円筒状の長い脚部。透孔 3 号 1 对が 3。端部内外面横ナデ。外面縦ハケ後ヘラミガキ。内面ナデ	淡茶褐色	034	S X-01出土
24	〃	底径 7.7	(底部) ・大きく外反し、端部は尖頭状。透孔? 2。外面縦ヘラミガキ。内面磨滅	淡茶褐色	032	S X-01出土
25	〃	底径 12.1	(底部) ・脛部は外反し端部は面をもつ。端部内外面横ナデ。外面ナデ。内面ナデと横ハケ	淡茶褐色	043	端部黒斑 包含層
26	〃	底径 11.8	(底部) ・円筒状の脚部。脣部は大きく外反し端部は面をもつ。端部内外面横ナデ。外面縦ヘラミガキ。内面横ハケナデとナデ	暗褐色	035	包含層
27	〃	底径 14.45	(底部) ・脣部は外反し、端部に面をもつ。端部内外面横ナデ。内面上端しづり目痕。内面横ヘラミガキ。外面縦ヘラミガキ	淡茶褐色	046	内外面スス付着 包含層
28 37-3	器台	口径 34.6	(口部) ・付加状口縁。口縁部は外傾。口縁部端部に凹線 4 条。口縁部外面に凸形浮文。脣部外面に凹線 8 条。口縁端部縦ハケ後横ナデ。口縁部外面斜ハケ後斜ヘラミガキ。口縁部内面横ハケ後、横ヘラミガキ。脣部内面横ナデ。脣部外面横ナデ。脣部内面横斜ヘラミガキ	淡黄色	030	外面スス付着 包含層

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器 番号	備考
29 36-1	壺	口径 29.5	(口頭部) 付加状口縁。口縁部は外傾。 ○頭部内外面横ナデ(体部)・長頭形の体部。外面ヘラミガキ。内面ナデ後、あらい削ヘラミガキ	淡黄褐色	021	外面スス付着 包含層
30	"	口径 34.9	(口頭部) 口縁部は外反。口縁部内外面横ナデ(体部)・外面タタキ後縫ハケ。内面斜ハケナデ。外面中央に刻目	淡茶褐色	019	S X-02出土 外面スス付着
31	"	口径 19.1	(口頭部) 口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)・外面縫ハケ。内面上端ナデ。内面縫ハケ	赤褐色	018	S X-02出土
32 36-2	"	口径 11.3	(口頭部) 口縁部は外傾し、口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)・肩のはいった長頭形。外面上端横ナデ。外面ナデ。内面上端斜縫ハケ。内面斜らせん状ヘラ削り後あらい削ヘラミガキ(底部)・平底。内面ナデ。内面斜らせん状ヘラ削り後、縫のあらい削ヘラミガキ	淡黄褐色	020	S X-02出土 外面スス付着
33	甕用蓋	—	(口頭部) 口縁部内外面横ナデ(体部)・外面ヘラ削り。内面ナデ・つまみ部外面ヘラ削り	淡黄褐色	022	口縁部内面スス付着 包含層
34	蓋	—	(体部) 外面縫ハケ。内面横ヘラ削り後、ヘラミガキ。つまみ部内面しまい目痕。つまみ部外面横ナデ	淡茶褐色	023	外面スス付着 包含層
35	壺	口径 12.8	(口頭部) 口縁部は外傾して、口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ。頭部外面横ナデ(体部)・外面縫ヘラミガキ。内面横ナデ(粘土紐の跡ぎ目残す)	暗緑褐色	016	S X-01出土
36	"	口径 15.4	(口頭部) 口縁部上端は直立し、口唇部は面をもつ。口縁部外面凹線 2 条。口縁部内外面横ナデ(体部)・外面タタキ・内面ナデ	淡黄褐色	017	包含層
37	"	口径 17.3	(口頭部) 口縁部は外傾し、口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)・長頭形の体部。外面横ヘラミガキ。内面横ハケ後、横ヘラミガキ	暗褐色	027	"
38	底部	底径 6.5	(底部) 平底・外面ナデ(?)・内面不明	暗緑褐色	025	S X-01出土
39	"	底径 5.9	(体部) 外面縫ヘラミガキ斜ハケ(底部)・突出しないドーナツ底。内外面ナデ	淡灰黄色	024	包含層
40	有孔底部	底径 7.5	(体部) 外面縫ヘラミガキ(?)・内面ナデ(底面)・突出したあげ底・底部中央に円孔をもつ。内外面ナデ	淡茶褐色	026	"
41	壺	口径 32.15	(口頭部) 付加状口縁。口縁部は外傾。○頭部内外面横ナデ(体部)・外面縫ハケ後ナデ。内面縫ナデ	淡茶褐色	010	S X-02出土

第25表 SD-02 出土土器観察表

1	長頸壺	口径 9.7	(口頭部) 口頭部は直立し、口縁部は外傾。口唇部は面をもつ。口縁部外面に記文。口縁部内外面横ナデ。頭部外面縫ヘラミガキ	暗褐色	020	
2 39-9	"		(口頭部) 口頭部は直立。頭部外面下端に突帯(少2回)。頭部外面縫ヘラミガキ。	暗褐色	007	

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器 番号	備 考
			頸部外面突唇付近横ナデ。頸部内面ナデ(粘土紐の巻き目)			
3	細頸壺	口径 7.2	(口頸部) 直線的にのびる長い頸部で口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦ヘラミガキ。頸部内面ナデ(粘土紐の巻き目としづり目痕)	淡灰黄色	012	
4	"	口径 7.3	(口頸部) 直線的にのびる長い頸部で口縁部はわざかに外反。口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦ハケ後縫ヘラミガキ。頸部内面上端横ハケ。頸部内面ナデ(粘土紐の巻き目)	淡茶灰色	013	
5 38-6	"	底径 5.2	(口頸部) 口頸部は直線的にのびるがやや外傾気味。体部との境目の外面に刺突文。(体部) 球形の体部。外面上半一部ハケ。外面中央部ヘラミガキ。外面下半ハケ後ヘラミガキ。内面上半指ナデ。内面下半ハケ。(底部) 突出した底部。側面指押え。外面ハケ	黄褐色	003	
6	水差	口径 7.6	(口頸部) 口頸部は直立し、口縁部はやや外傾。口唇部は尖頭状。口縁部内外面横ナデ。頸部外面ナデ。頸部内面(粘土紐の巻き目2本)(体部) 外面縦ヘラミガキ。内面ナデ(粘土紐の巻き目1本)	淡茶褐色	010	
7 38-5	ミニチュア壺	口径 2.4 器高 5.05	(口頸部) 内傾し、口唇部は円頭状(体部) 内面ナデ(底部) 内面指ナデ痕	淡灰褐色	005	
8 39-10	装饰高杯	口径 30.6	(口頸部) 垂下口縁。口縁部外面に凹線2条。口縁端部内外面横ナデ。口縁部外面縦ハケ後縫ヘラミガキ。口頸部内面横ハケ後、あらい縫ヘラミガキとナデ	暗褐色	022	
9 39-12	高杯	口径 20.2	(口頸部) 口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ。(体部) 半球体の体部。外面縫斜ハケ後あらい縫ヘラミガキ。内面横ナデ後あらい縫ヘラミガキ	淡黄灰色	015	
10 39-11	高杯 柱状部		(体部) 内外面縫ヘラミガキ (底部) 円筒状の長い脚部。外面縫ヘラミガキ。内面横ナデ。脚台部内外面ナデ	淡黄褐色	016	
11 38-1	高杯	底径 14.2	(口頸部) 口唇部は尖頭状。内側気味に立ち上がる。口縁部内外面横ナデ。(体部) 浅い碗状の杯部。杯部外面斜縫ハケ。(底部) 円錐状の脚部。中突3コ。外面ナデ。内面しづり痕。端部内外面横ナデ。脚台部外面縫ハケ。脚台部外面ナデ	淡黄褐色	011	
12	高杯		(体部) 外面縫ヘラミガキ。内面縫ヘラミガキ (底部) 外面縫ヘラミガキ。内面ナデ	淡茶褐色	006	
13 38-2	高脚	底径 11.8	(底部) 円錐状の脚部。端部に面をもつ。透孔3コ(施成前に表からあけた)。外面ハケ(ハケ後、粘土を補充して脚と杯をつないでいる)。内面上半指ナデ。内面中央部しづり目痕。内面上半ナデ。端部内外面横ナデ	淡黄褐色	002	
14	"	底径 12.1	(体部) 内外面ヘラミガキ	淡黄褐色	009	

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器 番号	備考
38-3			(底部) • 円錐状の脚部 • 透孔3ヶ • 端面は円頭状 • 端部内外面横ナデ • 外面は縦ハケ後、縦面取り状ヘラ削り • 内面横斜ハケ • 脚柱内面しづり目痕			
15	台付鉢	口径 20.4	(口頭部) • 口縁部は大きく外傾 • 口唇部は尖頭状 • 口縁端面横ナデ • 口縁部外面斜ハケ後級ヘラミガキ • 口縁部内面横ハケ後、横ヘラミガキ (体部) • 半球状の体部 • 外面縦ヘラミガキ • 内面横ヘラミガキ後、縦ヘラミガキ • 外面中央付近に粘土紐の織目	淡黄褐色	008	脚台端面に彩色
16	装飾脚部		(底部) • 端面に面をもつ • 外面横ナデ • 透孔1ヶ • 透孔の周辺に波状紋	暗褐色	018	
39-13	底部	底径 7.1	(底部) • 突出した平底 • 内外面横ナデ	淡黄灰色	017	
17	底部	底径 5.6	(体部) • 外面縦ヘラミガキ • 内面斜ハケナデ (底部) • 突出したドーナツ底 • 外面ナデ • 内面斜ハケナデ	淡黄褐色	019	
39-13	甕	口径 16.7	(口頭部) • 口縁部は外傾し、口唇部は円頭状 • 口縁部内外面横ナデ • 頭部外面横ハケ • 頭部内面横ハケ (体部) • 外面タタキ • 内面横ハケ	淡茶褐色	021	
20	"	口径 14.5 器高 22.3 底径 4.6	(口頭部) • 口縁部は外反 • 口唇部に面をもつ • 口縁部内外面横ナデ (体部) • 肩のはる長頭形 • 外面平行タタキ(外面下1/4からタタキの方向が変わる) • 内面上部細かいハケ(1.15cm巾で8ヶ) • 内面中央部太いハケ • 内下面やや細かいハケ (底部) • 突出した平底 • 側面ナデ • 外面一部ハケ(タタキ痕)	淡赤褐色 (内面、淡黄褐色)	014	
21	"	口径 12.9 器高 10.9 底径 5.75	(口頭部) • 口唇部に面をもつ • 口縁部内外面横ナデ (体部) • 長頭形の体部 • 外面タタキ • 内面縦ハケだが、ヘラ削り的なところがある • 口縁部との境目の内面横ハケ (底部) • 側面指押え	淡灰褐色	001	
39-7	"	口径 16.1 器高 17.8 底径 4.6	(口頭部) • 外傾し口唇部に面をもつ • 口縁部外面比拵2条 • 口縁部内外面横ナデ (体部) • 肩のはる長頭形 • 外面平行タタキ • 内面上半ハケ • 内面下半ハケナデ (底部) • 突出した平底 • 側面ナデ • 外面木の葉紋	灰褐色	004	外面ススが厚く付着

第26表 SD-04 出土土器観察表

1	広口壺	口径 18.8	(口頭部) • 垂下口縁 • 口縁部外面に簾状紋をその上に刺突 • 頭部外面に簾状紋2条 • 口縁部外面横ハケ • 口縁端部内外面横ナデ • 口頭部内面横ナデ	暗褐色	063	Ⅴ層 口縁部外面に黒斑
2	"	口径 23.3	(口頭部) • 垂下口縁 • 口縁部外面に竹管文(色彩か?) • 口縁部外面縦ヘラミガキ • 口縁部上端外面ナデ • 口縁部内面横ハケ後横ナデ • 口縁部端面横ナデ	暗褐色	055	Ⅳ層 内面に黒斑
3	"	口径 15.3	(口頭部) • 垂下口縁 • 頭部外面に貼付突帯 • 口縁外面に波状紋、凹形浮紋 • 口縁内面に粗い簾状紋、凹形浮紋 • 口縁部内外	茶褐色	061	Ⅰ層 (182)

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器番号	備考
4	広口壺	口径 17.4 (復元)	面横ナデ *頸部内面斜ナデ (口頸部) *垂下口縁。口縁部外間に凹形浮紋 3コ 1組で?組(失がぬってある)。口縁部に凹形浮紋のかけらあり。口縁部外間に痕凹線 1条。頸部を肩部の境目に突帶(失がぬってある)。*口縁部内面横ナデ。頸部内外面ハケ 4条/cm	茶褐色 (内)黒褐色	017	V層
5 44-23	広口壺	口径 16.6	(口頸部) *垂下口縁。口縁部内外間に竹管紋。口縁部内外面横ナデ。頸部外縁ハケ。頸部内面横ハケ	淡茶褐色	064	IV層 (329) 外面スス付着
6 44-24	広口壺	口径 17.6	(口頸部) *垂下口縁。口縁部外縁横ナデ。*頸部内面横ナデ。頸部外縁横ナデ	淡茶褐色	042	IV層
7	広口壺	口径 16.4	(口頸部) *垂下口縁。口縁部外縁横ナデ。頸部外縁へラミガキ。*頸部内縁へラミガキ	淡茶褐色	054	IV層 (133) 外面にスス付着
8 40-3	壺	口径 13.1 (復元)	(口頸部) *垂下口縁。口縁部は外反。頸部外縁に下平な竹管文 3コで記号文。口縁部内面横ナデ。頸部外縁ハケ後縫ナデ。(体部) *長脚形。外面ハケの上からへラミガキ。内面ハケ。頸部と体部との境目の内面指揮ナデ	灰黄褐色	019	IV層
9 44-22	広口壺	口径 21.5 (復元)	(口頸部) *垂下口縁。口縁部は外反。頸部外縁へラミガキ。口縁部内面横ナデ。頸部内面ナデ	赤茶褐色	035	V層 (316)
10	壺	口径 13.9	(口頸部) *垂下口縁。口縁部は外傾。*口頸部内面横ナデ。頸部外縁に摩滅	淡茶褐色	079	V層 (107)
11	広口壺	口径 16.8	(口頸部) *外反し、口唇部に面をもつ。*口縁部内外面横ナデ。頸部外縁ハケ状ナデ後縫へラミガキ。頸部内面斜ハケ	淡茶褐色	056	IV層 (265) 外面スス付着
12 40-4	広口壺	口径 15.7 (復元)	(口頸部) *垂下口縁。*口縁部外間に凹線 2条。頸部外縁に記号文。口縁部外縁ナデ。*口縁部外縁へラミガキ。内面摩滅	淡赤褐色	032	IV層
13	壺	底径 4.4	(体部) *球形。外面上半縫へラミガキ。*外面中央縫へラミガキ。内面上半縫指ナデ内面中央縫指ナデ。内面上半縫ハケとナデ	淡茶褐色	073	IV層 (113) 内面黒斑 外面スス付着
14	壺		(体部) *扁球形。外面上半縫へラミガキ。*外面下半ハケメ後へラミガキ。内面上半ナデ(一部指揮)。内面上半縫ハケとナデ(一部へラナナデ)	黄褐色	034	I層 (12)(13) (18)(43)(46) 外面下半にスス付着
15 40-2	長頸壺	口径 12.4 器高 29.6 最大体径 18.0 底径 5.1	(口頸部) *口頸部は直立して外傾。*口唇部は円頭状。*口縁部内外面横ナデ。頸部外縫へラミガキ。*頸部内縫へラナデ(痕あり)。(体部) *扁球形(最大径は中位)。*外面へラミガキ。*外面最大体径部横へラミガキ。内面上半縫指ナデ。内面上半縫ハケ。内面上半縫指ナデ。内面上半縫ハケ(底部) *やや突出した平底。*外面ナデ(へラナナデもある)	灰黄褐色	012	I層 (68)
16	広口 長頸壺	口径 22.3	(口頸部) *口頸部は直立し、口縁部は外反し。*口唇部は面をもつ。*口縁部内外面横ナデ。*口縁部外縁ハケ。*口縁部内面横斜ハケとナデ	淡黄褐色	037	IV層 (225) SD-02(3) 内面にスス付着
17	長頸壺	口径 10.8	(口頸部) *口頸部は直立し、口縁部は外傾し、*口唇部は尖頭状。*口縁部内外面横ナデ。*頸部外縁へラミガキ。*頸部内面ナデ	淡黄褐色	060	IV層

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
18	長頸壺		(口頸部) • 頸部は直立。頸部外面に記号文。頸部外面ヘラミガキ。頸部内面ヘラナダ (体部) • 頸部と体部の境目の内面にナデ指印え	淡赤褐色	030	
19 40-1	長頸壺	口径 9.6	(口頸部) • 口頸部は直立し、口縁部は外傾。口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナダ。頸部外面ハケ。頸部内面ナダ(一部ハケ)。外面ハケなど表面倒擦	淡白褐色	028	Ⅶ層 (207)
20	長頸壺	底径 4.5	(口頸部) • 頸部外面横ナダ (体部) • 球形。外面上半斜ハケ後ナダ。外面下半縦ハケ。内面上端指ナダ底。内面中央横ハケとナダ。内面下半縦ハケ(底部)。突出した平底。側面ナダ 外側ナダ	淡黄褐色	074	Ⅲ層 (81)
21	細頸壺	口径 7.8	(口頸部) • 口頸部は直立し、口縁部は外傾。口唇部は尖頭状。口縁部内外面横ナダ。頸部外面ハケナダの上をヘラミガキ。頸部内面指印えナダ。頸部と体部の境目の内面ヘラナダ	淡赤褐色	021	V層 (276)(280) (283)(285)(422)
22 42-14	蓋	径 13.1	(体部) • 天井部につまみのつくかさ形。透孔4コ(焼成前両方からあけた)。外面ハケ。外縁端部横ナダ。外面指ナダ。端部は円頭状	淡灰黃褐色	014	Ⅶ層 (224)
23 41-8	台付無頸壺	口径 6.0 (復元) 器高 7.2 底径 4.4	(口頸部) • 口縁部内等。口唇部は円頭状。口縁部に小孔2孔1対(焼成前にあけた) (体部) • 扇球形。外面ヘラクズリ。 内面指印え(一部ハケ) (底部) • きわめて突出したあげ底。透孔13コ(そのうち3コは貫通せず焼成前にあけた)。底部内面指印え(上から刺突した時の粘土のもり上がりあり)	灰褐色	016	Ⅲ層 (74)
24	ミニチエア鉢	口径 5.0 (復元) 器高 3.2 底径 2.4	(口頸部) • 口唇部は円頭状。内外面指印えナダ (体部) • 内外面指印えナダ (底部) • 厚い平底。側面ヘラ底。外面ナダ	灰褐色	029	
25 41-9	鉢	口径 12.0	(体部) • 外面縫にハケ。内面ハケナダ。外面下半指印えナダ (底部) • 突出したあげ底。側面指印え。外面指頭圧痕	淡赤褐色	003	Ⅰ層
26	"	口径 9.65	(口頸部) • 口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナダ (体部) • やや肩のはる珠形外面縫ハケ状ナダ。内面縫ナダ	淡黄灰色	052	Ⅶ層
27	底 部	底径 4.5	(体部) • 外面ナダ。内面斜ヘラクズリ (底部) • 突出した平底でややあげ底気味。外面ヘラ削り。内面ナダ	淡黄灰色	050	Ⅶ層 (23) 外面スス付着 底部外面黒斑
28	"	底径 4.9	(体部) • 外面縫ヘラミガキ。内面斜ハケ (底部) • 突出した平底。底側面ナダ。内外面ナダ	淡黄灰色	068	Ⅲ層 (76) 底部外面黒斑
29	壺 部	底径 7.0	(体部) • 外面縫ヘラミガキ。内面斜ハケ後あらい斜ヘラミガキ (底部) • 突出した平底。底側面ナダ。内外面ともナダ	暗褐色	049	Ⅶ層 (222)
30	底 部	底径 5.1	(底部) • 突出した平底。外面ナダ。内面くもの巣状ハケ	淡黄褐色	069	Ⅶ層 (221) 外面にスス付着
31	壺 部	底径 5.9	(体部) • 外面縫ヘラミガキ。内面縫と	淡黄褐色	042	V層 (307)(323) 内面黒斑

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器番号	備考
			斜ハケ(底部)・突出したドーナツ底 ・外面ナデ(木葉痕)・内面縦斜ハケ			
32	壺	口径 14.8	(口頭部)・短く直立的な頸部・口縁部外 面凹線 1 条・口唇部は円頭状・口縁部内 外面横ナデ・頸部外面縦ハケ後横ナデ ・頸部内面横ナデ	淡茶褐色	046	V層 (427)
33	短頸壺	口径 12.4 (復元)	(口頭部)・頸部は直立し、口縁部は外傾口 唇部は面をもつ。口縁部外面に刺突文(推 定19)・凹線2条・口頭部内面横ナデ ・頸部外面指ナデ(体部)・頸部と体部の 境目に刺突文・外面ヘラミナデ・内面指 押えナデ	淡赤黄褐色	027	V層 (286)(428) (433)(436)(430)
34	短頸壺	口径 12.3	(口頭部)・外傾して口唇部は尖頭状・口 縁部外外面横ナデ・頸部内外面斜ハケ (体部)・外面一部斜ハケ・内面しづり 目痕指頭丘底	淡茶褐色	053	V層
35 40-5	短頸壺	口径 10.3 (復元)	(口頭部)・頸部は直立し、口縁部は外傾口 唇部は円頭状・内面横ナデ(体部)・扁球形 ・外面ハケ・内面指ナデ	灰褐色	007	V層 最下層 外面にスス付着
36 44-25	短頸壺	口径 8.0	(口頭部)・口頭部は直立し、やや外傾気味 で口唇部は面をもつ・口唇部に刻目(部分 的に)・口縁部外外面横ナデ・頸部外面縦 ナデ・頸部内面横ナデ	淡黄褐色	059	V層
37 44-27	短頸壺	口径 12.2	(口頭部)・口頭部はゆるやかに外反・口 唇部は面をもつ・口縁部外外面横ナデ ・頸部外面縦ハケ・頸部内面横ハケ	淡茶褐色	057	I層
38	短頸壺	口径 11.2	(口頭部)・口頭部は外傾気味に直立・口 唇部は尖頭状・口縁部内面横ナデ・口頭 部外外面横ナデ・頸部内面縦ナデ	淡茶褐色	062	IV層 下層 (261)
39 41-6	短頸壺	口径 6.9 (復元) 器高 12.0	(口頭部)・口頭部は外傾・口唇部は円頭 状・口縁部外外面横ナデ・口縁部内面ハケ ・頸部外面ナデ(体部)・扁球形・外 面上半ヘラミガキ・内面上半指ナデ・内 面下半ハケナデ(底部)・突出した平底 ・外面一部ハケ・外面ナデ	淡白褐色	015	IV層 (232)
40 41-7	短頸壺	底径 5.7	(口頭部)・直立した頸部・口唇部は尖頭 状・頸部外面ヘラミガキ・頸部内面指ナ デ(体部)・扁球形・外面上半ヘラミガ キ(一部ハケ)・外面上半横ヘラミガキ ・内面上半ナデ・内面上半ハケナデ的ハケの ハラ筋・最大体壁あたりにハケ後、粘土を つけたあとあり		002	IV層 外面一部スス付着
41	合付 無頸壺	口径 9.2 (復元)	(口頭部)・口頭部は直立し、口縁部は外傾 し・口唇部は円頭状・口縁部外外面横ナデ ・頸部外面ヘラミガキ・頸部内面ヘラ引 り的ヘラナデ後ヘラミガキ(体部)・扁球 形・外面上半ヘラミガキ・内面上中部(指)ナ デ・内面上部ハケ	淡褐色	011	IV層 (141)
42	壺		(体部)・やや扁球形・外面ヘラミガキ ・外面に記号文あり・内面指押え	灰黃褐色	033	I層 (173)(159) (157)
43	器台	口径 26.4 (復元)	(口頭部)・口頭部は直立し、口縁部は外反 ・付加状口継(?)・口縁部外外面横ナデ ・頸部外面ハケ・頸部内面ナデ・頸部に 透し穴2個ある(旋成する前にヘラで削りと る)	淡白褐色 (外面ハケ のところだけ灰褐色)	020	IV層 下層 (84)
44 41-10	器台	直径 31.5	(体部)・直線的な体部・透孔 2 つ? ・外面にヘラ描花線 5 線 7 条絞形列点紋 5 条 ・脚柱部外面上端中央縫のあらいいハケ後縫へ	淡黄褐色	024	・外面にスス付着

項目 番号	器種	法量	形態、調査・成形法	色調	土器番号	備考
			ラミガキ外 ・脚柱部外面下端のあらいハケ ・脚柱部上面下端ハケ状ナデ ・脚柱部内面 中尖端ナデ ・脚柱部内面下端ハケ状ナデ (底部) ・屈曲して広がる ・端部は面を もじりその面は上方に肥厚 ・底部に透孔2コ ・上端部内外面横ナデ			・乾燥時にヒビ割 れをしたのか焼成 時に2カ所粘土紐 を貼付け補修して いる
45 45-34	高杯	口径 24.35	(口頭部) ・口縁部は直口し、口唇部は面をもつ。 ・口縁部内外面横ナデ(体部) ・ 外縫ハケ ・内面縫ヘラミガキ	淡茶褐色	072	V層
46 42-17	高杯	口径 25.3 底径 11.6	(口頭部) ・口縁部は外傾し、口唇部は面をもつ。 ・口縁部内外面横ナデ(体部) ・ 外縫ハケ ・内面縫ヘラミガキ	淡黄褐色	026	I層 (161)
47 42-11	高杯	口径 12.2	(体部) ・内外面縫ヘラミガキ(底部) ・円錐状の長い脚部 ・透孔6コ ・端部は面をもつ ・端部内外面横ナデ ・内面ナデ (上端指ナデ) ・外縫ヘラミガキ	淡赤褐色	025	N・4地区
48	高杯	口径 19.2	(口頭部) ・口縁部は直立 ・口唇部は圓頭状(体部) ・外下半横つづいて縫ヘラミガキ ・内面ヘラミガキ(一部横ナデ) ・内底面に接合痕	灰黄褐色	005	V層 口唇部に朱が残存
49	高杯	口径 23.8	(口頭部) ・口縁部はゆるやかに外傾 ・口唇部は面をもつ。 ・口縁部内外面横ナデ(体部) ・半球状の体部 ・内外面縫ヘラミガキ	淡茶褐色	071	
50	高杯	口径 14.7 底径 8.6	(口頭部) ・口縁部は内擣し口唇部は面をもつ。 ・口縁部外面に粘土紐残す ・口縁部外縫ナデ(体部) ・浅い碗状の杯部 ・外縫ハケ ・内面ハケナデ(底部) ・円錐状の脚部 (中空) ・透孔3孔1対か2対 ・外縫ハケ ・内面横ナデ	灰褐色	082	I層 (82)
51	高杯	口径 12.1	(口頭部) ・ゆるやかに内擣 ・口唇部は尖頭状 ・口縁部外面横ナデ ・口縁部内面横ナデ(体部) ・内擣して立ち上がる ・外縫ヘラミガキ ・内面斜ナデ	淡黄灰色	058	V層 (441)
52	高杯脚部	—	(体部) ・外縫ハケ ・内面縫ナデ (底部) ・外縫ハケ後、あらい縫ヘラミガキ ・内面縫ハケ状ナデと横ハケ	淡黄褐色	043	I層 (36)
53 42-12	高杯脚部	底径 13.4	(体部) ・内面ヘラミガキ(底部) ・円錐状の脚部 ・透孔2孔1対で3対 ・端部は円頭状 ・端部内外面横ナデ ・外縫ヘラミガキ ・内面上半部指ナデ痕 ・内面中央部 ・内面中央溝跡ハケ	淡黄褐色	051	V層 (147)
54	高杯脚部	—	(体部) ・内面ヘラミガキ(?) (底部) ・円錐状の脚部 ・外縫ヘラミガキ ・内面ナデ(粘土紐の龍目を残す)	淡茶褐色	048	I層 (188)
55	高杯脚部	底径 11.4	(底部) ・円錐状の脚部 ・透孔1孔 ・端部内外面横ナデ ・外縫ヘラミガキ (摩滅が著しい) ・内面ナデ(しづり目痕)	淡茶褐色	038	V層 脚台端部外面黒斑
56	高杯脚部	底径 9.65	(体部) ・内外面ナデ(底部) ・円錐状の脚部 ・透孔5孔 ・外縫ハケ ・内面ナデ ・端部内外面横ナデ ・端部は圓頭状	淡茶褐色	066	V層 内外面スス付着
57 45-36	高杯柱 状部	—	(底部) ・円錐状の脚部 ・外縫ハケ後縫ヘラミガキ ・内面ナデ	淡茶褐色	040	I層 (196)
58 45-37	"	—	(底部) ・円錐状の脚部 ・外縫ハケ ・沈線2条 ・外縫ヘラミガキ ・外縫ハケ ・内面ナデ	淡黄灰色	044	V層

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
59 45-38	高杯 柱状部	—	(底部)・頂部外反・円筒状の脚部の外 面縫へラミガキ・内面ナデ	淡黄褐色	039	I層
60	高杯脚部	底径 6.65	(底部)・円錐状の脚部・透孔3コ。 外縫へラミガキ・端部内外縫ナデ・ 内面しづり目底	淡茶褐色	045	V層
61	"	底径 7.6	(底部)・頂部外反・透孔2コ1対で4 対・端部内外縫ナデ・外縫へラミガ キ・内面しづり目底	淡茶褐色	067	V層
62	"	脚径 11.8	(体部)・外縫へラミガキ・内面細かい ラミガキ(底部)・エンタシスの脚部 ・凹板充填法・蓋部は外反・透孔2コ1 対が3対(焼成前にあける)・外縫へラミガ キ・内面へラミ削り(一部指揮え)・外縫 部縫ナデ・内面端部縫ナデ	淡黄褐色	006	IV層 (260)
63 42-13	"	裾径 14.4 (復元)	(底部)・エンタシスの脚部・透孔3コ (推定4コ)(焼成前に表からあけた)・杯部 と脚部の境目外縫ナデ・外縫へラミガキ ・内面へラミ削り(しづり目底)・裾部外面上 半ハケ・裾部外面下半へラミガキ・端部 内外縫ナデ	淡白褐色	018	I層 (62)
64	"	高杯	(体部)・外面上太いラミガキ・内面縫 へラミガキ・内底面に朱痕・内底面一部 に平行へラミガキ(底部)・エンタシス の脚柱部・頂部外反・凹板充填法・外 面太いラミガキ・内面ナデ・裾部外面上 半ハケ後へラミガキ・裾部内面ナデ(へ ラク度)	茶褐色 (緑っぽい)	001	IV層
65 45-35	装飾高杯	—	(体部)・外面上半斜縫ハケ・内面摩滅 ・杯底部外面に刻目・内面上半縫ナデ	淡茶褐色	081	I層
66 42-16	"	—	(体部)・直立的な握口縁に外反する口縁 を付加・内面へラミガキ・外面ハケの上 からへラミガキ(底部)・外面下半へラ ミガキ(一部縫ナデ)・外面下半ハケの上か らへラミガキ・内面へラミガキ	赤褐色	010	IV層 (120)
67 42-15	"	—	(体部)・外面に刻目突縫2条・外面上 半ナデ・外面上中央縫ナデ・外面下半ハケ ・内面へラミガキ(一部ナデ)・突縫をつけ る時の指圧痕(底部)・脚部上部に凹板 充填した時の粘土が残っている・内面へラ ミガキ	淡褐色	004	IV層 (327)
68	タコ壺	口径 5.2	(体部)・口唇部は圓頭状・透孔1コ。 口縁部内面縫ナデ(底部)・内面ナデ・ 外面調整不明	淡茶褐色	065	IV層
69	鉢	—	(底部)・外面に凹線4条	淡黄褐色	041	IV層 外面黒斑
70	"	口径 31.5	(口頭部)・口縁部は外傾・垂下口縁。 口縁部内外縫ナデ(体部)・外縫へ ラミガキ・内面あらいへラミガキ	暗褐色	070	?
71	"	口径 28.25	(口頭部)・口縁部は外傾し、口唇部は面を もつ・口縁部内外縫ナデ(体部)・肩のは 長脚形・外面平行タタキ(一部ナデ)・ 内面ハケ(0.9cm巾6条)	灰褐色	075	IV層 (243)
72 43-18	甕	口径 15.0	(口頭部)・口縁部は斜上方にたちあがり、 口唇部は円頭状・口縁部外面に擬凹線2条 ・口縁部内外縫ナデ(体部)・肩のは 長脚形・外面平行タタキ(一部ナデ)・ 内面ハケ(0.9cm巾6条)	赤褐色と 灰褐色	013	I層 (1)
73 44-33	短頸甕	—	(口頭部)・口唇部は円頭状・頸部に竹管	暗灰色	?	

項目 番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器 番号	備考
			文のスタンプ 3コ 1組の記号文。口縁部内外面模ナデ。腹部内外面ハケ。頭部内面下端ナデ(休部)。内面ナデ			
74 44-31	壺	—	(休部)。外面にうずまき状の記号文。外面ヘラミガキ。内面指ナデ(横)	淡褐色	022	Ⅳ層
75 44-32	"	—	(休部)。外面に竹管文 3コの記号文。外面上半ナデ下半ハケ。内外面指ナデ	黄褐色	031	
76	甕底部	底径 5.3	(休部)。外面縦ヘラミガキ。内面ハケナデ(底部)。突出したあげ底。外面ハケナデ	淡茶褐色	080	Ⅳ層 (314)
77	甕	口径 17.5 (復元)	(口頭部)。付加状口縁。口縁部は短く外傾。口縁部外面に凹線 2条。口縁部内外面横ナデ(休部)。扁球形。外面タタキ。内面ヘラ削り(一部ナデ)	緑っぽい 茶褐色	036	Ⅳ層
78	"	口径 18.8	(口頭部)。口縁部は外傾し。口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ナデ。口縁部外面下端に粘土紐の離ぎ目(休部)。長脚形の休部。外面左下りの太いタタキ。内面横斜ハケ状ナデ	淡茶褐色	077	Ⅳ層 (80) 外面スス付着
79 43-19	"	口径 15.0 器高 14.7 底径 4.75	(口頭部)。口縁部は外傾。口唇部は面をもつ。口縁部に弱い後線 2条。内外面横ナデ(休部)。長脚形。外面ハケメ。内面ナデ(一部ハケ)。内面に指頭圧痕	淡黄褐色	009	Ⅰ層 全体にスス付着
80 43-21	"	口径 13.8 器高 21.3 底径 5.3	(口頭部)。外傾し口縁部に面をもつ。口縁部に粘土紐の離ぎ目あり。口縁部内外面横ナデ(休部)。長方形。外面上半縦斜ハケ。外面下半上から下にヘラ削り後縦斜ヘラミガキ。内面上半縦斜ハケ。内面下半ハケナデ。粘土紐外面 3カ所内面 2カ所(底部)。突き出したあげ底。外面ヘラケズリ(横)。内面ナデ	黒褐色	023	Ⅳ層 (30)(36) (89)(90)(150) (162) 外面スス付着 内面うすくスス付着
81 43-20	"	口径 13.4	(口頭部)。口縁部はきわめて外傾。口唇部は面をもつ。外面横ナデ(休部)。肩のほんは長脚形。外面ハケ。内面指ナデ。内面最上半しばり目痕	黄褐色	008	Ⅳ層 (25)(93)(139) (241)(246)(249) (252)(253) 外面スス付着
82	"	口径 44.8	(口頭部)。口縁部に面をもつ垂下口縁。口縁部内外面横ナデ(休部)。外面縦ハケ。内面横ヘラミガキ	暗褐色	076	Ⅳ層

第27表 S D-06 出土土器観察表

1 46-5	広口壺	口径 20.3	(口頭部)。垂下口縁。口縁部は外反。口縁部内外面、端部横ナデ。口縁部外面頭部下面下方に縦ハケナデ。頭部外面下位に縦ハケナデ後横斜ハケナデ。頭部外面下位縦ヘラミガキ。頭部内面ナデ(その上から數カ所斜のヘアあり)	暗茶褐色	031	I b 層 口縁部内面黒斑
2 46-4	広口壺	口径 18.1	(口頭部)。垂下口縁。肩部と外面の境目に貼付突帶が1条。口縁端面。頭部外面上位横ナデ。頭部外面中位ナデ。頭部外面中位横ナデ。口縁部内面。頭部内面下位横ナデ後縦の施研線が數カ所	淡褐色	027	I b 層 (20)
3	広口壺	口径 14.3	(口頭部)。垂下口縁。口縁部内面、口縁部端面、頭部外面横ナデ。頭部外面中位横ナデ後縦の施研線が數カ所	淡褐色	026	I b 層 (14) 口縁部外面頭部 内外面黒斑

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器番号	備考
4 47-9	短頸壺	口径 8.2 (復元)	(口頸部) ・外反ぎみに直立し、口唇部は円頭状。口頸部内外面横ナデハケ(体部)・外面ハケナデ	茶灰褐色	004	I b 層 (24)
5	水差	口径 9.6 (復元)	(口頸部) ・外反ぎみに直立し、口唇部は円頭状。口頸部外面横ナデ頭部外面横ナデ頸部内面、ヘラ刷、ハケ窓(体部)・外面縁ヘラミガキ・肩部内面しづり目痕。内面ヘラミガキ・上位に把手のついていたあとがある	黄褐色	024	I b 層
6 47-13	器台	口径 13.1	(口頸部) ・外反ぎみに直立し、口唇部は円頭状。頸部外面縁ヘラミガキ頭部に透孔?コ	?	028	I a 層
7 47-15	蓋	口径 5.8	(底部) ・端部は円頭状・透孔2コ1対で2対(焼成前に下から上へ向かってやや乾燥上にあけた)。端部ナデ・外面ナデ・内面は指押え	淡白褐色	003	I b 層
8 47-16	蓋	径 4.6 厚さ 0.77	(体部) ・2孔1対の透孔2コ(焼成前に両方からあけた)	灰褐色	021	I b 層
9 47-14	蓋	径 8.8 (復元)	(底部) ・端部は面をもつ・2孔1対の透孔?コ(焼成前に上から下に向かってあけた)。頸部外面雑なヘラミガキ・端部内外面横ナデ・外面指押え	灰黃褐色 (あすき色)		I a 層
10 46-3	無頸壺	口径 5.0 器高 8.45	(口頸部) ・ごく短く直立した口縁部で口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)・扁珠で肩のはる体部・上部に透孔2コ1対が2対(焼成前にあけた)。外面上部ヘラミガキ・外面中央部横ヘラミガキ・外面最下部・内面上部指押え・内面ハケ(底部)・きわめて突出したあげ底・側面ナデ・外面ヘラ削り	灰褐色	007	I b 層 (21)
11 50-38	甕	口径 14.6 (復元)	(口頸部) ・口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部外面に沈線?条口縁部内外面横ナデ(体部)・外面ハケ(ヘラ痕あり)・内面ヘラ削り(大きな砂粒の移動が目立つ)	淡赤褐色	020	I b 層
12 49-26	"	口径 18.2 (復元)	(口頸部) ・口縁部はきわめて外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部外面に沈線?条。口縁部内外面横ナデ(体部)・外面上部ナデ・外面上部以外ヘラミガキ・内面上部横ヘラミガキ・内面上部以外指押えナデ	茶灰褐色	016	
13 49-27	"	口径 20.2 (復元)	(口頸部) ・口縁部は外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部外面に沈線?条。口縁部内外面横ナデ(体部)・内外面縁ヘラミガキ・内面上部以外ヘラミガキ・内面上部以	茶灰褐色	015	I b 層 外面スス付着
14 50-37	"	口径 15.2	(口頸部) ・口縁部は外傾・口唇部に面をもち、その面に凹線1条。口縁部内外面横ナデ(体部)・球形の体部・肩部外面に斜線紋・外面縁ハケ・内面ナデ	暗褐色	035	I a 層 (8) 外面体部内面スス付着
15 49-29	"	口径 18.4 (復元)	(口頸部) ・口縁部はきわめて外傾し、口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)・肩のはる長制形・外面ハケ・内面上半横ヘラ削り・内面下半縁ヘラ削り	黑褐色	008	I b 層 (25) 内外面スス厚く付着
16	底 部	底径 5.35	(体部) ・外面縁ハケ後ナデ(?)・内面あらい斜ハケ(底部)・突出した平底	淡黃灰色	036	外面スス付着

項目番号	器種	法量	形態、調整・成形法	色調	土器番号	備考
17	底部	底径 7.9	* 外面ナデ (休部) * 外面下位ハケ後斜ヘラミガキ * 内面下位縫ハケおよびハケのあたり (底部) * 突出した底部 * 側面ハケ後斜 ヘラミガキ * 外面ナデ後ヘラミガキ * 内 面ナデ	暗褐色	030	I b 層 休部外面下位に 黒斑
18	〃	底径 5.2	(休部) * 内外面指ナデ (底部) * 突 出した平底 * 側面指ナデ	灰黄褐色 内面黒褐色	005	I b 層 (10)
19 47-10	広口壺	口径 19.6	(口頸部) * 口頸部は外反し、口唇部に面をもつ * 口縫部内に列点紋 * 口最端面及び 頸部外面に波状紋 * 頸部外面下位に直線紋 5条 * 口縫部内外面縫ナデ * 頸部内面縫 ナデ * 頸部外面縫ハケ	淡赤褐色	044	I a 層 頸部外面にスヌ付 着
20 46-6	壺	底径 6.2	(休部) * 球形の休部 * 外面縫ヘラミガ キ * 内面上位指頭圧痕 * 内面中位上部へ タ削り * 内面中位下部斜ハケ * 内面下位 ヘラ削り (底部) * 突出した平底 * 側面 上面位ヘラのあたり * 側面下位ナデ * 外 面ナデ * 内面ヘラ削り	内面暗赤 褐色	042	I b 層 休部外面全体スヌ 付着 * 体部外 面中位部下位にか けて黒斑 2次焼成がなされ ている
21 47-11	短頸壺	口径 11.0	(口頸部) * 口頸部は外傾ぎみに直立 * 口 唇部に面をもつ * 口縫内外面縫ナデ * 頸 部外面縫ヘラミガキ * 頸部内面下半横ナデ * 頸部内面下半横ハケと縫ヘラのあたり	淡灰褐色	043	I b 層 (23)
22	底部	底径 6.7	(休部) * 外面下位縫ヘラミガキ * 内面 下位摩滅? (底部) * 突出したあげ底 * 外面ナデ * 内面摩滅? * 底部に穿孔 1 コ (焼成後にあけた)	暗褐色 (外面) 黒褐色 (内面)	041	I b 層 (15) 内面全体と底部外 面付近にスヌ付着
23	〃	底径 9.6	(底部) * やや突出した平底 * 外面ヘラ ミガキ * 内面斜ハケ * 側面下位ヘラ削り 的ナデ * 側面上位縫ヘラミガキ	暗褐色	039	I b 層 (19) 内面に黒斑
24	〃	底径 4.5	(休部) * 外面下位ヘラ削り * 内面下位 縫ハケナデ (底部) * 突出したあげ底 * 外面ナデ * 内面縫ハケナデ	暗赤褐色	045	I a 層
25	蓋	—	(休部) * 外面縫ハケナデ * 内面ナデ(?)	淡灰褐色	046	内面全体にスヌ付 着
26	底部	底径 45	(休部) * 外面縫及び斜ヘラミガキ * 内 面縫ハケナデ (部分的にハケナデの上に縫ナ デ) (底部) * 突出した平底 * 外面側 面ナデ * 内面ナデ	?		I b 層 (22) 底部外面に黒斑
27	〃	底径 4.85	(休部) * 外面下位縫ヘラミガキ (摩滅著 しい) * 内面下位ナデ (底部) * やや突出 したドーナツ底 * 内面指ナデ * 側面ナデ	黑褐色 (外面) 暗茶褐色 (内面)	037	I a 層 底部面に約 5 カ所 のわら芯 * 体部外 面下位に黒色物質 金布
28	〃	底径 5.7	(休部) * 外面下位横ハケナデ * 内面下位 横ナデの上に縫ラのあたり (底部) * わずかに 突出したドーナツ底 * 内面ナデ * 外面ナデ * 内面横ナデの上に縫ヘラのあたり	黑褐色 (外面) 暗茶褐色 (内面)	040	I a 層 (6) 外表面全体にスヌ付 着 * 内面スヌ付着
29 46-1	ミニチャーチ鉢	口径 5.3 高さ 4.4 底径 3.3	(口頸部) * 口頸部は外傾し、口唇部は尖頭 状 * 口縫部内外面縫ナデ (休部) * 肩 のはくら長い長脚形 * 外面にアトランダムな 縫割りあり、全休部にタッハは弱く施文具は先 端の鋭いものと思われる、内面ナデ (底部) * 突出したあげ底 * 側面指押ヘ * 端部ナデ * 外面指押え	黑褐色	006	I a 層 (4)
30 46-2	無頸壺	口径 6.0 (復元)	(口頸部) * 口縫部は内傾し、口唇部面をも る	赤黃褐色	022	I a 層

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器番号	備考
31 48-17	高杯	口径 25.4 (復元)	つ。口縁部に紐孔が 2コ 1対で 2対(焼成前に表から穿孔)。口縁部外面横ナデ。口縁部内面ナデ(体部)。扁球形の休部。外面上半ヘラミガキ。外面下半ハケ。内面上半ナデ。内面下半ハケ	黄褐色	009	I b 層 脚部のみ(29)
32 48-19	"	口径 23.6 器高 18.0	(口頭部)・口縁部は直立し、口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ヘラミガキ後横ヘラミガキ。また一部縁ヘラミガキ。口縁部の肩曲部はするどい(体部)・大きな休部。内面細かいヘラミガキのあと暗文。強いヘラミガキ(表面に 5本の暗文)。外面縁ヘラミガキ。杯部外底に指押え痕(底部)。エンタシスの長い脚部。円板充填法。外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ的ナデ	赤褐色	011	I b 層 (5)(6)
33 48-21	"	口径 28.4	(口頭部)・口縁部は外傾気味に直立・口唇部は面をもつ。口縁部内外面横ヘラミガキ。杯部と境目の内面横ナデ(体部)。深い杯部。内外面横ヘラミガキ(底部)。円錐状の脚部・透孔 3コ 1対で 3対(焼成前に表からあけた)・端部は円頭状。外面縁ヘラミガキ。内面指押えナデ。縁部内外面横ナデ	黄褐色	001	I b 層 (26) 口縁部外面に黒斑 1カ所
34 50-31	"	口径 25.0 (復元)	(口頭部)・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ。口縁部の外面に弱い斜線。口縁部の内面横ナデ(体部)。外面細い縦ヘラミガキ。内面細かいヘラミガキ。円板充填法	灰褐色 (黒っぽい ところと 緑っぽいと ころあり)	014	I b 層
35 48-20	"	口径 22.0 (復元)	(口頭部)・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ。口縁部に接合痕あり。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面ヘラミガキ(ナデたあとがある)。内面ヘラミガキ(底部)。円板充填法	黒褐色と 赤褐色	002	I a 層 (2)
36 50-35	"	口径 25.2 (復元)	(口頭部)・口縁部は外反し、口唇部は円頭状。口縁部外面はまばらなヘラミガキ。口縁部内面横のヘラミガキ(体部)。外面まばらなヘラミガキ内面縦ナデ	赤褐色	012	I b 層 口縁部内面 朱付着
37 50-33	"	口径 22.2 (復元)	(口頭部)・口縁部は直立し、口唇部に面をもつ。口縁部外面に凹線 1条。口縁部面にナデによる(?)沈線 2条。口縁部内外面横ナデ(体部)。外面ヘラミガキ(?)。内面ハケ(?)	灰褐色	013	I b 層
38 48-18	"	口径 25.0	(口頭部)・口縁部は外傾し、口唇部は円頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)・浅い斜状の杯部。外側面に縦ヘラミガキ。内面縦ヘラミガキ。内底ヘラミガキ(底部)。円錐状の長い脚部。外面上部ハケ。外側面にヘラミガキ。内面ナデ(ヘラナデ底もある)	黒褐色 (灰色っぽい 赤色っぽいと ころがある)	025	I b 層
39 49-23	高杯 柱状部	—	(体部)・外面縦斜ヘラミガキ。内面ヘラミガキ(?) (単位不明) (底部)・円錐状の長い脚部。外側面ハケ後、あらい縦ヘラミガキ。内面横ナデ	—	034	I b 層 (11)
40 49-24	"	—	(底部)・円錐状の脚部。外面上部縦ヘラミガキ。外側面ナデ(粘土紐の織目)。外面上部縦ヘラミガキ。脚台部外側面縦ヘラミガキ	黄褐色	033	I b 層 (28)

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器 番号	備考
41 49-25	高杯 柱状部	—	ヘラミガキ。内面しづり目痕。脚台部内面上部横ハケ (体部)・内外面、縦ヘラミガキ (底部)・円錐状の脚部。外面ナデ後2カ所に縦ヘラミガキ。外面下端部内面横ナデ。内面下端部横ハケ	淡黄灰色	032	I b層 (30) 内外面スヌ付着
42 49-28	高杯脚部	底径 13.1	(底部)・円錐状の長い脚部。裾部は外反し端部は面をもつ。透孔3孔1対が3対(焼成前にやや深くなった時に両方からあけた)。外面縦ヘラミガキと指押え。内面横ヘラミガキと指押え。 (底部)・円錐状の長い脚部。裾部は外反し端部は面をもつ。透孔6孔。外面縦ヘラミガキ(枯土紐の難き目)。内面横ナデ。裾部外面縦ヘケナデ。端部内外面横ナデ	灰褐色	010	I a層
43 48-22	高杯脚部	底径 12.0	(底部)・円錐状の脚部。裾部は外反し端部は面をもつ。透孔6孔。外面縦ヘラミガキ(枯土紐の難き目)。内面横ナデ。裾部外面縦ヘケナデ。端部内外面横ナデ	灰褐色	029	I a層 (2) 外面スヌ付着
44 50-36	高杯	口径 16.8 (復元)	(口頭部)・口縁部は外反し、口唇部に面をもつ。口縁部内外面横ナデ(体部)・深い碗状の杯部。内面縦ヘラミガキ (底部)・内外面ヘラミガキ。内面ナデ。(表面剥離)・端部内外面横ナデ接合痕あり	淡赤褐色	017	I a層
45	高杯脚部	底径 10.1	(体部)・内外面ヘラミガキ・円錐状の脚部・端部は面をもつ・透孔4孔(焼成前にあからあけた)・外面、ヘラミガキの上からヘラミガキ。内面ナデ。(表面剥離)・端部内外面横ナデ接合痕あり	淡褐色	018	I b層

第28表 SD-01 出土土器観察表

項目 番号	器種	法量	形態・調整・成形法	色調	土器 番号	備考
1	二重口 縁壺	口径 16.6	(口頭部)・口縁部は外傾。口縁部内面に列点文。口縁部外面に円形浮文+竹管文+波状紋。口縁部内面横ヘラミガキ。口縁部外面横ナデヒナデ	淡黄褐色	006	V層
2	〃	—	(口頭部)・頭部は直立。外面縦ヘラミガキ。内面横ナデ。口縁部外面に円形浮文。頭部外面下端に刻目突帯(体部)。外面横ヘラミガキ	淡茶褐色	007	V層
3 51-3	鉢	口径 15.05 器高 4.95	(口頭部)・口縁部は外反し、口唇部は内反して尖頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)・浅い半球状。内外面横ヘラミガキ(細かい)	淡茶褐色	001	IV層
4 51-4	〃	口径 14.5 器高 4.8	(口頭部)・口縁部は外反し、口唇部は尖頭状。口縁部内外面横ナデ(体部)。内外面横ヘラミガキ(細かい)	淡茶褐色	002	IV層
5 51-5	〃	口径 14.25 器高 4.7	(口頭部)・口縁部は外傾し、口唇部は尖頭状。口縁部内外面横ナデ。外面横ヘラミガキ。内面横ナデ後細かいヘラミガキ	淡茶褐色	003	IV層
6 51-2	甌	—	(口頭部)・口縁部は外傾。(体部)・扁球形の体部。外面横及び斜ハケ。内面横ヘラミガキ	暗褐色	005	口縁部体部にスヌ付着 V層
7 51-1	壺	底径 3.9	(口頭部)・口縁部は外傾。(体部)・外面に間隔をもつて20本の線刻。内面指押え(底部)・突出した平底。側面指押え	灰褐色	004	V層

第3節 亀井遺跡出土のト骨について

1. はじめに

わが国に関する最古の史料とされる魏志倭人伝の条に「其の俗、事を舉い行き來しに、云為するところ有れば、輒ち骨を灼きてトし、以って吉凶を占い、先ずトするところを告ぐ。其の辞は令危の法の如く、火折を見て兆を占う。」といふ文があり、骨を焼いて、そこに生じたヒビ割れ・色調の変化をみて吉凶を占う風習について記している。その事例を具体的に示す考古遺物として点状に焼灼を施した灼骨（ト骨）がある。ト骨に使用される動物は、鹿、猪の肩甲骨・中足骨、亀甲で、大半は鹿の肩甲骨を好んで利用している。亀トは今までのところ弥生時代に出土例がなく古墳時代以降に出現する。弥生時代に属するト骨は現在60の出土例が知られている。

神沢勇一氏は混屯とした状態にあった日本の各地より出土しているト骨を集大成し、中国大陆^(註1)でのト骨の発展段階と対比させ技術のうえから次のⅠ～Ⅴの5形式に分類している。

- Ⅰ 整形を全く施さず、素材の片面に点状に灼を加えたもの。
- Ⅱ 素材の表面の一部を鋭利な刃物で削り、その部分に点状の灼を加えたもの。
- Ⅲ 素材の片面を大きく削り、平面が不整円形を呈する粗雑な鑽を彫りこんで、鑽の内側に灼を加えたもの。
- Ⅳ 整形した素材の片面に、平面が円形・断面が半円形の鑽を設け、鑽の内側に灼を加えたもの。
- Ⅴ 素材を主に切削によって整形し、片面に平面が長方形の鑽を彫りこみ、その内面に灼を加えたもの。

各々の形式は、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ・Ⅳ→Ⅴへとはば大陸と同様な変遷を辿ったと推定し、その編年的位置づけを行なっている。一方、新田栄治氏は世界的視野から日本出土のト骨に照準を合せ、民族学的・考古学的にその位置づけにアプローチしている。^(註2) 民族学的にト骨を概観すると、使用される動物種名は、ヒツジ・ハクチョウ・シカ・ノロジカ・アザラシ・ブタ・ヤギ（以上、肩甲骨を利用）、ニワトリ・ガチョウの胸骨を使用している。これらの動物の選定にあっては、それぞれの地域で最も入手しやすい動物骨を用い、狩猟対象の動物捕獲にあっては、それと同じ動物を使用する例が多いことを紹介している。次にト骨法について触れ、手法の点から1) 骨を焼いて生じた亀裂、色調の変化に基づいて占う方法（有灼法）、2) 骨を焼かずに自然のままの状態で骨の表わす特徴に基づいて占う方法に2大別されるとし、さらに前者を全面有灼法と点状有灼法に分類した。これら3つに分類された手法は、空間的に地域を異にし分布していることを明らかにした。それによると、点状有灼法は中国、朝鮮、日本の地域に限られるとした点、日本出土のト骨の系統を考えていく上で重要な示唆を与えていている。

今回の調査において、イノシシ肩甲骨を利用したト骨1点を得たので以下に、その報告をする

し、あわせて畿内弥生時代出土のト骨について紹介してみたい。

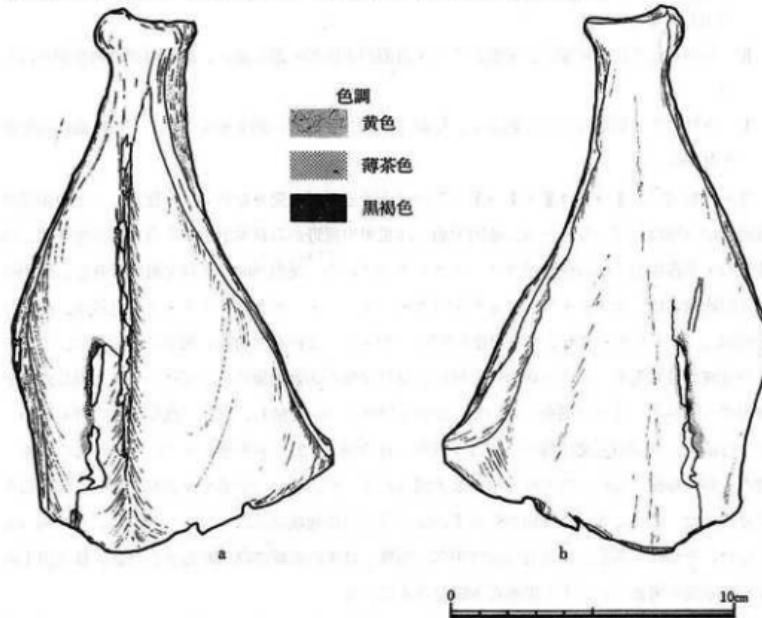
2. ト骨の出土状況及び骨学的特徴

前述のように、弥生時代中期後半 SD-03溝（東地区）1ブロックの（Y）層から、外側面を上に向かた状態で出土した。（図版9a）イノシシ (*Sus scrofa leucomystax*) の右側肩甲骨を利用したもので、保存状態は良好と云える。肩甲棘、背縁の一部を欠失するほかは、完形を良く保持している。関節上結節は完全に癒着しており、成獣の個体のものである。（第153図）。性別は不明。

肩甲骨の計測値については、第29表にまとめている。なお、計測点及び計測項目は、斎藤弘吉氏『犬科動物骨格計測法』1963に従い、これをイノシシの計測に採用した。計測器具としては、オフセットノギスを用いた。

ここで、比較資料として計測値を表につけ加えている肩甲骨（L）は、1982年1月に丹波篠山^{（近4）}で捕獲されたイノシシ（♀）のものである。下頸骨後臼歯の崩出と磨耗からみた年齢は、M₃の歯槽部が割れ、今まさに崩出しようとしている段階で Age class 2 と 3 の中間にあり、生後約1.5～2.5才に相当するものと思われる。

従って、ト骨に使用された肩甲骨は篠山産イノシシ肩甲骨の大きさと比較して（雄・雌の差異も考慮）やや年齢のすんだイノシシで、約2.5才程のものと推定される。



第153図 魚井遺跡出土のト骨 (少)

a.外側面 b.筋骨面

第29表 イノシシ肩甲骨の計測値

計測部位	ト骨(R) (mm)	現生イノシシ(L) 2.5才♀(mm)
全長(関節上結節最下端より棘基部頂頭までの長さ)	192.4	175.7
頭部最小幅(肩甲切痕前縁よりその対照をなす後縁までの最小幅)	25.3	22.3
下部幅(関節窓後縁より鳥口突起基部外縁端までの幅)	35.9	34.3
関節窓長(関節窓前後縁端間最大長)	29.9	28.8
関節窓幅(関節窓上下縁間最大幅)	23.9	24.2

3. 焼灼状況について

本標本(第153図)に認められる加工痕(整地?)は、唐神遺跡出土のト骨にみられるような後縁を削平(整地)したものとはいくぶん趣きを異にしている。肩甲縫を根元から人為的に除去し、棘下窓、鋸筋面には鋭利な刃物によるものと思われるこまかにケズリ痕(光沢をおびる)が観察された。前者は、明らかに焼灼面を水平にしようとしたためであろう。後者は、骨表面を削ることにより焼灼面を滑沢・薄平にしようという意図がはたらいたものであろうと思われた。

焼灼痕は、外側面からみて棘下窓に1列4カ所、骨が焼けて骨色の変化した部分が観察され、肋骨面にも及んでいる。いかに火にあたったところは黒褐色に変色し、中心から離れるにしたがい幅1mm前後の薄茶色、そして外周に1~3mm幅の黄色に変化した部分が認められた。焼灼の行われた所の骨厚は約1.0mm前後と、最も薄い海面質の認められないところを選定している。その焼け方から考えて、肋骨面に棒状のもので点状に焼灼を加えたものと思われる。外側面にはそれに対応する変化がはっきり現われ、火事が走り骨の収縮がみとめられた。このようにして外側面に現われたヒビ割れ・色調の変化は占う対象(物)の判断(吉凶)を決定した結果そのもののであろうか。興味のひかれるところである。

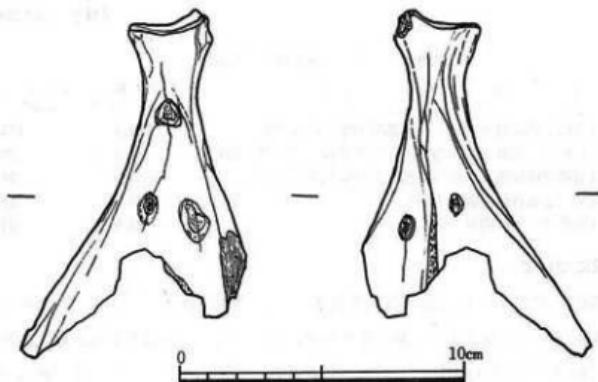
4. 誰内における弥生時代ト骨の出土例

最近の調査によって亀井例のほかに類例は少ないが、森の宮遺跡、鬼虎川遺跡からそれぞれト骨の出土例が知られている。

森の宮遺跡は、上町台地の東端に位置し繩文時代、弥生時代を主体に經營された集落遺跡である。出土したト骨は、亀井例と同じくイノシシの肩甲骨を利用したもので肩甲骨の大きさから若獣の個体のものと思われる。掲載されたト骨の実測図(第155図)からして、肋骨面後縁、肩甲縫に若干の加工を施している。焼灼痕は肋骨面肩甲頭や下位に1カ所、肩甲下窓に2カ所、梢円形もしくは不正円形となって残存し、亀裂を生じさせている。前者の焼灼は、骨の厚いところを選定して行っているため、外側面に



第154図 肩甲骨外側面の細部名称



第155図 森の宮遺跡のト骨(3分)

達していない。後者は、外側面にも焼灼がみられた。鬼虎川遺跡からもイノシシ、ニホンジカの肩甲骨を利用したト骨が出土している。また近畿自動車道関係の亀井遺跡(KM-K)の調査でも、イノシシ、ニホンジカの肩甲骨を利用したト骨が数例出土している。中にはニホンジカ肩甲骨の肩甲縫にも焼灼を行い、他に頸をみないものを含んでいる。

5. 小 緒

以上、畿内弥生時代に所属するト骨は、今までのところわずかに3遺跡(亀井、森の宮、鬼虎川)において、その出土例を確認している。本例を含めて、これらのト骨に共通している点はいずれも弥生時代中期のものであること、使用される動物もイノシシ、ニホンジカに限られることである。このことは、イノシシ、ニホンジカが弥生人にとって動物性タンパク質を得るために重要な供給源であり、かつ銅鐸絵画にも描かれるように最も身近な動物であったことが大きく基因しているのであろう。次に焼灼状況からト骨を視すると大きくは2つに分類される。1) 報告例のように比較的骨厚の薄い肩甲下窓に焼灼を行なう場合。2) 肋骨面肩甲頭、後縁等の骨の厚い部分に焼灼を行なう場合がある。両者の相違は時間的(新旧関係)なものではなく、どの面でトするところの結果を読みとるかの違いなのであろう。前者の場合は、焼灼面と反対の外側面に現われた色調の変化・亀裂の方向を調べ、後者は焼灼面と同一面である外側面に生じた焼灼痕の色調等によってトするところを判断したのであろう。森の宮例では二者が併存しておりそのことを裏づけるものといえよう。鬼虎川出土のト骨は、いずれも後者の例に属している。

註1 (三国志・魏書第30・東夷伝・倭人) の略称。

註2 神沢勇一「弥生時代古墳時代および奈良時代のト骨ト甲」蒙台史学 38 1976

註3 新田栄治「日本出土ト骨の視角」古代文化29-12 1977

註4 長谷川善和他「動物考古学確立のための基礎的研究、文部省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡、古文化財等の研究、昭和57年度年次報告書」1981 p.388~391

註5 木村幾多郎「長崎県佐世保市出土のト骨」考古学雑誌64-4 1979

註6 「難波宮跡研究調査年報1975~1979.6」財団法人大阪市文化財協会1981.2

註7 松田順一郎氏の御配慮で実見の機会を得た。

第4節 亀井遺跡出土の動物遺存体

1. はじめに

本遺跡の動物遺存体調査の契機は、昭和53年以後数年に亘って、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡出土の動物骨を調査した際、そこから出土した動物骨の整理をしていた宮崎泰史氏と知り合ったことからであった。昭和55年以来、幾度かに亘って文化財センター長吉分室で亀井遺跡の資料をみる機会を得たのは、後に、文化財センターにはいられた宮崎氏の計^(註1)からであるが、和泉池上遺跡の動物骨調査によって筆者らが提起した問題を、亀井遺跡の資料についても考究したかったからである。大阪文化財センターから調査の機会が与えられ、今回その報告をまとめることができた。この報告紙上を借りて、文化財センター理事兼事務局長井上定清氏に厚く御礼を申し上げたい。また、資料の撮入、整理の過程で、種々お世話になった文化財センターの宮崎泰史氏と調査関係の方々、奈良国立文化財研究所の土肥孝氏にも心からの御礼を申上げる次第である。

2. 動物遺存体の概要

各調査区における動物遺骸は、それぞれの地区において、詳しい出土遺物の説明表（第33表）をあげておいた。それによって、遺物の内容は理解していただけるものと考える。ここでは、全体を通して特に注意される遺物について、その問題点と、今後の研究の方針についてのべておきたい。先ず検出された動物種の一覧表を上げておく。

第30表 脊椎動物遺存体種名表

	脊椎動物 Vertebrata
I	軟骨魚綱 Chondrichtyes
1.	エイ目の一一種 Rajiformes fam. indet.
II	硬骨魚綱 Osteichthyes
	コイ目 Cypriniformes
2.	コイ科の一一種 Cyprinidae gen. et sp. indet.
	ナマズ目 Siluriformes
	ナマズ科 Siluridae
3.	ナマズ <i>Parasilurus asotus</i>
4.	ギギ科の一一種 Bagridae gen. et sp. indet.
III	両生綱
5.	無尾目の一一種 Anura (Salientia) fam. indet
IV	爬虫綱
	カメ目 Chelonia

スッポン科 Trionychidae

6. スッポン *Trionyx sinensis japonicus*

有鱗目（ヘビ亜目）Ophidia

7. ナメラ科の一種 Colubridae

V 鳥綱 Aves

8. 種不明 sp. indet.

VI 哺乳綱 Mammalia

食虫目 Insectivora

9. モグラ科の一種 Talpidae gen. et sp. indet.

齧歯目 Rodentia

ネズミ科 Muridae

10. ドブネズミ *Rattus norvegicus*

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

11. タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

12. イヌ *Canis familiaris*

奇蹄目 Perissodactylo

ウマ科 Equidae

13. ウマ *Equus caballus*

偶蹄目 Artiodactylo

イノシシ科 Suidae

14. イノシシ *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

15. ニホンジカ *Cervus nippon*

i 魚・両生・爬虫・鳥類

これらの骨の出土は極めて少なく、これらが食料、その他の資源として、どれ程の価値があつたか予測し難い。しかし、一つ一つは、四季折々の中で人と自然とを、結びつける仲立ちなる生き物であったろう。魚類は、エイ類を除いて淡水性のものが主で、焼けている骨のあったところをみると、炉端で処理されることが多かったのであろうか。さらにカメ、カエルの骨の焼けているのも出土している。鳥類は、サギ類の比較的大型の骨を得たのみである。上腕骨を輪切りにして管玉形のものをつくっているが、サギ類の長い管状の骨は、それには好都合であったのだろう。単なる装身具以上の意味が込められていたのではないだろうか。家禽と思われる骨を検出すことはできなかった。

ii 獣類

検出された種類は少なかった。特殊なものでは、大型のドブネズミの骨が場所によって多かった。溝中に生活し、棄てられた骨を噛り、作物を荒す惡物であったことは今と変りない。

中型野生獣では、タヌキの下顎骨1点を得たのみである。吻端と下顎枝部分に強く咬まれた痕がのこる。この遺跡から出土する骨には、縄文の貝塚でみるよりもこうした咬み痕のつく骨が多い。イヌの歯痕であるが、亀井のイヌの特に大型であることと関係ないであろうか。

3. イヌ

亀井遺跡からは、弥生中期から後期にかけて飼育されていたイヌの遺骸二例の他に、断片的な骨としても出土している。二頭分の遺骸は、SD-03溝の出土で雌雄の二体であり、幸い頭骨の保存も良好で、弥生時代の家犬として極めて貴重な発見であった。今その詳細をのべる余裕がないが、頭骨について簡単にその特徴を記し計測値をあげておきたい。

〔頭蓋骨〕1号犬

1号犬頭骨最大長175.0 mmという大きさは、長谷部分類規準による中型の中等犬に属する大きさであるが、縄文時代から弥生時代に至る本州各地から知られる資料のなかでは大きな頭蓋である。弥生時代の資料については、まだ計測、報告された資料は少ないが、縄文時代の関東以西の幾つかの例などと比べると、亀井1号頭蓋のはるかに大きいことが特筆されよう。頭頂骨の中央稜は強く発達し左右の側頭線は、冠状縫合の位置で正中線に合している。前頭骨は同骨頬骨突起付近で強く膨隆しており、これに対して頭頂骨の正面に僅かに凹む形態を示す。前頭骨から鼻根にかけてゆるやかな凹みを持つが、陥凹するような形ではない。頬骨は特に張り出す形態ではなく、頭蓋の長・幅の割合は石器時代犬と変わらない。歯牙は P^4 、 M^1 、 M^2 にみる限り頭蓋の割には小さく、石器時代のさらに小さい犬と変わらない。

〔下顎骨〕1号犬

大きく頑丈な骨である。特に注意される形態で、その下縁（喉頭縁）の湾曲が、やや強くみられる点である。これは筆者のみている東日本の縄文時代犬の中小型にみる形態と比較してのことであって、亀井の弥生犬がやや丸い額付きをしていたことを示すようである。下顎骨の大きな割には、 M_1 の大きさは中小型の犬と殆ど変わらない。

〔頭蓋骨〕2号犬

1号犬と共に出土した個体である。1号犬に比べてかなり小さく、長谷部分類規準のさらに一ランク低い中小型の小さい方の大きさになる。雌であろうと考えられている。中央稜は、比較的強いが、後頭骨頭頂部を形成する部分の骨隆起は、1号犬頭蓋のように突出しない。しかしまた左右側頭線は冠状縫合あたりで合する形態をとるところは、1号犬と異なるところがない。

前頭骨も、よく膨張する。前頭骨の鼻根部陥凹は僅かにみられるが、その形状は1号犬頭蓋と全く同じである。歯牙の大きさなど、縄文期の同程度の大きさのものと変わらない。

〔頭蓋骨〕3号犬

頭蓋骨のみ出土したもので、三例中最も小さい。前頭骨左右側頭線は冠状縫合の近くで合するが、1号犬、2号犬例のように稜をなして密着するようではなく、また前頭骨の上部後端部分も平らである。おそらく雌のものであろう。前頭間縫合は殆んど消失しており、三つの頭蓋中最も年令を経たものとみられる。前頭骨の鼻根部陥凹は僅かであるとみられ、その程度は殆んど同じである。

以上にのべた各部位の骨から推定される犬の体高は、雄では46cm、雌では43cmになる。

それは、これまでに知られている西日本の縄紋時代に飼育されていたイヌの多くが、日本大小型の標準体高♀36.4cm、♂39.4cm前後であるのと比べて、かなり大きな犬であったことになる。

(第32表参照) 中型日本犬の標準体高は♀48.5cm、♂51.8cmである。亀井のイヌは、これには及ばないが、これに近い、古代犬としてはかなり大きなイヌであったといえよう。縄紋時代犬の中でも、東北地方の縄紋貝塚から出土する例には、これに匹敵する大きさの出土例もある。この程度の大きさのイヌが畿内地方で縄紋時代に飼育されていた可能性もないわけではない。これについては今後の調査を待たねばならないであろう。一方、この亀井遺跡の大きなイヌは、

S D-02 前頭骨～吻端部

S D-06 左右下頸骨

の諸例がこれに匹敵する大きさの個体のものである。さらに、八尾市恩智遺跡でも、数個体分知られているイヌの遺骸中、遊離下頸骨で全長131mmという標品があり、これも亀井の雄犬(1号犬)^(注2)と同程度の大きさのものであった。ところで、亀井出土のイヌの骨で注目されるところに、その椎骨に人為的な切断の痕跡、さらに下頸骨にも不確かであるが人為的な穿孔を思わせる孔のある例がある。脊椎骨にみられる切断痕は解体のためであったろう。縄紋時代を通してイヌの解体を推察させる資料は稀である。亀井の場合でも何か儀礼的な意図があつてのことなのであろう。

これについても、今後の資料の追加を待って考えねばならないことと思っている。

文 獣

註1 金子浩昌・牛沢百合子：池上遺跡出土の動物遺存体 池上・四ツ池遺跡 第6分冊 自然遺物編

(1975) 大阪文化財センター

金子浩昌：弥生時代の貝塚と動物遺存体、三世紀の考古学上巻所収(1980) 学生社

註2 安部みき子：恩智遺跡出土の獸骨、恩智遺跡(1980) 瓜生堂遺跡調査会

第31表 置換別動物置存体の概要

溝込 I (中期前半)		溝底土 (中期前半)		SD-03(中期前半)	
イノシシ：乳頭骨存しM1・前出 6-7ヶ月 1 M1・後出 3 M2・前出 2 M2・後出 2 M3・前出 1 M3・後出 3 M4・前出 1 M4・後出 1	イノシシ：肩甲骨存しM1・前出 0.5才 M1・後出 2 M2・前出 1 M2・後出 1 M3・前出 1 M3・後出 1 M4・前出 1 M4・後出 1	イノシシ：スツボガ、エイ、ナマズ、キビなど水生魚 スツボガ、シカは見当しない。ただ スツボガ、マダラなどの骨は溶けて いるので、強火を受けているのが 多い。 スツボガの内腹腔には 多くの骨が入っている。 スツボガの小腹部分に 骨を剥離してから骨格である。 骨格を剥離してから骨格である。 工具品：シカの左尺骨と右腕骨 1枚、骨頭部が欠けた状態である。 骨頭部が欠けた状態である。 工具品：シカの左腕骨と右腕骨 1枚、骨頭部が欠けた状態である。 工具品：シカの左腕骨と右腕骨 1枚、骨頭部が欠けた状態である。	イノシシ：骨頭骨存しM1・前出 0.5才 M1・後出 3 M2・前出 1 M2・後出 1 M3・前出 1 M3・後出 1 M4・前出 1 M4・後出 1	イノシシ：d.m.=頭出(M1) <0.5才 M=M頭出直徑 M=M頭出直徑 (M1)=頭出 (M3)=頭出 M=M	イノシシ：E区に指骨、W区に主要頭骨骨が目立つ。 上腕骨、尺骨、脛骨等などに骨吸収が 多く、骨頭部の下側には解剖・保存の痕 跡が見られる。 骨頭部の下側には解剖・保存の痕 跡が見られる。 骨頭部の下側には解剖・保存の痕 跡が見られる。 骨頭部の下側には解剖・保存の痕 跡が見られる。 骨頭部の下側には解剖・保存の痕 跡が見られる。
SK-03 土坑 (中期後半)	方形容溝盛(中期前)	包含層残地(中期)	SD-04溝(後期前半)	SD-01溝(古漁跡中期、布面地)	
イノシシ：頭骨、大歯の後頭部で骨質を食 べるための骨盤が残されたある。頭骨 に特徴的な骨盤が骨頭部に乏しつとよも れられる。頭骨は後頭部に乏しくよもよ かがちとなる。 工具品：骨頭部が焼けている。 工具品：骨頭部が焼けている。 工具品：骨頭部が焼けている。	イノシシ：2才 2才 2才 2才 2才 2才 2才 2才	イノシシ：計2個体 計2個体 計2個体 計2個体 計2個体 計2個体 計2個体 計2個体	イノシシ：頭骨ののみ。1~2才の若齢2 個体、四肢骨は頭骨以下の後肢が目立つ。 ニホンジカ：ほぼ完存する頭骨が目立つ。 ニホンジカ：頭骨は頭骨骨存しと目される。 ニホンジカ：下顎骨の他、上腕骨、脛骨、 二箇所が骨頭部が焼けている。 工具品：骨頭部が焼けている。 工具品：骨頭部が焼けている。	イノシシ：頭骨のみ。1~2才の若齢2 個体、四肢骨は頭骨以下の後肢が目立つ。 ニホンジカ：ほぼ完存する頭骨が目立つ。 ニホンジカ：頭骨は頭骨骨存しと目される。 ニホンジカ：下顎骨の他、上腕骨、脛骨、 二箇所が骨頭部が焼けている。 工具品：骨頭部が焼けている。	イノシシ：頭骨のみ。1~2才の若齢2 個体、四肢骨は頭骨以下の後肢が目立つ。 ニホンジカ：ほぼ完存する頭骨が目立つ。 ニホンジカ：頭骨は頭骨骨存しと目される。 ニホンジカ：下顎骨の他、上腕骨、脛骨、 二箇所が骨頭部が焼けている。 工具品：骨頭部が焼けている。
KM-H1, H2 S D-06溝(地頭前半)	SD-02大溝(後期前半)	SD-01溝(古漁跡中期、布面地)			
イノシシ：頭骨、大歯の後頭部で骨質を食 べるための骨盤が残されたある。頭骨 に特徴的な骨盤が骨頭部に乏しつとよも れられる。頭骨は後頭部に乏しくよもよ かがちとなる。 工具品：骨頭部が焼けている。	イノシシ：0.5才 1 1 1 1 1 1 1	イノシシ：0.5才 1 1 1 1 1 1 1	クマ：上顎臼歯 ウサギののみ。		
犬齒が目立つ。頭骨は骨頭部の大歯 があり、大歯孔もみられる。頭骨骨存し。	2才 2才 2才 2才 2才 2才 2才 2才	計3個体			

第32表 犬・猫生駆除犬の計測表

計測部位	小型犬	吉 胡 後脱期	出生期・思春期 中 期	粗文明・吉胡期		出生期・思春期 後・晚期	後期SD-06	中 期	中型犬	出生期・龟井期 中期	後期・鈴木期				
				♀(若)	♂(若)										
					♀	♂									
最大頭骨長	x-155	147	146	156-170	156	-	-	171-185	175	160	-				
脳頭蓋長	x-83	80	82	84-93	83	-	-	94-103	96	84	-				
最大頭蓋巾	x-54	51		55-59	52	58	-	60-64							
顎長N-P	x-76	72	72	77-84	77	-	69	85-92	84	80					
吻長(眼窩)	x-64	63		65-72	68	-	61		73-80	74	71				
上 齒 巾	x-52	51		53-57	52	-	-	58-62	59?						
上臼齒長	x-52	53	51	53-57	58	(55)	50	58-62							
下顎骨長(W)	x-113	107	107	114-124	116	(119)	-	117	120	125-135	128				
下臼齒長	x-60	59	56	61-65	63	65	-	61(鈴木)	65	66-70	68				
上腕骨長	x-120	114		121-135	-	135	107		136-150	144	136				
焼骨長	x-115	-		116-130	117	124	102		131-145	-	133				
尺骨長	x-140	-		141-155	138	-	122		156-170	171	156				
大腿骨長	x-135	-		136-150	135	143	-		151-165	158	148				
胫骨長	x-130	-		131-145	134	-	-		146-160	157	146				

方形周溝墓

哺乳綱 イノシシ	* L M ₁ ⁺ , M ₂ のみ残欠 頬側のみを残す破損歯である。咬耗は僅かで、M ₁ は未萌出であったと推定される。	* R 上腕骨 d. (b.48.5) よく成育した大形個体のものであつたと推定される。鉄分らしいものの付着物がみられる。骨幹はほぼ中央で折れている。
	* R M ³ (l.32.0, w18.5) 主要咬頭は未咬耗段階の歯である。おそらく僅かに先端のみ露呈した程度の萌出であったと思われる。	* L 棘骨 p. (b.32.6 l.21.3) p. 近くのみをのこす。上記上腕骨よりはるかに小さい。
ニホンジカ 體部分 イノシシ 骨片 シカ	これと別に臼齒の断片 6点が出土しているが これも咬耗のごく弱い歯のものである。	* R 肋骨 s. 上部の折れ口部分に咬み痕が著しい。下部の折れ口は新しい。大形ではない。
	* L I ₁ 歯冠部のみ	* 中節骨 d. 破片
	* R m _d . (P ₃ , P ₄) 粘土中におよび現存の状態で採集されている標本で骨体部は半ばを破損。	* L 上腕骨 d. (b.43.5) 滑車部分の前面と後面を失う。前面の滑車部分が大きく欠けるのは、珍しい破損である。関節部で分断しようとして、石器でこの部分をたたき割ったものらしい。
		* R 肋骨片 d. 全体の1/2をのこすのみの小片。 * R 跛骨 } 断片 * L 跛骨 蹠骨の破損は新しいもの。蹠骨は焼けてもろくなつたものが欠けたらしい。焼けこげた痕跡がある。
加工品 骨針状のものの小断片 現存長 9.0 中央径 4.0×5.0 小片のため原形は不明、焼けて灰白色化、表面に細密痕があり、整形時の加工であろう。		灰白色に 焼けた小 片 5 (鳥骨?) その他 7

SD-03E

硬骨魚綱 ナマズ		* L 鰓骨 遠位端を僅かに欠損する。
両生綱 カエル類		* 1 ブロック(V)層鳥口骨 * 2 ブロック(V)層肩甲骨、副蝶形骨 椎体、後頭骨 L
爬虫綱 スッポン		* 3 ブロック(V)層大腿骨片
鳥綱 * 種不詳		
哺乳骨 ドブネズミ		
	* 上顎骨 * R > 下顎骨	R・L 大腿骨、R 肋骨 R 上腕骨 2 * L 大腿骨、R 骨盤 * R 尺骨、R ral
* 頸椎、腰椎	* 2 個体分位の埋存骨はあったのである。	

イヌ

* 脊椎No.1~6
No.6 脊椎の後端は棘突起が斜めに切離される。
胸椎No.13 左側乳頭関節突起に切り込みがある。
棘突起先端に病変?

中節骨

イノシシ

- * L 上顎骨片 (M^1) ($L.16.25, w13.6$)
 M^1 の完全萌出段階
- * LM¹, 後端咬頭のみ断片
 M_1 は未萌出段階であろう。
- * Li¹, Ri¹, R の方が咬耗進んだ歯
- * L M¹
dm¹ 落出段階のもので、 M_1 は未萌出
- * R 下顎骨角部、 M_3 の完全萌出以前の若い個体の下顎骨と思われる。
- * R 副頭骨外耳孔部
 M_4 落出前の若い個体の頭骨と思われる。
- * LM¹, 後端欠損
 M^1 落出直後で、 M^1 は未萌出段階

- * R 肩甲骨ト骨として利用されているもの。肩甲骨の中央を走る肩甲棘の上側、棘上窓の部分下寄りの位置に孔があき焼けた痕跡がみられる。その部分を表裏削っている。
- * L 上腕骨
d 部分は欠ける。骨幹部に咬み痕下端に金属刃による切り口、横位につく擦痕あり。
- * R 第3中足骨 p~s
- * 第3 or 4 指中節骨
- * 第2 or 5 指 ep
- * L 離骨片
- * L 寛骨片 若獣
- * R 第4手根骨
- * L 第4手根骨
- * L 寛骨片 若獣

肋骨片 2
焼骨 1
小骨片 17

ニホンジカ

- * 角小片
- * 角加工品
落角利用、角底部より3.5cm程上部に海綿体部を切り取る深さの切り込みがあり、そのままの巾で角幹部を切除。残余部分の先を細く尖らしたもの、かなり使用されたらしく全体に磨滅。くさびなどに使ったものか。
- * L 下顎骨関節突起

- L 上腕骨 d. (w.42.1)
- L 尺骨
肘頭部強く咬まれる。
- R 桡骨 d. 前面に横位の短かい擦痕
- R 大腿骨 p.
部分的に焼けている。
- 大腿骨 ep.
- L 腕骨 p~s. 一部に咬み痕
- R 第3手根骨

加工品

現存長10.0、径8.6×10.7、骨厚1.4±、短かい管状製品、鳥骨上腕骨幹部の輪切したもの。鋭利な擦痕がつく。材料となった骨はアオサギ位の大形で、長い上腕骨がえらばれたものと思われる。

S D - 0 3 W

両生綱

カエル類

胫腓骨
上腕骨

爬虫綱

ヘビ類
* 推体 2

哺乳綱

モグラ類

上腕骨片

ネズミ類

* 頸蓋骨 1

* 推骨 (腰1、頭1、尾10)
肋骨 3
L 肩甲骨、L 尺骨、R 大腿骨
中手、足骨 7

		犬齒 1 * (第2堆積層下) 尾椎 1、椎体 2 (胸) R 尺、橈骨、R・L 寛骨、P・L 大 腿骨、R・L 股骨、中手足骨 5
		* 頭蓋の一部、環椎一部、中手骨 2 橈骨、胸、尾椎、各一種 * 尾・胸椎各 1、肋骨 1 (植物層 2 の下層) 胸・頸椎各 1、肋骨 3 L 寛骨 1、R 股骨 1、橈骨 2 最下層 (7 ライン沿セクション) L 寛骨
		指中節 1、その他、腰椎 1
イヌ	* 左前頭骨 * RM ₁ (l. 20.2, w. 7.6)	* R 寛骨片 * R 寛骨 * 胸骨部突起
イノシシ	<p>* 腰椎 (d. 31.0) (l. 30.0)</p> <p>* RI₁ 咬耗進む 植物層 2 RI₁ - 段階の咬耗 R P₁ (++は極小孔) (l. 14.6, w. 9.8) L P₁ (++は極小孔) RI₁ 咬耗強</p> <p>* RM^{1,2} (極めて僅かな咬耗 M¹ は歯槽中埋没) 上記の M¹、M² は M² の方が若い個体。</p> <p>* RM^{2,3} (M³ は 2 位を萌出した段階)</p> <p>* LM^{1,2} (末端咬頭欠、最前列咬頭咬耗++)</p> <p>* RM_{2,3} (l. 36.0, w. 15.0) 上記の M¹、M² は M² の方が若い個体。 植物層 2</p> <p>* L 下顎骨 (M_{1,2}, M₃, 等) (第 157-1) 骨体は P₄ 位置よりのところが歯の残るのは M_{1,2} のみ。骨体のこわれるのは、犬齒抜去と 骨盤食であろう。下顎枝に穿孔などの加工 はみられない。関節突起は咬まれて失う。 第 2 堆積層下</p> <p>* RI₁</p>	<p>* L 機骨 p. 頭部に咬み痕 木層より上位</p> <p>* L 尺骨 s-d を欠く 肘頭部に咬み痕、外側に細かい 擦痕</p> <p>* L 寛骨 上・下の両端は食肉獣によって 咬まれ、大きく欠損している。四 肢骨のなかで最もよく咬まれてい る部分である。 木器出土層</p> <p>* 中節骨 植物層</p> <p>* 肋骨などを製いたもの</p> <p>* L 上腕骨 d. 破片 滑車部分の小断片、おそらくイ ノシシと思われる。若い小さい個 体のもの。</p>
ニホンジカ	植物層 2 の下	<p>* R 上腕骨 d. 左右の両側がこわれている。お そらくひび割れていたところから 削れたものであろう。</p> <p>* R 上腕骨 d. (w. 42.0) 大型の上腕骨である。</p> <p>* L 機骨 d. (w. 37.0)</p>
頸椎片	* 頸骨片 前頭最前端より漏斗骨に至る小片であるが R・L の破片がある。頭蓋を割った際の一 部がこぼれたものであろう。	

* R 大腿骨 d.	関節部周囲に咬み痕 上記のR大腿骨よりはるかに大形、雄と思われる。骨幹の割られている位置はR・Lともほぼ同じ。
* R 肋骨 d. ep. はずれ。	
* R 肋骨 d. 破片	
* R 跗骨 咬み痕	
* R 距骨 全面に強い咬み痕	
* 中手・足骨 d. 滑車部の脱れたもの	焼骨片 4
* R 第2・3足根骨	骨片 41

加工品

鹿角加工品 N-O・6~7

細く突いたものを周囲研磨、基部を残すもの、ヘアーピン状のものか。

現長 26.4

SK-03 土坑

爬虫綱

スッポン

腹甲板片 3

哺乳綱

イノシシ

* 後頭骨	後頭頸、側頭骨左側のみ部分を含めた骨からなるものであるが、のこっていいる部分は後頭部分に限られる。頭頂骨の一部がのこっており、頭蓋を頭頂骨のはば中央あたりからたたき割ったものと考えられる。これによって、頭蓋後頭部は削られ、頭蓋腔が露呈したであろう。その後、打ち捨てられている間にイヌなどが頭蓋周囲、特に後頭頸上部、後頭頸、頸骨突起部分をかじり、かなりの咬み痕をつけたと思われる。なお時頭頸直上に深い陥凹がみられる。
-------	---

ニホンジカ

* R 大腿骨	ep. が完全に化骨化していない状態にある。焼けこげた痕跡がある。脛側頸欠。
	脛側断面に食肉獣による咬み痕がつく。 滑車の脛側後部分にもかまれたり、焼けて骨がかけたりしている。

焼けた小骨片

SD-08

焼けた骨 5
骨片 3

SD-05

イノシシ	* 乳臼歯と思われるものの破片、歯冠部を全く欠損する。	
エイ類	軟骨魚綱 * 椎体 1	
ナマズ	硬骨魚綱	
ギギ類	* 椎体 棘骨 1 胸縫棘片 2 椎体 1	
スッポン	鰐虫綱 * 甲骨片 1	

片 1
その他小片

SD-01

哺乳綱	
* ウマ	
R 上顎臼歯 P3	

その他の

イス	* 中手・中足骨
ニホンジカ	* 肩甲骨片 1

包含層東地区（中期）

イノシシ	* 後頭骨 左後頭骨外側部大後頭孔部分の破片で、後頭部は欠損。 * LM ₁ (d.18.0, w.11.4) 前部咬頭の--は、エナメル質に最小孔のあいた段階で、若い個体のもの。dm ₁ の二り、M ₁ は未萌出段階である。 * R i ₁ 上記の M ₁ と同時に採集されているが、咬耗の程度は、ほぼ同じであったと推定される。 * LM ₁ 前咬頭の--は最小孔のあいた段階。萌出間もなくのもので、M ₁ は未萌出であったと思われる。 * R 下頸骨と連合部 吻端近い部分から dm [*] 位置までのこる破片 ただし dm [*] は劣弱のみ。 上にあげてある M ₁ 及び i ₁ はこの下頸骨に付く可能性もある。	* 手根骨片 焼けており、破損。
ニホンジカ	* 臼齒破片 1 未萌出齒	

加工品
刺突具

シカの中手or中足骨を極めて細く削り、その両側を研磨して刺突具としたもの。
現存長 39.3 同巾 5.4 厚 3.6
表、裏両側面には自然面ものより、特に入念な加工のものとは思われないが、
両側部は長軸に直交する横方向の擦擦痕がつく。

SD-04

イノシシ

哺乳綱

- * RI₁ 咬頭欠く、RI₁ 破片
- * LP₁
- * LP₄ 未萌出歯
- * LP₃ 稀んど咬耗せず

ニホンジカ
腰椎 1

頭椎No.4
咬まれた痕
がある。
大形

頭椎後関節
面部分

* 切断鹿角 現長 104.0 (V) 層

R 角座骨と角底部分をのこす破片。下端の角座骨部分には前頭骨から切断した際の金属刃による切痕が明瞭につく。およそ前後方向から斜めに切っているので、切断の後が、くさび状に光っている。

角座部は周囲から端縁に切られて、角座部分の突き出しがみられなくなっている。角幹部が折れているために先端の形が不明である。

* 落角片(第100図-17)

角座上 3 cm 長のこすのみの小片。

角座部周囲径 42.0 (前後径)

折れ口部分の一端に斜め上方から切り込む金属刃による切痕があり、この高さのところで切断しようとしたものである。

* R 下顎骨 (P₁, M₁, I₁, M₂, -2.5 year)

吻端及び筋突起の一部を欠く他はほぼ原形を保つて出土した唯一のシカの下顎骨である。吻端の欠損は咬まれて尖ったものらしい。筋突起の場合も同様である。

吻端のおとがい孔の後方に縱方向につく3条の切り傷がある。(Ⅳ層出土)

* 鹿角片 焼けて灰白色

同時に焼けた骨片 6 個が出土している。

* 鹿角分岐部 L (第98図-164)

幹部側に輪切りのための切り込みがある。

イヌ

哺乳綱

- * RI₁ 咬頭欠く、RI₁ 破片
- * LP₁
- * LP₄ 未萌出歯
- * LP₃ 稀んど咬耗せず

* 切断鹿角 現長 104.0 (V) 層

R 角座骨と角底部分をのこす破片。下端の角座骨部分には前頭骨から切断した際の金属刃による切痕が明瞭につく。およそ前後方向から斜めに切っているので、切断の後が、くさび状に光っている。

角座部は周囲から端縁に切られて、角座部分の突き出しがみられなくなっている。角幹部が折れているために先端の形が不明である。

* 落角片(第100図-17)

角座上 3 cm 長のこすのみの小片。

角座部周囲径 42.0 (前後径)

折れ口部分の一端に斜め上方から切り込む金属刃による切痕があり、この高さのところで切断しようとしたものである。

吻端のおとがい孔の後方に縦方向につく3条の切り傷がある。(Ⅳ層出土)

* 鹿角片 焼けて灰白色

同時に焼けた骨片 6 個が出土している。

* 鹿角分岐部 L (第98図-164)

幹部側に輪切りのための切り込みがある。

* 中節骨Ⅲ or V

* L 肋骨 p-s
頭部の同様部分に咬み痕がつく
が、骨表面を欠損している部分は
一部分である。

- * L 肋骨 s
- * R 中心足根骨片
- 中手or中根骨 p

下頸破片

* R 肋骨 s

* L 肋骨 ep. 部分

* R 上腕骨 d.
小さい上腕骨である。滑車面と左
右の両側に咬み痕があり、特に尺
側上頸部分と橈側の一部は海綿質
が露呈している。

* R 上腕骨 d.
w. 44.3

大形の上腕骨であり、おそらく雄
折れ口はほぼ平らであったらしい。
滑車面の一部に咬み痕。尺・橈側
側部は咬まれて海綿体が露呈、特
に橈側上頸部分の咬み痕が著しく
大きくなっている。咬みく
だされたものである。滑車孔内側
の尺骨側に齧歯類の咬み痕がつく。

* R 中手骨 p.d. 両端を欠く
両端欠損部分が原形をよく止めて
いないので欠損理由が明らかでな
い。

* 基節骨 d-s

* L 棘骨 S

外側部分の現長 49.0 程の小片で
ある。後面に尺骨との接合部の骨
の凹みがみられるが、その部分に
縦方向に付く多くの擦痕がつく。
このような部分に何故こうした擦
痕がつくのか。

* L (2 + 3 足根骨)

* 中節骨

w. 26.4

IV層
イノシシ
or シカ
骨片多

* R 肩甲骨とその破片 IV層出土。

* R 上腕骨 s-d

(d. w. 30.0)

長谷部分類による中型犬の大き
い方にはいる。

骨片20数
片
肋骨片 7

タヌキ

* R 下顎骨 ($P_{3,4} M_{1,2}$)
P₄より前、下顎枝部分を失う、割れめに
咬み痕、咬耗は弱い。(第101図-324)

ヒト

* 大腿骨の割れたもので小断片多数
(第100図-213)

加工品

骨 鋏 (第110図-88)
現存長 75.0 基部の方が欠けており、さらに長いものであったはず。よく研磨されてつくられた製品。
最も太い部分のd.2.5。

KM-H 1 SD-06

哺乳綱

イス

* 球椎

* 軸椎

* 左右下顎骨

* 中節骨

* 中手・中足骨 2

イノシシ

* L C ♀

尖端を欠損するが、咬耗は弱いものらしい。

* R C ♂

尖端が破損するがほぼ復原できる標本。
細く若齢の犬歯である。

* R C ♂

* L M₁ (l.21.0, w.13.8)

* R C 乳犬歯

ニホンジカ

* RM³

* 中手・足骨 d. 破片

* L 中心十第4 足根骨
前面水平位にうすい擦痕がつく

18
焼骨 9

ナマズorギギ類

* * 腹椎骨 1

硬骨魚綱

ヘビ類

* * 椎骨 2

爬虫綱

KM-H 2 SD-06

両生綱

イス

* 肋骨片 1 * L 下顎骨 ($P_3 - P_4$)

咬耗が全くなく、骨体もうすく若い個体の
ものと思われる。

* 頭蓋骨 中小型犬

イノシシ

* 頭椎骨片 * M¹? (破片のため不確実標本。)

咬耗は+++、M¹とすればM¹は既萌出。

* 横に割れて
いる。

ニホンジカ

* 中手 or 足骨 d. 破片
焼けている。

肋骨など
の破片 6

* R 大腿骨
小脛子部分のみの断片

* L 距骨 (L.39.1, 36.7)

* 基節骨 1
周囲には咬み痕が全面につく。
(珍しい咬み痕)

SD-02

哺乳類

イヌ

R・L 前頭骨、上顎骨、L 鼻骨、頬骨
R (P⁴, P¹) 南セクション最下層
前頭骨から吻端にかけてのもので、それ
以後の骨を発見することができなかった。
頭骨の各縫合線は化骨化していないので若
い個体のものである。頭頂部とは縫合線の
位置で分離しているので、おそらく自然遊
離なのであろう。

左右の前頭線は冠状縫合部で合致。雄の
可能性がある。大型のイヌの骨である。

イノシシ

* R M₁ ** (L.16.7, w.10.65)
** の咬耗はやや進行して、咬頭との連続が
はじまっている。この段階のものでは M₁ が
萌出終了し、M₂ の萌出する歯前位の時期に
なる。M₁ 部分の歯槽は開口するが歯は出
ていないであろう。

* R 頭頂骨、R・L 頬骨、涙骨、R 上顎骨、
歯は R L のものがある。

R > (dm¹ dm² dm³ dm⁴ < M¹ >)

R > (e dm² dm³ dm⁴ < M¹ >)

下顎の M₁ でみる限り、M₁ の萌出は咬頭が數
度出た程度である。M₂ が包埋していたが、
現在不明。

下顎骨は、一応下頸枝まで残るので、ほ
ぼ完全な形で埋存していたのであろう。

頭骨もかなり破損していたが、ほぼ形を
保ったものが埋存していたのではないか
か。

* R M₁
最後端の咬頭をのこすのみ。おそらく萌出
直後の歯であったろう。

ニホンジカ

* L M₁ 未萌出歯 齒冠高21.65
Wear Index 7→2.5year

* L M₁ 齒冠高 18.6
Wear Index 6→7→3.5year

* 腹角片
角幹部分で、縱方向に切断した面があり
金属刃が使われている。
現長 30.4mm
角製品製作の未成品か、その残余であろう。

* 中節骨 d.

滑車部分

遠位端を人為的に切ったものと思
われる。

* R 肩甲骨 胸縫部分断片
大型成獣のもの

動物遺存体の写真説明

〔第 156 図〕 イノシシ及びニホンジカ

- 1: イノシシ 左下頸骨 頰側面 (S D-03W)
- 2: イノシシ 環椎 (落ち込み 1)
- 3: イノシシ 腰椎後面 (S D-03W)
- 4: ニホンジカ 右上腕骨 前面 (S D-03W)
- 5: ニホンジカ 左上腕骨
- 6: イノシシ 左上腕骨
- 7: イノシシ 左尺骨 (S D-03W)
- 8: イノシシ 左寛骨 (S D-03W)
- 9: イノシシ 左橈骨 (S D-03W)
- 10: イノシシ 中節骨 (S D-03W)
- 11: イノシシ 中節骨 (S D-03E)
- 12: イノシシ 切歯 (S D-03W)
- 13: イノシシ 切歯 (S D-03W)
- 14: イノシシ 前臼歯 (S D-03W)
- 15: イノシシ
- 16: イノシシ 後臼歯 (Ma) (S D-03W)
- 17: イノシシ 後臼歯 (Ma) (S K-03)

〔第 157 図説明〕 ニホンジカ

- 1: 右上腕骨 (S D-04)
- 2: 右上腕骨 (S D-04)
- 3: 左橈骨 (S D-03W)
- 4: 左橈骨 (S D-03E)
- 5: 左尺骨 (S D-03E)
- 6: 右大腿骨 (S D-03E)
- 7: 左胫骨 (S D-03E)
- 8: 左胫骨 (S D-04)
- 9: 中足骨 (S D-04)
- 10: 右大腿骨 (S D-03W)
- 11: 左大腿骨 (S D-03W)
- 12: 右踵骨 (S D-03E)
- 13: 基節骨 (S D-06)
- 14: 左距骨 (S D-06)

〔第 158 図説明〕 ニホンジカ

- 1: 角 (S D-04)
- 2: 角 (S D-03E)
- 3: 角 (S D-04)
- 4: 角 (S D-04)

5: 右下頸骨 (S D-04)

6: 第 4 頸椎 (S D-04)

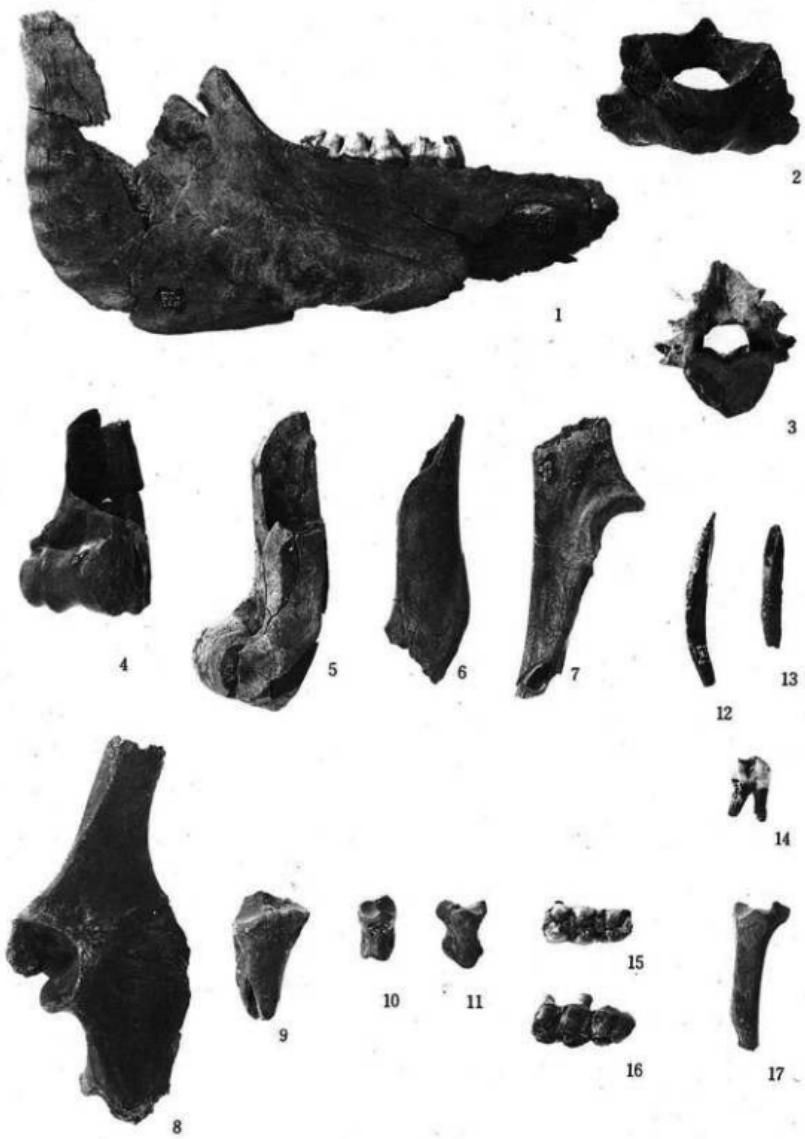
7: 頸椎 (S D-03W)

〔第 159 図説明〕 S D-02出土のイノシシ幼獣

〔第 160 図説明〕 ネズミ

- 1: 頭蓋骨 (S D-03W)
- 2: 頭蓋骨 (S D-03E)
- 3: 環椎 (S D-03E)
- 4: 軸椎 (S D-03E)
- 5: 左下頸骨 (S D-03E)
- 6: 右下頸骨 (S D-03E)
- 7、8: 寛骨 (S D-03E)
- 9、10: 大腿骨 (S D-03E)

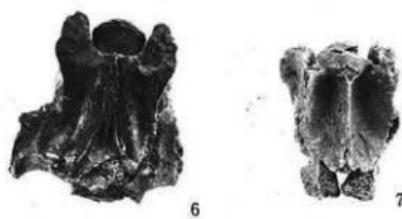
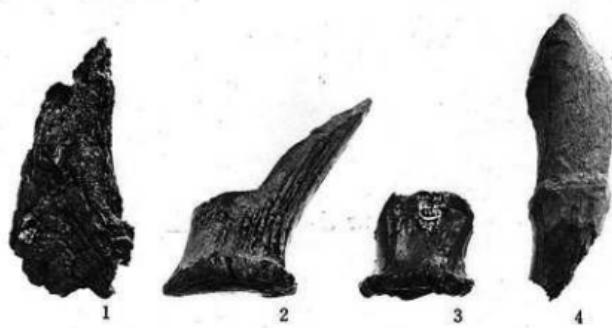
} 一體分



第156図 イノシシ及びニホンジカ (3)



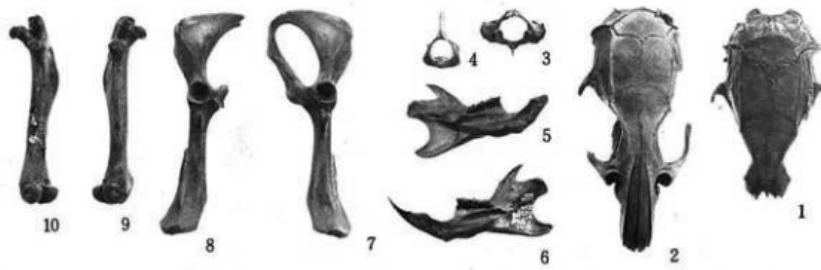
第157図 ニホンジカ (34)



第158図 ニホンジカ (♂)



a



b

a 第159図 SD-02出土のイノシシ幼獣 (I. I.)

b 第160図 ネズミ (M.)



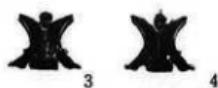
第161図 タスキの右下顎骨 (SD-04) (×1)



第162図 ナマズ (SD-03) (×1)



第163図 カエル (SD-03W) (×2)



第164図 小動物

第5節 亀井遺跡のイヌについて

1. はじめに

イヌは縄文時代の早期から家犬として存在し最も早く家畜化された動物であったといわれている。

古代家犬の研究は、長谷部言人、直良信夫、斎藤弘吉氏等によって早くよりなされている。長谷部博士はヨーロッパ産の古代犬、*Canis familiaris palustris*・*Canis familiaris ladogenis*・*Canis familiaris intermedius*・*Canis familiaris inostranzewii*・*Canis familiaris matns optimae*を基準として日本出土の古代犬を頭蓋、四肢骨の大きさから各々を小・中小・中・中大・大の五型式に分類され、その基準を表示した。(第34表)。

(注1) (注2) (注3)
第34表 家犬頭骨及び四肢骨長幅標準表 (注4)

測目	形種	小	中小	中	中大	大
最大頭骨長		×-155	156-170	171-185	185-200	201-×
脳頭蓋長		×-83	84-93	94-103	104-113	114-×
最大頭蓋巾		×-54	55-59	60-64	65-69	70-×
顎長 N~P		×-76	77-84	85-92	93-100	101-×
吻長(眼窩)		×-64	65-72	73-80	81-88	89-×
上顎巾		×-52	53-57	58-62	63-67	68-×
上臼歯列長		×-52	53-57	58-62	63-67	68-×
下顎骨長(顎)		×-113	114-124	125-135	136-146	147-×
下臼歯列長		×-60	61-65	66-70	71-75	76-×
上腕骨長		×-120	121-135	136-150	151-165	166-×
橈骨長		×-115	116-130	131-145	146-160	161-×
尺骨長		×-140	141-155	156-170	171-185	186-×
大腿骨長		×-135	136-150	151-165	166-180	181-×
胫骨長		×-130	131-145	146-160	161-175	176-×

今回、亀井遺跡(H1・2地区)の調査によって検出されたイヌは14匹の多きをかぞえる。これはイノシシの最少個体数26に次ぐ出土量であり、弥生人にとて最も身近な動物であったことに基因しているのであろう。中でもSD-03出土のイヌ二頭分の全身骨格は、弥生時代のイヌの骨相・大きさを知る上できわめて貴重な資料といえ、また出土状況から同時に溝に投げ込まれたものと考えられ、弥生時代の家犬に対する精神面の一端を示す好資料といえる。

従って、以下にその出土状況、各部骨の計測値をあげ、あわせて畿内出土のイヌについて二、三触れてみたいと思う。

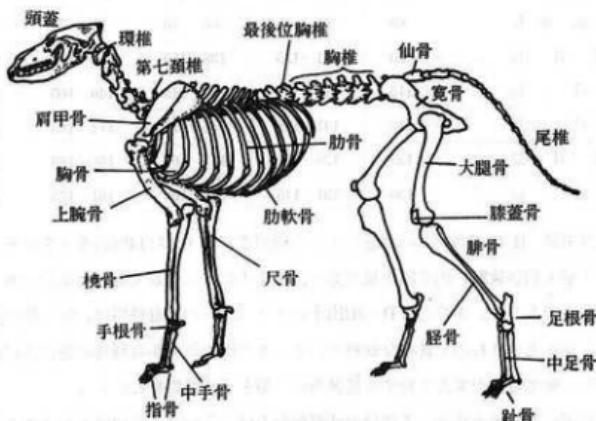
2. 概要と計測方法について

二匹の亀井犬は、O・7 地区 S D-03溝の(Ⅱ)層下位にて検出されたものである(第169図)。この二匹は頭蓋の形質、ペニスボーンの有無から雄(以下、1号犬)、雌(以下、2号犬と呼称)であると思われる。

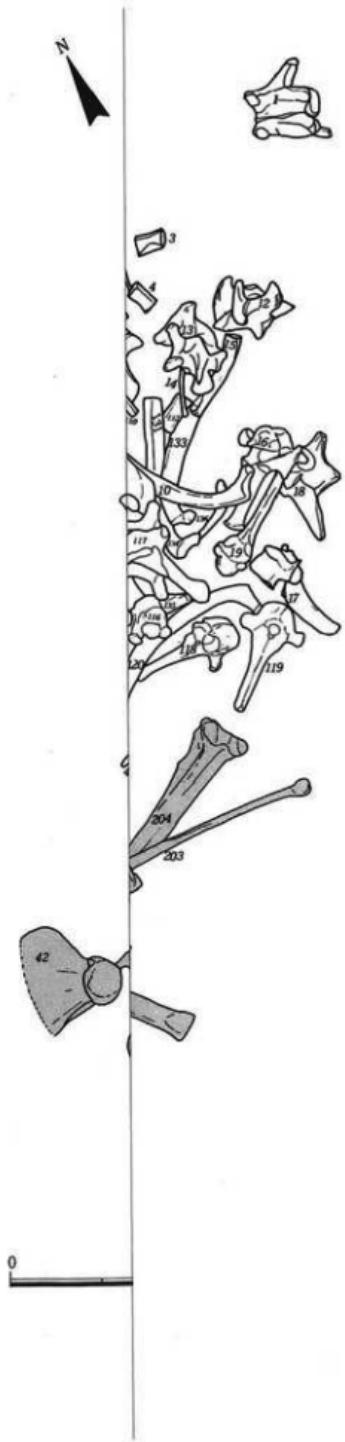
亀井1号犬(♂)は頭骨最大長 175.0 mmで、長谷部氏の分類によると中型犬に属するものである。体高はおよそ 47 cm をはかる。出土状態は第166図から判断して頭蓋骨及び下頸骨はズレているが、上体は上向きで、椎骨・寛骨・左右脛骨につづく部骨は溝中という悪条件にもかかわらず原状をよく保持しているといえる。骨自体の保存も良好である。狩猟時に受けた損傷か、右側肩甲骨の前縁には動物によるものと思われる咬痕がみとめられ、その部分の骨は異状に変形している。また、右足は骨折しており右脛骨は骨幹部中央で二片に割れ、下端では腓骨が脛骨に附着し、異常にふくらんでいた。(第178図参照) 骨の色調は黄褐色。

亀井2号犬(♀)は頭骨最大長 164.2 mmと、1号犬に比べてやや小柄で中小型犬に属するものであり、体高およそ 42 cm をはかる。腰椎の1部を欠くものの、各部骨の保存はたいへんよろしい。1号犬の後頭骨と比べて、丸みが強くまろやかな顔相をもっていたものと思われる。骨の色調は暗褐色を呈し、色調によって二頭の各部骨の判別は容易であった。

両犬の出土状況は、亀井1号犬のうえに2号犬が折り重って「X」状に交差しており、溝中の堆積状態から判断して(Ⅱ)層堆積後、短日にして二頭同時に溝中に投げ込まれたものと思われた。おそらく埋葬地以外で全身骨格がほとんどそろい、保存良好な資料は本例が最初ではないだろうか。弥生犬の全体像を知る上でまことに貴重な標本といえよう。



第165図 イヌ各部骨の名称





第35表 危井1・2号犬出土部位の名称

実測図番号	性別	部 位	備 考	実測図番号	性別	部 位	備 考
1	♂	第3頸椎	{ 第4頸椎は単独で取り上げている	41	♂	第3肋骨(L)	
2				42	♀	肩甲骨(L)	
3	♂	胸 骨		43	♀	尺 骨(R)	
4	♂	胸 骨		44	♀	上腕骨(L)	
5	♂	上腕骨(L)(遠位)	20と同一骨	45	♀	中手骨(R)	
6	♂	第4肋骨(L)		46	♀	中手骨(R)	
7	♂	第10肋骨(R)		47	♀	基節骨(R)	
8	♂	第6肋骨(L)		48	♂	末節骨(L)	
9	♂	第9肋骨(R)		49	♂	基節骨(L)	後 肢
10	♂	第7肋骨(R)		50	♂	中節骨(L)	後 肢
11	♂	第4肋骨(L)	6と同一	51	♂	基節骨(L)	後 肢
12	♂	第5頸椎		52	♂	中足骨(L)	
13	♂	第6頸椎		53	♂	中足骨(L)	
14				54	♂	中足骨(L)	
15	♂	第1肋骨(L)		55	♂	中足骨(L)	
16	♂	第1胸椎		56	♂	末節骨(L)	後 肢
17	♂	第3胸椎		57	♂	基節骨(L)	後 肢
18	♂	第7頸椎		58	♂	基節骨(L)	後 肢
19	♂	第2胸椎		59	♂		
20	♂	上腕骨(L)(近位)	{ 前縁に動物の咬痕 がみられ骨が変形 しているこの骨の 下にメスの左脛骨 ・左腓骨がある	60	♂		
21	♂	肩甲骨(L)		61	♂		
22	♂	肋骨片		62	♂	蹠 骨(L)	後 肢
23	♂	肩甲骨(R)		63	♂	距 骨(L)	
24	♂	桡 骨(R)		64			
25	♀	大腿骨(L)(遠位)	97と同一の骨	65	♂	寛骨(R)(L)	
26	♀	第4腰椎		66	♂	仙 骨	
27	♂	桡 骨(L)		67	♂	基節骨(R)	後 肢
28	♂	尺 骨(L)		68	♂	中足骨(R)	
29	♂	尾 椎		69	♂	中足骨(R)	
30	♂	尾 椎		70	♂	中足骨(R)	
31	♂	尾 椎		71	♂	中足骨(R)	
32	♀	第2腰椎		72	♂	距 骨(R)	
33	♂	尺 骨(R)		73	♂	基節骨(R)	後 肢
34	♂	胫 骨(L)		74	♂	大腿骨(R)	
35	♂	腓 骨(L)		75	♂	第11肋骨(L)	
36	♂	尾 椎		76	♂	蹠 骨(R)	
37	♂	尾 椎		77	♂	手根骨(R)	
38	♂	尾 椎		78	♂	手根骨(R)	
39	♂	尾 椎		79	♂	基節骨(R)	
40	♀	第1腰椎		80	♂	手根骨(R)	前 肢

実測番号	性別	部 位	備 考	実測番号	性別	部 位	備 考
81	♂	足根骨(R)		121			
82	♂	中手骨(R)		122	♂	第10肋骨(L)	
83	♂	中手骨(R)		123	♂	第8肋骨(R)	
84	♂	中手骨(R)		124			欠 番
85	♂	中手骨(R)		125	♂	第1肋骨(L)	
86	♂	手根骨(R)		126	♂	第6肋骨(L)	8と同一
87	♂	基節骨(R)	前 肢	127	♂	下頸骨(L)	$P_1 P_2$ はスボンジ化 P_3 はスボンジ化少して見え 頭蓋骨
88	♂	末節骨(R)	前 肢	128	♂	頭蓋骨	頭蓋骨含む
89	♂	末節骨(R)	前 肢	129	♂	下頸骨(L)	$I_2 P_1$ 早歯 P_2 スボンジ化
90	♂	基節骨(R)	前 肢	130			
91	♂	基節骨(R)	前 肢	131	♂	第2肋骨(R)	
92	♂	足根骨(R)	前 肢	132	♂	胸 骨	
93	♂			133	♂	第3肋骨(R)	
94	♂			134	♂	第5肋骨(R)	
95	♀	寛 骨(L)		135	♂	第6肋骨(R)	
96	♀	寛 骨(R)		136	♂	第1肋骨(R)	
97	♀	大腿骨(L)	25と同一	137			
98				138	♂	大腿骨(L)	
99	♂	第13肋骨(L)	病 变 (肺骨の遠位端が付着している)	139	♂	第3腰椎	
100	♂	胫 骨(R)(遠位)		140	♂	第4腰椎	
101	♂	胫 骨(R)		141	♂	第5腰椎	
102	♂	腓 骨(R)	[100, 101, 102で 胫骨、腓骨	142	♂	第6腰椎	
103	♂	第12肋骨(R)		143	♂	第7腰椎	
104	♂	第11肋骨(R)		144	♀	尺 骨(L)	
105	♀	第8胸骨		145	♀	桡 骨(L)	
106	♂	第10胸椎		146	♀	中節骨(L)	後 肢
107	♂	第11胸椎		147	♀	基節骨(L)	後 肢
108	♀	第4胸椎		148	♀	基節骨(L)	後 肢
109	♀	第5胸椎		149	♀	中節骨(L)	後 肢
110	♂	第2腰椎	[110の下から第12 肋骨(L)♀	150	♀		
111	♂	第1腰椎		151	♀		
112	♂	第13胸椎		152	♀	頭蓋骨	{後肢骨(L)の末 節骨を1点含む}
113	♂	第12胸椎		153	♂	第13肋骨(R)	
114	♂	第9胸椎		154	♀	第7肋骨(R)	
115	♂	第8胸椎		155	♀	第5肋骨(R)	
116	♂	第6胸椎		156	♂	陰茎骨	ペニス・ボーン
117	♂	第7胸椎		157	♀	第11肋骨(R)	
118	♂	第5胸椎	この骨の下にメス 左中足骨・距骨・	158	♀	第10肋骨(R)	
119	♂	第4胸椎	踵骨・基節骨・中 (節骨がある)	159	♀	第11肋骨(L)	
120	♂	第5肋骨(L)		160	♀	第8肋骨(R)	170と同じ

実測図番号	性別	部 位	備 考	実測図番号	性別	部 位	備 考
161	♀	第9肋骨(R)	171の東どなり	186	♀	第13肋骨(R)	
162				187	♀	第1肋骨(L)	
163	♀	第12肋骨		188	♀	胸骨柄	
164	♀	胸 骨		189	♀	肩甲骨(R)	
165	♀	第6肋骨(R)		190	♀	環 椎	{ メスの左中手骨 がこの下にある
166	♂	第12肋骨(L)		191	♀	下頸骨(R)	{ Iは全くなし P ₁ , M ₃ は欠歯
167	♀	第4肋骨(R)		192	♀	中足骨(L)	
168	♂	第8肋骨(L)		193	♀	距 骨(L)	
169	♀	第11肋骨(L)		194	♀	軸 椎	
170	♀	第8肋骨(R)	160と同じ	195	♀	下頸骨(L)	{ I ₁ , I ₂ , P ₁ , P ₂ , M ₃ は欠歯
171				196	♀	第3頸椎	
172	♀	第8肋骨(L)		197	♀	第4頸椎	{ 第7頸椎は單独 でとり上げてい る
173	♀	第10肋骨(L)	{ 158~161付近の骨 とひっつく	198	♀	第5頸椎	
174	♀	第9肋骨(L)		199	♀	第6頸椎	
175	♀	第3肋骨(R)		200	♀	上腕骨(R)	
176	♂	第9肋骨(L)		201	♀	第2肋骨(L)	
177	♂	第7肋骨(L)		202	♀	橈 骨(R)	後 肢
178	♂	第7肋骨(L)		203	♀	尺 骨(L)	後 肢
179	♀	第4肋骨(L)		204	♀	胫 骨(L)	後 肢
180	♀	第5肋骨(L)		205	♂	基節骨(L)	後 肢
181	♀	第7肋骨(L)		206	♂	基節骨(L)	後 肢
182	♀	第2肋骨(R)		207	♂	末節骨(L)	後 肢
183	♀	第1肋骨(R)		208	♂	末節骨(L)	後 肢
184	♀	第6肋骨(L)		209	♂	中足骨(L)	
185	♀	第3肋骨(L)		210	♂	中足骨(L)	

表についての概要

(部骨の名称) 第16図参照

(番号) 第160図の取りあげ番号

(L) は left

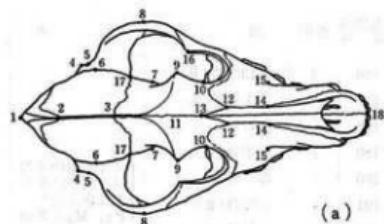
(性別) ♂オス (ここでは1号犬)

(R) は right

♀メス (ここでは2号犬)

(備考) その他、気づいた点をしるしている。

したがって、骨学的特徴を把握するための手段として以下に各部骨の計測値(単位mm)を第36~38表に掲げている。あわせて各遺構出土の頭蓋骨・下頸骨の標本も表に加えている。計測点および計測項目は、斎藤弘吉氏(『犬科動物骨格計測法』1963)に準処し、これを行った。なお、計測器具としてオフセットノギスを使用している。また、使用した計測点(頭蓋骨、下頸骨についてのみ)を第167図中の番号で示している。

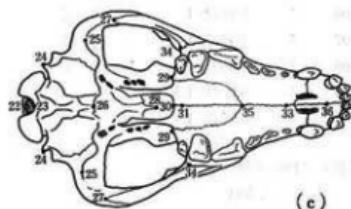


19. Koronale [Kr]
20. Ectorbital [Ect]
21. Maxillorale [Mo]

(a)



(b)



(c)

22. Opisthion [O]
23. Basion [B]
24. Jugale [Ju]
25. Glenoidale
26. Sphenobasiale [Sph]
27. Zygottemporale inferior [Zi]
28. Hormion [Ho]
29. Urotrion [U]
30. Staphylion [St]
31. Postdentale [Fd]
32. Molare [Mol]
33. Prämolare [Pm]
34. Zygomaxillare inferior [Zmi]
35. Palatinorale [Po]
36. Incisivocaudale [Ic]



37. Gonion caudale [Goc]
38. Gonion ventrale [Gov]
39. Condylion mediale [Cm]
40. Coronion [Cr]
41. Gnathion [Gn]
42. Infradentale [Id]

第167図 イヌの上・下・側面観、下頬の計測点

第167図の計測点について、以下に説明を加えてみる。

(a)

- ① Inion [I]：左右の上頂線が正中線上で交わる点
- ② Lambda [L]：三角縫合と矢状縫合交わる点
- ③ Bregma [Br]：冠状縫合と前頭間縫合が交わる点
- ④ Otion [Ot]：乳様突起の最下端
- ⑤ Auriculare [Au]：外耳孔上縁の中央点
- ⑥ Euryon [Eu]：解状縫合上の最外側端
- ⑦ Frontostenion [Fs]：前頭骨の顎骨突起の後方の最狭窄点
- ⑧ Zygion [Zy]：頬弓外側点
- ⑨ Ectorbital [Ect]：前頭骨の顎骨突起の最外尖端
- ⑩ Entorbital [Ent]：眼窓縫の上縁の最内側点
- ⑪ Frontomediale [Em]：左右の Ectorbitale [Ect] を結ぶ線と前頭縫合との交叉点
- ⑫ Frontorale [Fo]：前頭骨の鼻骨突起の前端
- ⑬ Nasio [N]：鼻骨の前頭骨突起の後端
- ⑭ Nasointermaxillare [Ni]：顎間骨の鼻骨突起の後尖端
- ⑮ Infraorbitale [If]：眼窓下孔外側後縁中央点
- ⑯ Zygomaticotemporale superior [Zt]：顎骨の前頭骨突起の尖端
- ⑰ Krotaphion [K]：前頭骨・顎頭骨・楔状骨の三骨合点
- ⑲ Ptaethion [P]：左右の I_{1al} 最前端を結ぶ線と正中線との交叉点

(b)

- ⑩ Koronale [Kr]：頭頂骨・側頭骨・楔状骨の三骨合点
- ⑪ Ectorbital [Ect]：前頭骨の顎骨突起の最外尖端
- ⑫ Maxillorale [Mo]：上顎頭間縫合の最前端

(c)

- ⑩ Opisthion [O]：大後頭孔上縁の中央部
- ⑪ Basion [B]：大後頭孔の涙管切痕の中央部
- ⑫ Jugale [Ju]：竇靜脈突起の下尖端
- ⑬ Glenoidale [Gl]：側頭骨の下頸骨窓の最後点
- ⑭ Sphenobasion [Sph]：楔状後頭軟骨結合と正中線との交叉点
- ⑮ Zygtemporale inferior [Zi]：頬弓底面の顎骨側頭縫合の最後点
- ⑯ Hormion [Ho]：楔状骨体鼻状部の前尖端
- ⑰ Urnion [U]：上顎骨の翼状突起後尖端
- ⑱ Staphylion [St]：口蓋骨の後鼻瓣の後尖端
- ⑲ Postdentale [Pd]：左右の M²、後縁を結ぶ線と正中線との交叉点
- ⑳ Molare [Mol]：左右の M¹、前縁を結ぶ線と正中線との交叉点
- ㉑ Prämolare [Pm]：左右の P¹、前縁を結ぶ線と正中線との交叉点
- ㉒ Zygomaxillare inferior [Zmi]：顎骨上顎縫合の最下点
- ㉓ Palatinorale [Po]：口蓋上顎縫合前縁と正中口蓋縫合との交叉点
- ㉔ Incisivocaudale [Ic]：左右の I³、後縁を結ぶ線と正中線との交叉点

(d)

- ㉕ Gonion caudale [goc]：下頸角最後方尖端
- ㉖ Gonion ventrale [gov]：下頸角下縁最下端
- ㉗ Condylion mediale [Cm]：関節突起後面中央点
- ㉘ Corouion [Cr]：筋肉突起の最高点
- ㉙ Gnathion [Gn]：下顎体下縁の下面前端（すなわち下顎連合面）の後方下点に当る点
- ㉚ Infradentale [id]：I₁、下顎連合面の前端

第36表 頭蓋の計測値一覧表

部位	計測項目及び計測点	SD-03		SD-06	SD-02	SD-03
		1号犬(♂)	2号犬(♀)	3号犬(♀)	4号犬	5号犬
頭蓋	頭骨最大長	I-P	※ 175.0	164.2	160.3	
	頭骨最大長	B-P	※ 158.5	146.0	143.3	
	基底全長		※ 168 ±	154.0	151.5	
	頬骨弓巾	Zy-Zy	※ 103.0	93.0	92.0	
	脳頭蓋長	I-N	※ 98.0	89.5	84.4 ±	
	頭頂骨長 (矢状縫合上における)	L-Br		16.8		
	前頭骨頂	Br-N	31.8	※ 34.7	27.4	
	頭蓋幅(1)	eu-eu	48.0	※ 52.5	51.1	
	頭蓋幅(2)	au-au	※ 58.7	56.8	57.5	
	頭蓋高(矢状構を含む)	Br-ho	※ 51.5	47.5	47.0	
	バジョン・ブレグマ高	B-Br	※ 61.7	55.0	57.0	
	最小前頭幅	fs-fs	※ 32.2	31.9	31.3	31.0 ±
	前頭骨頸骨突起端距離	Ect-Ect	※ 48.6	44.2	44.3	46.9
	後頭三角幅	Ot-Ot	※ 60.0 ±	59.6	59.1	
	後頭三角高 (後頭孔上縁より)	I-O	※ 29.0	27.6	26.0 ±	
	大後頭孔長	B-O		16 17.3	16.6 17.3	
骨	大後頭孔幅		16.8	16.7	※ 18.0	
	最小眼窩間幅	Ent-Ent	※ 30.8	27.0	30.2	30.7 ±
	額長	P-N	※ 83.4	80.5	80.3	79.3 ±
	吻長	P-Oo	※ 74.0	70.9	69.4	
	最小吻幅	P ¹ -P ¹ の部分で	32.4	31.5	31.3	※ 34.6
	吻幅 (犬歯槽外縁における)		34.4	33.0	32.0	※ 36.0
	吻高	Nより硬口蓋まで	※ 40.0	40.0	39.0	
	鼻骨長	N-Rh	※ 63.0	61.7	61.2	61.4 ±
	鼻孔最大幅		20.5	※ 21.1	19.3	20.8
	硬口蓋最大長	P-St	※ 83.1	79.8	79.4	
	硬口蓋長	I ¹ よりSt	※ 80.0	76.4	76.0	
	上臼歯列長 (P ¹ 前縁よりM ² 後縁まで)		※ 59.3	57.0	54.2	
い、 ずれ も左	P ⁴ 長		※ 17.1	17.1	17.0	
	P ⁴ 幅		8.2	※ 8.9	8.6	
	M ¹ 長		10.8	※ 11.9	11.7	
	M ¹ 幅		12.3	※ 13.5	13.0	
	M ¹ +M ²		※ 16.4	16.4	16.1	

※印は各計測項目の最大値を示す。

部位	計測項目及び計測点	SD-03		SD-06
		1号犬(♂)	2号犬(♀)	6犬号
下顎骨	下顎骨全長I	Cm-id	※ 128.1	121.8
	下顎骨全長II	goc-id	※ 128.4	123.2
	下顎骨全長III	Cm-大歯後縁	※ 113.8	105.9
	下顎体長	M ₃ 後縁-id	※ 85.1	84.9
	下顎枝長	Cm-M ₃ 後縁	※ 42.1	36.6
	下顎枝高I	gov-cr	※ 51.6	49.8
	下顎枝高II(gov-筋突起後端)		※ 44.5	40.6
	裸高(gov-関節突起上面)		※ 24.9	23.9
	下顎枝幅		※ 35.4	32.1
	筋肉突起幅(下顎切歯-下顎枝前縁下部)		※ 29.9	26.9
	関節側長(関節突起内外端の長さ)		※ 23.1	20.7
	下顎体高I(M ₃ の後縁にて)		24.6	24.6
	下顎体高II(M ₁ の中央にて)		※ 23.3	22.5
	下顎体高IV(M ₁ ・P ₄ の間)		※ 22.6	21.0
	下顎体高V(P ₄ の中央にて)		21.5	※ 21.9
	下顎体高VI(P ₂ ・P ₃ の間)		※ 19.0	17.8
(左)	門歯縁高		50.8	※ 52.0
	下顎体厚I(M ₁ 下方における)		※ 12.4	11.0
	下臼歯列全長(P ₁ 前縁-M ₃ 後縁)		※ 67.4	63.7
	下前臼歯列全長(P ₁ 前縁-P ₄ 後縁)		※ 37.9	33.4
	下後臼歯列全長(M ₁ 前縁-M ₃ 後縁)		30.9	31.1
	M ₁ 長(M ₁ 歯冠前後最大長)		18.3	※ 20.2
	M ₁ 前幅(前歯根部歯冠内外縁間長)		7.8	※ 8.6
	M ₁ 後幅(後歯根部歯冠内外縁間長)		7.4	7.7

※印は各計測项目的最大値を示す。

頭蓋骨および下顎の計測結果からして、1号犬は最大頭骨長175mmを測る中型犬にもかかわらず中小型犬である2・3号犬の頭蓋骨(1)と比較して、幅狭まく、スリムな感じを与える。また、歯牙(M¹)の長幅も2・3号犬のほうがわずかに大きい。これは、M₁についても同様で下顎骨の大きさにくらべて一回り小さい。4号犬は頭長からして中型犬の大きさであるが、吻幅は36mmと中型犬である1号犬よりも大きいのが特徴。5・6号犬は、いずれも中小型犬に属している。

頭蓋・下顎骨以外の1・2号犬の各部骨の代表的骨格は第37表に示している。

第38表 亀井1、2号犬各部骨計測値一覧表

単位mm

部位	計測項目	豪	1号犬 (♂)	2号犬 (♀)	肩 甲 骨	全 長	1-2	128.4	111.9
頸椎	全長	1-2	—	32.9		肩甲軸最大長	2-4	119.5	106.7
	横突起間全幅	3-3	—	64.6		上部幅	5-6	57.5	50.8
	前関節突起間全幅	4-4	—	36.5		頭部最小幅	9-10	22.5	20.6
	後関節突起間全幅	5-5	—	27.5		下部幅	12-13	26.3	24.4
	体横径	6-6	—	26.4		関節窩長	12-1	22.3	20.6
軸椎	全長	1-2	50.7	47.2		関節窩幅	14-15	16.8	15.9
	横突起間全幅	3-3	36.1	32.8					
	前関節突起間全幅	4-4	26.7	26.8					
	後関節突起間全幅	5-5	28.9	26.7					
	体横径	6-6	16.2	15.9					
第四頸椎骨	全長	1-2	35.8	33.8		全長	1-2	144.1	135.6
	横突起間全幅	3-3	39.8	37.8		上端最大前後径	3-4	34.9	33.3
	前関節突起間全幅	4-4	35.3	32.4		上端最大幅	5-6	25.8	24.0
	後関節突起間全幅	5-5	30.3	28.5		大結節長	3-10	24.2	22.1
	体横径	6-6	20.7	20.6		体最狭部横径	14-	—	11.3
第三腰椎骨	全長	1-2	37.9	37.4		下端最大幅径	17-18	29.7	27.8
	横突起間全幅	3-3	51.0	44.0		滑車下端幅	19-20	17.4	15.0
	前関節突起間全幅	4-4	25.4	22.5		滑車前面最大長	23-24	18.4	17.1
	後関節突起間全幅	5-5	11.1	15.6					
	体横径	6-6	15.9	17.7					
第一肋骨(左)	全長	1-2	53.9	45.6		全長	1-2	133.2	
	小頭、結節間距離	3-1	14.6	14.2		上端最大幅	3-4	—	15.2
	小頭関節面長	6-7	5.7	6.2		上端最大前後径	5-6	—	10.2
	小頭関節面幅	8-9	6.5	6.8		頭部最小幅	9-10	—	12.4
	頭部幅	10-11	6.5	5.7		体中央部幅	12-13	—	12.5
第五肋骨(左)	頭部厚	12-13	4.7	3.9		体中央部厚	14-	—	7.6+
	結節関節面長	14-1	5.8	5.3		下端最大幅	15-16	—	19.6
	下端前後幅	2-21	10.3	8.7					
	下端厚	22-23	5.9	5.5					
第五肋骨(右)	全長	1-2	117.1	109.8		全長	1-2	171.4	156.2
	小頭、結節間距離	3-1	16.9	15.2		体前後徑	3-4	22.9	21.3
	小頭関節面長	6-7	5.1	6.1		体中央前後幅	9-10	6.5+	5.4
	小頭関節面幅	8-9	6.4	5.5		下端最大前後幅	11-12	8.8	7.0
	頭部幅	10-11	5.8	4.9		頭部厚	13-14	12.0	10.5
第五肋骨(左)	頭部厚	12-13	4.8	4.4		半月状切痕直径	3-7	16.4	16.6
	結節関節面長	14-1	5.0	5.0		半月状切痕最大厚	18-19	16.6	13.6
	下端前後幅	2-21	6.7	7.7					
	下端厚	22-23	4.4	3.8					
脛骨(左)	全長	1-2	157.5	147.7		全長	1-2	157.1	146.9
	上端最大横径	3-4	35.8	32.5		頭長	6-7	16.8	15.7
	頭長	15-16	12.2	12.8+		体中央横径	15-16	12.2	12.8+
	下端最大幅	17-18	27.9	26.1		下端最大幅	17-18	27.9	26.1
脛骨(右)	全長	1-2	157.1	146.9		全長	1-2	157.1	146.9
	上端最大前後径	6-7	34.1	29.6		上端最大横径	8-9	30.2	29.3
	上端最大横径	8-9	—			体中央前後径	11-12	11.7	10.4
	体中央横径	13-14	13.0+	11.7+		体中央横径	13-14	13.0+	11.7+
	下端最大幅	15-16	20.3	19.1		下端最大幅	15-16	20.3	19.1
						下端最大前後径	17-18	14.3	14.0

部位	計測項目	※	1号犬 (♂)	2号犬 (♀)	第二中足骨 (左)	全長	1-2	56.8	51.2
腓骨 (左)	全長	1-2	146.7	134.6	上端横径	4-5	10.3	4.3	
	上端幅	3-4	8.1	8.0	中部横径	8-9	4.2	5.2	
	体中央幅	6-7	2.9	3.4	下端横径	12-13	6.4	5.7	
	体中央厚	8-	2.4	2.4	全長	1-2	62.0	56.9	
	下端幅	9-10	8.5	7.9	上端横径	4-5	7.7	7.1	
寛骨 (左)	寛骨長	1-2	—	121.3	中部横径	8-9	5.7	6.2	
	腸骨長	1-3	72.8	66.5	下端横径	12-13	6.3	6.2	
	関節窓前縁より坐骨結節	3-4	—	43.3	全長	1-2	60.1	58.6	
	恥骨連合長	5-6	41.4	37.2	上端横径	4-5	8.1	5.6	
	腸骨最小幅	13-14	16.9	16.5	中部横径	8-9	6.4	5.4	
	関節窓横径	18-19	18.7	17.6	下端横径	12-13	6.7	5.8	
	閉鎖孔前後最大長	24-25	28.6	25.5	全長	1-2	53.8	53.3	
	閉鎖孔最大横幅	20-26	—	19.4	上端横径	4-5	4.4	8.0	
	俾臼枕最小幅	24-27	7.9	11.7	中部横径	8-9	5.4	4.0	
	下端厚	22-23	2.4	2.6	下端横径	12-13	5.9	5.2	
第十三肋 (左) 骨	全長	1-2	97.6	86.7	全長	1-2	39.6	36.4	
	下端前後幅	2-21	6.1	5.6	前縁長	3-4	21.7	20.4	
	下端厚	22-23	2.4	2.6	上端前後径	5-6	11.9	11.9	
第二中手骨 (左)	全長	1-2	49.4	45.7	上端横径	7-8	11.1	10.5	
	上端横径	4-5	5.2	5.1	中部最大前後径	4-9	15.9	14.6	
	中部横径	8-9	6.8	5.4	中部最大横径	10-11	14.0	13.8	
	下端横径	12-13	6.8	6.2	下端最大幅	12-13	13.0	11.7	
第三中手骨 (左)	全長	1-2	56.0	52.4	全長	1-2	23.8		
	上端横径	4-5	7.1	6.7	滑車長	3-4	14.4		
	中部横径	8-9	6.4	5.5	滑車上縫幅	1-3	9.5		
	下端横径	12-13	6.5	6.0	頭部幅	8-9	8.8		
第四中手骨 (左)	全長	1-2	55.7	51.7	下端幅	11-12	11.5		
	上端横径	4-5	7.4	4.8	下端厚	13-13	7.2		
	中部横径	8-9	6.3	5.7	全長	91.3	—		
	下端横径	12-13	6.5	5.9	中央部横径	7.4	—		
第五中手骨 (左)	全長	1-2	47.2	44.1	中部高径	5.6	—		
	上端横径	4-5	10.6	7.1	凡例				
	中部横径	8-9	6.1	6.1	※印は斎藤弘吉氏の計測点				
	下端横径	12-13	7.3	6.4	部位名は第165図参照				
第二基節骨 (左)	全長	1-2	18.4	—	左右の骨がある場合、原則として左側の骨を計測している				
	上端横径	4-5	7.4	—					
	中部横径	8-9	5.3	—					
	下端横径	12-13	6.2	—					

3. 弥生時代の畿内におけるイヌの出土例

計測値の表記されているものを以下にまとめてみた。

(表7)
第39表 恩智犬頭蓋の計測値一覧

計測項目	NE-7~8 1号犬		NW-14~13 2号犬		NE-9 3号犬		NW-9 4号犬		NW-13~14 5号犬		NE-採 6号犬	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	左	左
最大頭蓋長(I-P)	(145.80)											
基底頭蓋長(B-P)	(129.55)											
脳頭蓋長(A-Fm)	81.75											
顎長 I (N-P)	72.40		73.50		81.40							
顎長 II (Fm-P)	(88.20)		82.95		91.50							
鼻骨最大長(N-Rh)	50.60		54.80									
硬口蓋長(P-St)	70.40		71.70		75.40							
硬口蓋幅(犬歯外側における)	27.55		26.55		31.80							
口蓋骨長(Po-St)	25.00		24.65		26.45							
上臼歯全長	50.85	50.80										
上前臼歯列全長	39.55	39.90		36.80								
上後臼歯列全長	15.10	15.40	16.70		17.75	18.10						
上 翼歯長	15.00	15.05	14.75		16.00	16.85	15.25					
上 翼歯幅	6.55	7.10	7.75		9.15	8.80	8.45					
第1大臼歯長	9.30	9.30			10.90	10.90	10.70					
第1大臼歯幅	11.80	11.90			13.85	13.85	12.80					
上頸歯槽最大幅		49.05		52.80		57.30						
上 頸 幅		24.90		26.20		30.00						
最小前頭幅(fs-fs)		27.35		26.55		31.80						
両前頭突起端間距離(Ect-Ect)		37.59		(41.85)								
両眼窓最小距離(Ent-Ent)		24.30		(27.30)		29.55						
眼窓最大幅		25.50	24.65	25.35								
後頭頸最大幅				30.00								
後頭孔最大幅				16.55								
後頭孔最大高				13.10								
鼓胞最大長		107.55	20.00	19.55								
下頸骨全長 I (Cm-id)		107.60		106.85				120.75	120.40	131.20		
下頸骨全長 II (goc-id)										120.00		
下頸骨長(Cmから犬歯の後縁まで)	92.80	92.40		90.95				106.65	106.00	113.70		
下頸体高 I (gov-cr)								48.25	48.15	51.25		
下頸体高 I (第1大臼歯の後縁)	16.40	16.30		17.15				21.25	20.40	22.10		
下頸体高 II (第2・3前臼歯間)	13.60	13.85		14.50				17.35	17.55	20.45	18.55	
下臼歯列全長	55.55	56.06		58.30				64.55	65.35	68.35		
下前臼歯列全長	27.90	28.75		29.65				34.00	34.15	36.55		
下後臼歯列全長	27.55	27.40		31.35				31.75	32.10	33.30		
下 翼歯長 M ₁	17.55	17.65		18.75				19.20	19.20	21.00	18.85	
下 翼歯幅 M ₁	6.80	6.85		6.90				7.65	7.65	8.45	7.45	
第2大臼歯長 M ₂	7.60	7.40		8.60						9.20		
第2大臼歯幅 M ₂	6.00	6.30		6.10						6.40		

() は破損のため計測誤差が大きい。

第40表 池上遺跡出土イヌ

出土層位	区画	登録番号	標本	図版番号
黒色粘土層	M地区B58区画	B-0439	前頭骨R 脇見あるいは新生兒	P L. 6-2
	M地区B58区画	B-0450	I ³ R、かなり摩耗	P L. 5-8
	M地区B59区画	B-1189	頭蓋：左右頸骨弓を欠く他はほぼ完存する標本 全長150.6mm 椎骨1 小型	P L. 6-1 a・b・c
	M地区D60区画	B-0567	寰骨R・L 環椎、軸椎、橈骨R、脛骨L、距骨 中手骨4、指骨1 椎骨3	P L. 6-3~6、11~14
	M地区F61区画		肩甲骨R	
	M地区H63区画		肋骨R 2	
	M地区J64区画		寛骨R 脛骨 (全長140.0mm) 中小型	
	M地区K64区画		大腿骨R (全長140.0mm) 中小型	
腐泥黒色粘土層	M地区D60区画		頸椎1 胸椎1 肋骨4 同一個体	
	M地区E60区画	B-0537	肩甲骨R、大腿骨L、肋骨R 2、L 4 椎骨1、中手・足骨1	P L. 6-5、10
	L地区X56区画		大腿骨L (p-s)	

第41表 大福遺跡出土のイヌ頭蓋の計測値一覧表

	大福犬	
	右	左
頭骨最大長 (I-P)		
基底全長	139.6	
基底長 (B-P)	128.8	
口蓋長	70.3	
頸弓部幅 (Zy-Zy)	84.1	
乳様突起幅	57.2	
脣幅	54.0	
後眼窓幅	32.9	
吻幅	29.9	
鼻骨長	47.8	
頸曲列齒槽部長 (P ¹ -M ²)	49.9	50.1
下頸長	107.3	
下頸歯列長	74.8	74.9

第42表 東奈良遺跡出土のイヌ下頸骨の計測値一覧表

計測部位	計測値(mm)
下頸骨長(Cmから犬歯の後縁)	92.30
下頸体高I (gov-Cr)	40.50
" I (第1大臼歯の後縁)	17.55
" II (第2・3前臼歯間)	16.15
下臼歯列全長	58.80
下前臼歯列全長	30.50
下後臼歯列全長	28.60
下歯齒長	18.10
" 幅	7.65
第2大臼歯長	7.20
" 幅	6.25

東奈良1号犬

(注7) 恩智遺跡からは最少個体数6のイヌの遺骸が報告されている。長谷部分類に照合してみると大きさは小型犬2、中小型犬3、中型犬1である。前二者の大きさは、弥生時代の各遺跡出土のイヌに共通してみられるが、後者(恩智5号犬)は、下頸骨全長131.20mmを測る大形のイヌで、その出自が興味をひく。いずれも離骨であるのは惜まれる。池上犬も恩智犬同様に小型、中小型

(注12)

(註8)
犬に限定される。

大福遺跡からは、同一個体に属する一個体分の大骨が得られている。出土状態は特異で、土壤中に埋置された弥生時代後期の長頸壺形土器の中に、小型のイヌの主要部骨が入れられていた。土器の容量から判断して、肉付きのまま遺骸を中におさめることは不可能で、当初より（再埋葬を意識してか）土器の中に入れることを念頭にして解体したのであろう。イヌの大きさは、頭蓋骨・下顎骨の計測値成果から小型犬に属す。弥生小型犬の骨相・大きさ（全体像）を知る上で貴重な資料と云える。

(註9)
東奈良犬は、弥生時代前期の溝より検出された小型犬の下顎骨である。大福犬よりも小ぶりである。

(註10)
以上、表に掲げた4遺跡のほかに真生堂遺跡、巨摩庵寺、唐古・鏡、鬼虎川遺跡から各部骨の出土例が報告されている。いずれもまとめて出土する例ではなく離散骨である。

ま と め

今回の亀井遺跡の調査（H 1・2 地区）によって、最少個体数14のイヌの遺骸を得ている。これは、他遺跡の出土量と比べて著しく多いといえる。保存状態が良好であったことにもよろうが、それにもまして沖積地と洪積地のほぼ中間に位置しているという立地条件が大きく基因しているのであろう。このことは豊富な動物遺存体がしめすように、農耕を基盤としつつも狩猟活動も積極的に行い、生産活動の中においても一つの役割りを果していたものといえ、イヌは獵犬として重要な役割りを担っていたのであろう。

時期別に個体数をみると中期6、後期8とやや後期に多い。イヌの大きさは中小型犬5、中型犬8、不明6である。中型犬の存在と小型犬のみられない点は、弥生時代を通じてみた場合、亀井遺跡の特徴として注目される。中でも亀井1号犬は、弥生時代には他に例をみない傑出した大きなイヌで、前時代の绳文時代からは直接的な系譜は現在のところ辿れない。これら亀井犬は、豊富な被狩猟歴（イノシシ、ニホンジカ等）の出土が具体的に示しているように、獵犬として使って狩猟活動に使役されていたのであろう。しかし、解体痕跡のある犬骨の存在は豊獣・豊作を願う儀式に伴う犠牲獸として食べられることもあったのであろう。SD-06出土の下顎骨にみられる擦痕、SD-03Eの4ブロックから出土した第6腰椎骨に観察された鋭利な接断痕は、そのことを如実に物語っているよう。

註1 長谷部宮人「日本石器時代家犬に就いて」人類学雑誌40-1 1925

長谷部宮人「石器時代家犬に就いて」人類学雑誌44-5 1929

註2 直良昌次「日本および日本周辺地域の古代家犬骨」「古代遺跡発掘の家畜遺体」校倉書房 1973

註3 斎藤弘吉「犬科動物骨格計測法」1963

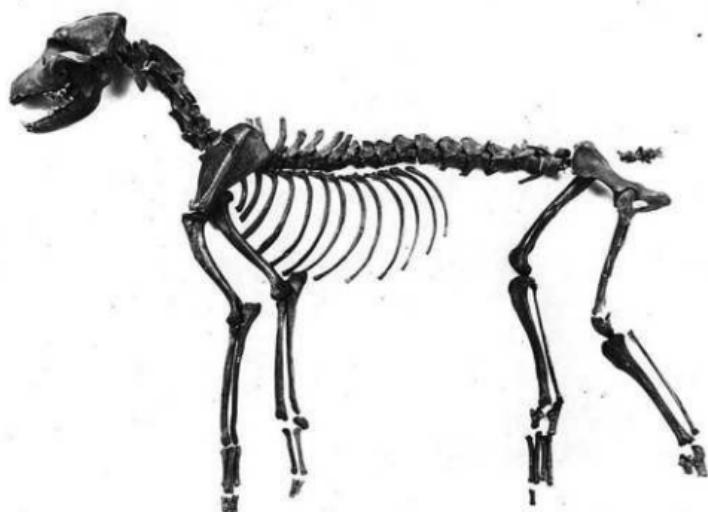
註4 長谷部宮人「大骨」「吉胡貝塚」文化財保護委員会 1942

註5 天然記念物に指定されている柴犬（芝犬）の標準体高は、雄39.5cm、雌36.5cmである。

四国犬の体高は雄51.5cm、雌48.5cm。秋田犬（太閤犬）の体高は雄66.6cm、雌60.6cm。

波辺 稔「柴犬標準の解説」「柴犬」愛犬の友編集 文堂新光社 1980

大野淳一「犬—その銘柄」カラーブック3 保育社 1980



a



b

第168図 亀井1、2号犬全身骨格写真 a(♀) b(♂)



第169図 龜井1、2号犬出土状況
S D -03Wの(Ⅱ)層削削中に検出



第170図 亀井1、2号犬出土状況（近景）東から



a



b



第171 亀井1号犬(♂)

a 上面觀

b 側面觀

c 底面觀



a



b



c

第172图 仇井2号犬(♀)

- a 上面观
- b 侧面观
- c 底面观



a



b

第173圖 左下頸骨
a 龜井2號犬(♀)外側
面觀
b 龜井1號犬(♂)同上



a



b

第174圖 SD-02出土頭
蓋(4號犬)
a 上面觀
b 側面觀



a



b



c

第175図 SD-06出土イヌ
頭蓋（3号犬）

- a 上面觀
- b 側面觀
- c 底面觀



第176図
イヌ



第177図
イヌ

第176図説明

1. 左下頸骨 (SD-06)
 2. 右下頸骨 下頸枝に 5mm 前後の孔を穿つ (SD-06)
 3. 緊椎 (SD-06)
 4. 中節骨 (SD-06)
 5. 中節骨 (SD-06)
 6. 肋骨片 (SD-06)
 7. 軸椎片 (SD-06)
 8. 軸椎 7 とは別個体 (SD-06)
 9. 右下頸骨片 (SD-06)
- 1～5、8は同一個体 (6号犬)

第177図説明

1. 右寛骨 (SD-03W)
2. 右寛骨 1 とは別個体 (SD-03W)
3. 右前頭骨片 亀井 1・2 号犬と比較した場合中小型犬に属する大きさである (SD-03W) 5号犬
4. 齒牙 (SD-03W)
5. 肩甲骨 亀井 1 号犬よりも大きい個体である (SD-04)

頸部最小幅	24.7mm
下 部 幅	28.0mm
圓 節 窝 長	23.6mm
圓 節 窝 窄	16.4mm
6. 右上腕骨 亀井 1 号犬よりも大きい個体である (SD-04) 骨近位端を失なう
7. 中節骨 (SD-04)



第178図説明

- a 左脛骨・腓骨（鬼井1号犬）
- b 右脛骨・腓骨は骨折のため2片に別れている（鬼井1号犬）

註6 卷頭カラー写真団版 2参照

註7 安部みき子「恩智遺跡出土の獣骨」「恩智遺跡I」本文編 瓜生堂遺跡調査会 1980
Tab. 46に若干補記

註8 金子浩昌・牛沢百合子「池上遺跡出土の動物遺存体」「池上・四ツ池遺跡 第6分冊
自然遺物編」大阪文化財センター 1975 掲載された表に若干補記している。

註9 横野博幸「大福遺跡出土の獣骨について」「大福遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第36冊
奈良県立橿原考古学研究所編 1978 本報告書第Ⅱ章の註 参照

註10 安部みき子「東奈良遺跡出土の動物遺存体」「東奈良」発掘調査概報Ⅰ 1981.2
第9表をそのまま引用

（註16）
その他に、計測値は掲載されていないが鬼虎川遺跡から小型犬の頭蓋骨が出土している。

註11 第33表参照

註12 言4の中長谷部氏は小型犬は雌、中小型犬は雄の可能性を示唆されている。

註13 西田正規「瓜生堂遺跡出土の動物骨」「瓜生堂」(財) 大阪文化財センター 1980.3

註14 西田正規「瓜生堂・巨摩庵寺遺跡出土の獣骨」「巨摩・瓜生堂」(財) 大阪文化財センター 1981.3

註15 寺沢 葉編「唐古・鍵遺跡」第10・11次発掘調査概報 橿原考古学研究所 1981

註16 東大阪市遺跡保護調査会「鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ」第4・5・6次調査 1980

第6節 方形周溝墓人骨の取り上げと保存処理

人骨の取り上げ

今回の調査で検出された方形周溝墓2基の埋葬施設に残っていた人骨を、保存と調査研究の目的で取り上げ、保存処理を行なった。

亀井遺跡では、はじめての方形周溝墓の検出であり、埋葬形態を知る上でも重要であると考えられる。なお、方形周溝墓2基の埋葬施設は木棺墓と土壙墓であるが、人骨が残っていたのは、木棺墓の4遺体である。取り上げを実行したのは、この4遺体（1、2、4、6号人骨）である。木棺墓の木棺は、わずかな残片が存在するのみである。検出された時点の人骨の状態は、かなり脆弱な状態であるため、従来の工法のような石膏等で取り上げる方法では人骨を破壊するおそれがある。そのため、脆弱な遺物の取り上げに有効であるウレタンフォームによる工法を用いた。なお、人骨を葬った木棺墓の土壙ごと切り取って処理する方法をとった。以下、図にそって取り上げ工程を説明する。

(1) 準備 硬質の発泡性ウレタン樹脂を用いて木棺墓全体を梱包、保護し切り取り、搬出するため、木棺墓周辺を削り出し、取り上げる範囲を決定した。 (第179図①)

(2) 仮強化 人骨表面の剥落防止のために、アクリル系合成樹脂による浸透強化を行なった。その後、木棺墓表面の剥落や次に施工するウレタンフォームと直接接触するのを防止するため、湿拓の要領で混らせた不織布でていねいにおおい、その上から砂で被覆補強した。 (第179図②)

(3) 梱包 切り出した木棺墓周囲を板及びダンボールで枠組みし、イソシアネートとポリオールを主原料とするウレタン原液を流し込んだ。使用方法は、この2液を1対1の割合で混合攪拌する。攪拌後ただちに発泡を開始し、数分で硬質のウレタンフォームを形成する。このウレタンフォームで木棺墓全体を梱包した。 (第179図③)

(4) 切り離し 木棺墓の搬出部分を大地から切り離すには、(第179図④)のように板をさしこみ逆転させる。逆転した面の余分な土壙は削り取り、ウレタンで保護し、クレーンを利用して搬出した。 (第180図⑤)

保存処理

ウレタンフォームで取り上げた木棺墓は容易に解体できるので、木棺墓と人骨があらわれるよう、ウレタンフォームを開梱した。開梱後の木棺墓土壌と人骨の保存処理は、現状保存を目標とし、次のような方法で行なった。

1. 木棺墓土壌及び人骨は水分を含んでいるため、このままの状態では表面にカビが発生したり、水分の蒸発と共にひび割れを生じる。その防止のためにアルコールを吹きつけ、徐々に脱水処理を行なった。
2. 人骨に付着している土壌は、1の段階で表面から取り去り、脱水処理を行なった。人骨は脆弱な状態であるため、アクリル系樹脂のキシレン溶液（商品名：パラロイドB72）を塗布しながら強化していった。
3. 木棺墓の存在を明らかにするため、土壌はそのまま保存する方法で処理を行なった。土壌の処理は、イソシアネート系樹脂のシンナー溶液（商品名：サンコールSK-50）を塗布しながら強化していった。

保存処理以前の問題点は、発掘、記録されている間に、土壌及び人骨の水分が蒸発して全体にひび割れを生じることである。発掘以前、土壌及び人骨は水分を含んでいるため、水分の表面張力によって安定した状態に保たれている。しかし、水分が蒸発すると共に表面張力が弱まり、不安定な状態になり変形する。アルコール及び合成樹脂による処理法は、乾燥時の変形を最小限に押えるための良好な方法であると考えられる。

すなわち、水分を多く含んでいる遺物を保存処理する場合には、検出された時点から水分の蒸発を抑えるための処理が必要であり、徐々に強化していくば、かなり良好な保存状況を保つことができるであろう。

①準備 取り上げる範囲を決定。



③強化 クレタンフォームの離脱が容易になるように配慮した。



④クレタンフォームによる糊包
板及びダンボールの枠組で、クレタン樹脂
を注入。



⑤切り離し。



第179図 人骨の取りあげ



⑥ クレーンによる搬出。



⑦ 頭蓋骨の保存状況（第2号人骨）。



⑧ 下肢骨の保存状況（第6号人骨）。

第180図 人骨の取りあげ

第Ⅷ章 考 察

第1節 調査のまとめ

亀井遺跡の調査はすでに三回の大規模な調査が行われ、その報告書（KM）も公にされ、いまさら重要性を指摘する必要はないであろう。第182図は既往の調査トレンチの配置図である。

さて、今回の調査で明らかになった点について以下にのべてみたい。

1) 縄紋時代以前

弥生時代の2次的堆積層である方形周溝墓の盛土中から調状剣片石核、中期後半のSD-03溝から縦長剣片を各々1点得ている。すでにKMの調査で亀井における最古の面（旧石器時代）がT.P.±0mに伏在していることが指摘されているところからして消極的ながらプライマリィーな旧石器時代遺構の存在が想定される。また、縄紋時代に関しては、基本土層の第Ⅹ層にあたる暗褐灰色粘土層中から縄紋晚期の底部1を検出しており、第Ⅹ層が縄紋晚期に形成された層であることが明らかとなった。

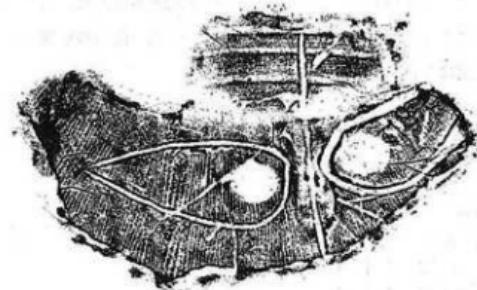
2) 弥生時代前期

この時代の遺構は検出されていないが、SD-03、SD-04溝から前期の土器数片を得ており、附近に該期の遺構の存在が考えられる。幸い、KM-KのCトレンチの調査で前期の遺構が検出されていることから集落の存在が確められた。

3) 弥生時代中期

検出された遺構や遺物は多種多样にわたっている。遺構では亀井遺跡で初めて方形周溝墓2基を検出できたことは大きな成果であった。また、特殊な遺物としてはSD-03溝から出土した邪視文土器（第181図）と占いに用いられたト骨があげられよう。さらに二頭分

のイス全身骨格の出土は弥生人の



第181図 SD-03出土の邪視文のある土器片 (引)

イヌに対する精神面の一端を示す好例として注目に値するものといえる。おそらく狩猟、農耕儀礼の犠牲獸として溝中に供獻されたのであろう。また、供獻後に溝中に廻棄されたのであろう。

4) 弥生時代後期

中期からの亀井人の生活が継続される。後期前半に遺構の集中がみられ、特に土坑及び井戸の集中する傾向がある。遺構の埋土は中期の場合と異なりシルト化が進んだものといえ、不安定な

環境に近づきつつあるためによるのであろう。第43表は弥生中、後期を通じて得られた動物遺存体の最少個体数を表記したものである。

5) 古墳時代前期

従来の亀井遺跡の調査では未検出であったが、今回、弥生時代遺物包含層を覆う青灰色シルト(NR-3001の氾濫土)層をベースとして流れる古墳時代前期の自然流路(SD-01)を確認している。

6) 古墳時代中期～藤原時代

KM-H1・2の調査では明確な遺構は検出されていないが、基本層序第Ⅲ層がこれに相当しよう。

7) 奈良時代

基本土層第Ⅳ層に相当し、上面にて多数の小穴を確認している。埋土はシルト・砂であり、その形状からしてクシの足跡であろうと思われた。

8) 室町時代

基本土層第Ⅴb層が当時の生活面に相当する。検出された遺構は、落ち込み、溝状遺構で遺跡としては集落の中心から離れているものと思われた。(第129図)

9) 江戸時代以降

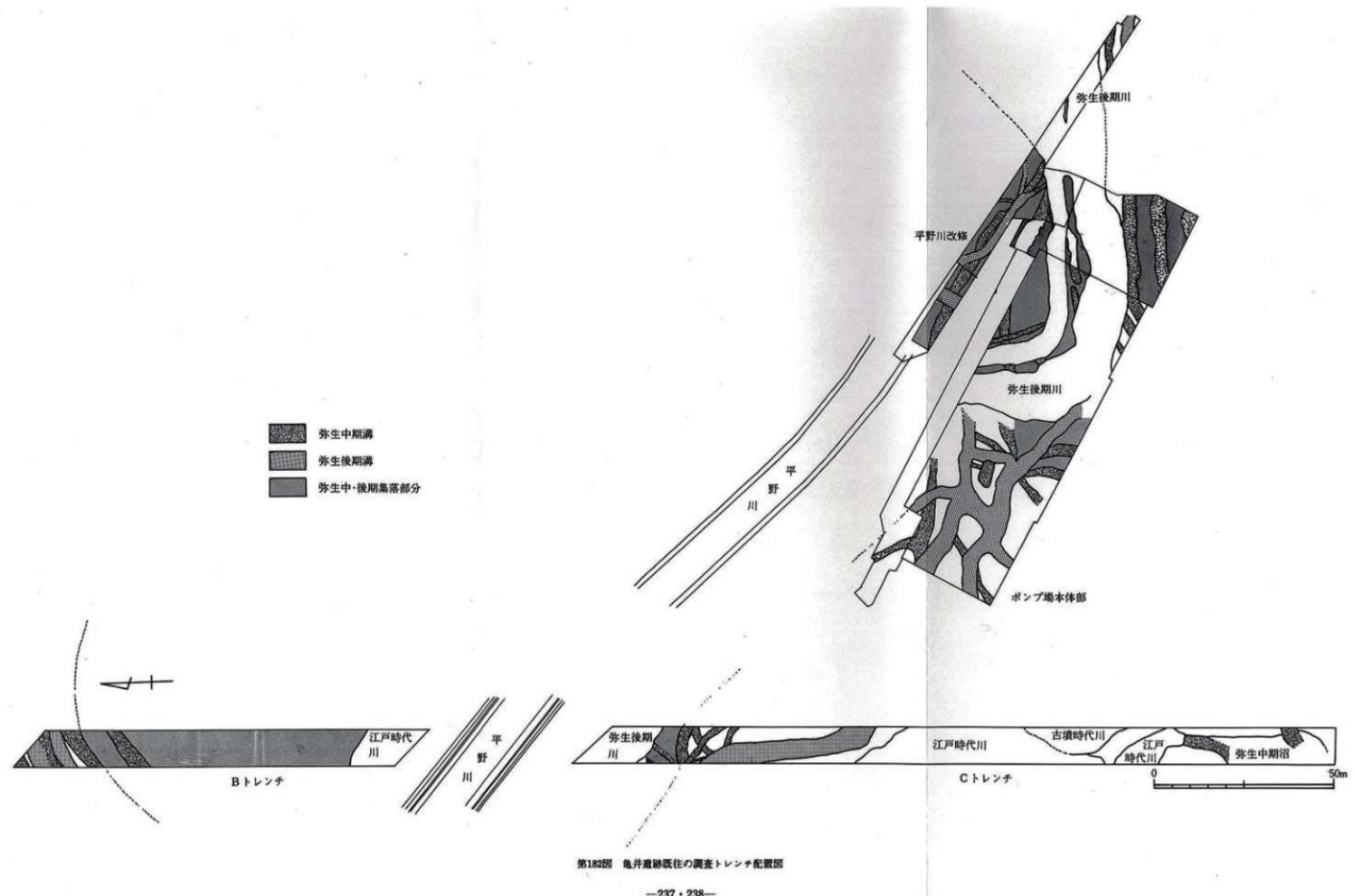
KM-H1・2の調査では南端で旧平野川の東岸を検出している。

以上、亀井遺跡(KM-H1・2)の調査によって明らかになった点を時代順にみてきたが、解決できなかった問題点、解決すべき点をあげると、旧石器時代の遺構、縄文時代の遺構(検出される可能性が大変低い)、弥生時代前期、後期の集落がいまだ不明であることである。以上の問題は今後の課題として提出したい。

第43表 動物遺存体の最少個体数(KM-H1・2)

動物名 遺構	イ ノ シ シ	ニ ホ ン ジ カ ス	イ ヌ キ	タ ス キ	ス ツ ボ ン	ヘ ビ	ネ ミ	モ ラ	ト リ	エ イ	ナ マ ズ	ギ ギ	カ エ ル	ウ マ
落ち込み1	7	1							1		1			
落ち込み2	1	1												
SK-03	1	1												
SD-03	8	2	6			1		5	1		1			2
SD-05	1										1	1		
SD-02	3	2	1											
SD-04	2	1+α	4	1										
SD-06	3	1	3			1					1	1	1	
SD-01														1
総 数	26	9	14	1	1	2	5	1	1	2	3	2	3	1

※ヒト及び方形周溝墓マウンド出土の動物遺存体はこの表より除外している。



第2節 畿内大社会の理論的様相

——大阪湾沿岸における調査から——

はじめに

(財) 大阪文化財センターによる大阪府八尾市・亀井遺跡の発掘調査は、行政上必要とされるデータの収集にくわえて、次のような課題を意識し、ここ数年間おこなわれてきた。

- ・集落の規模とその構造
- ・基本生活領域内の実態
- ・周囲の自然・社会環境
- ・生業・経済活動
- ・精神活動
- ・社会関係
- ・それらの歴史的变化
- ・その他

筆者は、過去3回にわたる発掘調査のうち、このたび報告された平野川改修工事にともなう調査を担当した。今回報告の機会をえたので、亀井遺跡を理解すべく、畿内における弥生時代中期の拠点集落ならびに畿内大社会について論議したい。もちろん、亀井遺跡は、拠点集落の典型的な一事例である。

論をすすめるについては、先ず、畿内の代表的な集落址をいくつか簡略に観察しながらその一般的な様相を把握し、それにもとづいて拠点集落の理論的枠組を仮設する。次いで、拠点集落の分布、および集落間の相互関係を把握するのに有効な生産物の移動についていくつかの認識をのべる。これは、集落間の関係は、拠点集落の分布と、生産物の搬入・搬出状況に明確に表現されると理解することによる。そして最後に、それがもつ個有の祭祀イデオロギーについて説明する。

今回は、いわゆる“畿内大社会”的うち大阪湾沿岸地域についてのみ限定しとどけるが、そこで得られる理論的様相は、畿内大社会全体にあてはまるものと確信している。また、同様の観点から、畿内以外の諸地域、すなわち北九州（今山產大型船石斧の分布範囲に示される）や、瀬戸内海沿岸（サヌカイト製打製石底丁の分布範囲に示される）、その他についても論議が可能である。これら諸課題には、別稿がいくつか用意される。

1. 拠点集落の理論的様相

拠点集落は、基本生活領域を核とし、それをとりまく外縁施設・機能空間・周囲の自然環境により構成される（第183図）。

基本的な生活行為の類型 集落とは、人間の生命維持にかかわる各種の生活行動がされる場であり、考古学的には、そこに住まつた人々による生活行動の諸痕跡の總体、と定義される。そうした意味では、地理学における定義とはことなる。その理由は、考古学においては、景観としての集落よりも、生活行動の場としての集落を強調して理解しようとするにある。

われわれが、集落址において遺構・遺物の出土状況として眼のあたりにする生活行動の諸痕跡は、一見多様であるけれども、おおむね第44表にあげるような類型に整理できる（酒井1982年）。すなわち、生活の場として集落址を構成するのは、行為の主体である人間（a）をはじめとし、生活にかかわる住居（b）・貯蔵（c）・調理（d）施設と食料（e）・道具（f）・精神活動にかかわる祭祀（h）施設、そして、それぞれのカテゴリーや後に述べる行為のプロセスを画する結界（g）施設である。各カテゴリーや、人間であれば出生—生活—死亡、施設であれば設定—使用—放棄、物品であれば製作—使用—廃棄という3つの行為のプロセス（I—I—I）を経過する。これらを考えあわすと、生活の場でおこなわれる生活行為の類型は25を数えることになる。ところで、行動の主体者や対象には、一般的なもの（A）、特別なもの（B）、男女共用のもの（C）、男のもの（D）、女のもの（E）、にくわえてその他（たとえば、神・邪氣・精霊など）のもの（F）、の区別がある。それゆえ、論理的に考えうる行為の類型の総数は、25の6倍、

第44表 生活領域内における生活行為の類型

行為のプロセス 遺構・遺物 のカテゴリー	I	II	III
a (人間)	出 生	生 活	死 亡
b 住居址	設 定	使 用	放 弃
c 貯蔵施設址	設 定	使 用	放 弃
d 調理施設址	設 定	使 用	放 弃
e 食 料	調 理	食 事	1 廃棄 2 掛置
f 道 具	製 作	使 用	放 弃
g 結界施設址	設 定	機 能	放 弃
h 祭 祀 址	準 備	行 為	終 了

（注）それぞれ類型には

- A 一般的なもの
- B 特別なもの
- C 男女共用のもの
- D 男のもの
- E 女のもの
- F その他のもの

の区別があり、総計150の類型となる。

（酒井1982年）

つまり150にもものばる。もちろん、この他にも様々な行動が、生活の場で実際にはおこなわれたであろう。だが、生活行動を基本的に構成するのは、これらである。

以上のような類型の行為にかかわる遺構や遺物の集中・分布する空間が、その集落における生活領域である。

生活領域の固定 先のような類型の行為がされ、あるいはそれにかかわる施設が設けられる空間は、時々により変化するけれども、実際の拠点集落を巨視的に観察すると、長期にわたってかなり固定した空間が使用された事実がしれる。それについては、各時代にわたる生活遺構・遺物の

累積や集中状況や、厚い生活堆積層の存在をもって観察できる。

そもそも、集落の設定の意義が、その地を定住のために選定し、そこを生活の拠点として周囲の自然環境にはたらきかけ、また、他の生活集団との関係をもって大社会を形成してゆくことにあるとすれば、なんらかの理由がないかぎり、その地に永住してゆくことになるのが当然である。特別な機能的役割をもつて設定され、目的が終了することにより、もはやその地に存続する意味をうしなう集落とは、そのありかたを基本的にことにするだろう。それゆえ、前者を「生活集落」、対する後者を「機能集落」とよびわけることが可能である。「拠点集落」とは、前者にふくまれるタイプの集落型態である。拠点集落は、永久に存続すべく設定されるのに本質の一部があるに対して、機能集落は、目的の終了をもって廃絶されることに本質の一部がある。このような観点にたてば、拠点集落の廃絶や生活領域の変更には、なんらかの社会的・自然的事情が説明される必要がある。

たとえば、第Ⅶ様式初頭に生活領域が放棄される瓜生堂遺跡は、その原因として自然環境の変化が説明される（安田1973年）のは、その一事例である。それに対して、同じ河内平野の拠点集落であっても、その南5kmに位置する亀井遺跡は、第Ⅶ様式においても存続しつづけ、そうした自然環境の変化が重大な影響をあたえなかったことをしめしている。また、池上遺跡も亀井遺跡と同様の状況をしめす。だが、池上遺跡の北東5.5km、同じ和泉平野に位置する四ツ池遺跡は、瓜生堂遺跡がこうむった自然環境の変化に影響されない台地上にあるにもかかわらず、第Ⅶ様式初頭にはそれまでの生活領域は放棄される。それゆえ、これについては瓜生堂遺跡とは別の自然環境の影響か、それ以外の社会環境の影響をもって説明する必要がでてくる。その原因については本稿ではふれないとしても、拠点集落の個々の廃棄を、調査にもとづいて説明する必然性はあきらかである。

生活領域とその範囲さて、先のような類型の行動がおこなわれる場、すなわち、それらにかかる遺構や遺物の集中・分布する場を、「基本生活領域（以下、生活領域）」とよぶ。集落規模の測定するについては、この生活領域の範囲をもってしたい。

拠点集落の一つである亀井遺跡の生活領域の範囲は、長吉ポンプ場建設、近畿自動車道建設、そして平野川改修工事にともなう3ヶ所の発掘からある程度の推定が可能である（大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター1981年）。それによると、北西端は近畿道Bトレンチ北端付近に、南西端は同Cトレンチ北端付近に、南端は長吉ポンプ場中央部付近に、そして、東南端は平野川改修の東端付近に、もとめられる。それぞれに画される内側には、弥生時代中期～後期にかけての各種の生活遺構と多数の生活遺物が集中・分布するとともに、生活領域を特徴づける黒色有機質遺物包含層の厚さ1mにもおよぶ堆積を見る。たいして、それぞれの端部の外側は、生活遺構や遺物の分布が極端に少なくなるとともに、黒色有機質土層の堆積もなくなり、もはや生活領域の外側であることをしめしている。残念ながら、遺跡の東側ではこれ迄発掘がなされておらず、この方向の端部は未確認である。これらの結果から、北西一東南に軸をおく長径300m強、

短径150m以上の梢円形範囲が、亀井遺跡における中期～後期の生活領域と推定できる。

それでは、亀井遺跡での生活領域の規模を、畿内を代表する二つの集落遺跡と比べてみよう。

先ず、同じ河内平野にあって、亀井遺跡の北5kmに位置する東大阪市・瓜生堂遺跡をとりあげる。この遺跡での生活領域は、瓜生堂遺跡調査会と(財)大阪文化財センターによる発掘結果から推定が可能である(瓜生堂遺跡調査会1971年、1972年、1973年、1981年大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1980年)。遺跡を南北に縦断する(財)大阪文化財センターによる中央環状線内のトレンチでは、生活遺構の集中分布する範囲の北端をBトレンチ北端付近で、対する南端をEトレンチ内で確認している。この間は200m強をはかる。東西方向のトレンチ内での遺構分布の状況からみて、この縦断が遺跡の東端近くに位置することがわかるので、集落中央の南北端の距離はさらに大きくなるであろう。東西に横断する瓜生堂遺跡調査会による中央南幹線下水管渠内のトレンチでは、東端を中央環状線付近で、対する西端を小阪ポンプ場の西端付近で確認しており、その間200mをはかる。それぞれに面される内側には、弥生時代中期の各種の生活遺構と大量の遺物が集中するとともに、黒色有機質の生活堆積層の広がりがみとめられる。これとは対称的に、それぞれの外側では、いずれとも希薄となる。これらの調査結果を考えあわせると、南北200m、東西200m強程度の範囲が、瓜生堂遺跡における弥生時代中期の生活領域と推定できよう。

次に、和泉市・池上遺跡をとりあげよう。この集落の生活領域は、第二阪和国道内遺跡調査会および大阪府教育委員会の両トレンチとで、おおむね推定が可能である(第二阪和国道内遺跡調査会1971年、大阪府教育委員会1975年)。第二阪和国道予定路線内に設定されたトレンチは、集落の東端近くを東北～南西方向に横断する。そして、北東端をM地区内で、対する南西端をH地区内で確認しており、その間は300m強を測る。大阪府教委による松の浜曾根線のトレンチでは、北端をI・K・C地区で確認している。西端は曾根神社付近は求められる。それぞれに面される端部の内側には、弥生時代中期の各種の生活遺構と大量の遺物の集中をみるとともに、黒色有機質遺物包含層の堆積がある。それぞれの端部の外側は、対照的に、いずれも希薄となる。これらトレンチ内の状況や、遺跡内各地点でのその他の調査結果を考えあわせると、池上遺跡における弥生時代中期の生活領域の範囲は、南北および東西とも径300m～350m程度であることが理解できる。

これまで、亀井・瓜生堂・池上といいういすれも大規模な集落における中期の生活領域の範囲を、発掘調査の結果によりながら推定してきた。そして、なお未確認の部分もあったが、いずれも300mという数値に近い範囲をえている。そこで、径300mという数値を一応の基準にすると、円形面積として70,650m²という数値がえられる。

生活領域の外縁 調査をする側にとって、生活領域の確定は、各種の生活遺構や遺物の分布状況の観察、および黒色有機質の遺物包含層である生活堆積土層の存在の観察によりなされ、同様に、その範囲についても測定できる。

それでは、当時の人々は、その範囲を画するなんらかの施設や地形をもって、生活領域の外縁を意識していたのであろうか。少なくとも、われわれの目からみれば、生活領域の外側は、生活遺構と遺物の分布状況は極端に希薄となり、それにともなって生活堆積層の堆積もなくなる。先にあげた三遺跡での状況を観察してみよう。

亀井遺跡での生活領域の北西端には、中期の幅3m程度の大溝が4本、後期の幅4m程度の大溝が2本、対する西南端にも中期の幅2m~3mの大溝数本と、後期の大きな自然河川の存在が確認されている。また、南端にも中期の大溝群や後期の自然河川がある。この付近をもって、いずれも遺構や遺物の分布状況、ならびに堆積土層の状況は大きく変化する。

瓜生堂遺跡では、北端には中期の湿地帯や幅10m程度の自然流路、南端には中期の幅6mの大溝と幅2mの溝、東端には斜面・湿地が存在している。やはり、それらを境にして遺構・遺物・土層の状況は大きく変化する。

池上遺跡では、東端と北端に中期の幅4m~5mの大溝群が、南端に溝群があり、やはりそれを境にして遺構、遺物、土層の状況は大きく変化する。注目されるのは、東~北の生活領域を画した大溝は、南側では領域の内側をはしり、さらに大溝の南外側にも生活諸遺構と遺物、あるいは生活堆積の土層が広がっている。すなわち大溝がかならずしも全域にわたって生活領域の外縁施設の役をはたしているのではなく、べつのものがそれにあてられている。よって、この遺跡における大溝群が、集落を完全に周囲する環濠になるかどうかの判断は別としても、少なくとも大溝の外側にも一部生活領域が広がっている事実があり、その外縁には別の流路や、それに相前後して存在する空間が同様の機能をはたしている。

このように、三つの集落をみると、それぞれの生活領域の外縁には、人為的大溝、あるいは自然的な河川や湿地帯が存在しており、これらが可視的な外縁施設としての役割をはたしていたことがうかがわれる。そして、それらに相前後して、遺構分布の希薄な幅10~数10mの空間帯がみられる場合もある。

機能空間とその範囲 機能空間とは、基本的な生活領域にすまう人々が、みずからの意志と労力により、狭義の意味での衣食住という生活行動以外の施設を設け、それにかかる行動をおこなう空間である。たとえば、水田や畑に代表される生産のための施設、土器棺、土墳墓、方形周溝等に代表される埋葬のための施設、祭祀行為のための広場、あるいは用水にかかる水路、人々の共同の倉庫群に代表される貯蔵施設、各種の道具を製るための場、その他さまざまな機能のための施設や行動があげられる。これらの施設が設定される空間は、いずれの集落址を観察しても、生活領域と重複しつつも、さらにそれをこえた外側にも拡大した範囲で広がっていることがわかる。埋葬施設を例にとると、亀井・瓜生堂・池上遺跡とも、生活領域のなかにも設定されるだけでなく、さらにその外側にも幾群かにわかつて設定されている。発掘調査が、従来では生活領域の主として内側にのみ実施されたことが多いことに起因して、こうした機能空間が、各地の集落の外側にどの程度広がるのかはあきらかではない。現時点では、生活領域の外側におよぶ基

域や水田址の分布状況、あるいは遺跡範囲から推察して、径700m、面積にして384,650m²と理解しておこう。すなわち、生活領域のさらに外側200mにまでおよぶものである。

生活領域を核とする環境体とその範囲 大阪湾沿岸のいわゆる拠点集落とよばれる遺跡の分布状況を観察すると、その間隔が5km前後のものが多いことに気づく。

たとえば、和泉における池上遺跡と隣の四ツ池遺跡の間隔は5.5km、南河内における喜志遺跡と国府遺跡は5.1km、北河内における亀井遺跡と恩智遺跡は4.6km、また亀井遺跡と瓜生堂遺跡は5.2km、国府遺跡と恩智遺跡は4.5km、瓜生堂遺跡と鬼虎川遺跡は4.1km、そして、西摂津における垂水遺跡と勝部遺跡は5.2km、垂水遺跡と宮の前遺跡は5.9km、宮の前遺跡と茨津加茂遺跡は4.3km、などがあげられる。

もちろん、これらの他にはより間隔の大きいものや小さいもの、という多様な数値が実際にはえられるし、遺跡の広がりの未確定なものについての間隔は正確に測定できないとしても、概して5kmという数値は確かに目安となる。

この観点から、隣在する拠点的集落との間隔を二分し、たがいに重複しない程度の空間、すなわち生活領域の中心を核として半径2.5kmの円周を理論上えがく。この円形範囲を、内在する生活集団の概念的領域と理解する、この径5km、面積にして19,625,000m²は、さきにあげたように、実際の遺跡分布から割りだされたもので、内在する生活集団がみずから機能すべくエネルギーを吸収できる一環境体である。もちろん、この環境体だけで拠点的集落の一つが存在しうるというのではなく、他の多くの生活集団と相互にむすびついてより大きな社会——大社会——を構成しつつも、そのなかで役割をはたす個性となるものである。弥生時代中期という時代における拠点的集落にあたえられた一般的な規模の環境体と理解する。

拠点的集落の理論的枠組 以上のような考えたから、拠点集落はつぎのような理論的枠組をもつ。(第183図)

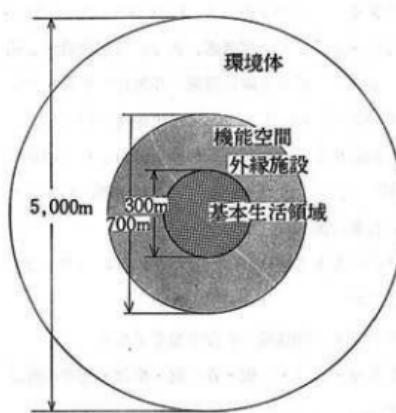
先ず、核として径300m、面積70,650m²の基本的な生活領域が存在する。そこでは、生活を構成する25の行為類型にかかる行為がおこなわれる。それぞれの類型には、一般的なもの、特別なもの、男女のもの、男のもの、女のもの、そして、その他のもの、がその主体となる可能性を考慮すると、総計150の行為類型にのぼる。すなわち、生活領域の場では、150の行為類型にかかる行動の痕跡(遺構・遺物)が本来みいだせることになろう。

その外縁には、人為的な大溝や空間、あるいは自然的な湿地・河川・傾斜地などの可視的な外縁施設がとりまく。柵、ヘイ、土里、林なども想定できるが、まだ検証された事例はすくない。

生活領域に重複し、さらにその外側にもおよぶ機能空間は、径700m、面積にして2,384,650m²程度が想定される。そこでは、水田や畑あるいは墳墓といったものをはじめとして、種々の機能的な施設が設定され、それにかかる行動がおこなわれる。生活集団自身による人為的な機能空間である。

生活領域を核とする径5km、面積にして19,625,000m²の範囲は、内在する生活集団の概念的

領域である。この範囲は、隣接する別の生活集団のそれとは、基本的には重複しない。



第183図 基本生活領域を核とする環境体

なお、本稿では触れないが、一個の生活集団は、複数の下位集団により構成されている。それぞれの下位集団は、生活領域内部において、住居をはじめとする生活諸施設および墓域の設定に独自の区域をもっており、他とは区別される。従来の調査では、下位単位の数は2~3個とみられる。複数の下位単位は、分節型線形構造をもって結合している。ちなみに、典型的な縄文集落は、求心型円形構造による1個の生活集団により構成されることが一般的であった。

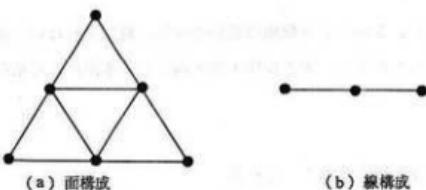
2 拠点集落による空間構成

大社会は、各地に点在する拠点集落により空間的に構成される。構成のありかたは、「面構成」と「線構成」の二者がある。(第184図)

拠点集落の等質性 従来の知見によるかぎり、大阪湾沿岸地域に点存する拠点集落は、規模・構造・機能について基本的な隔差はない。特定の集落や集団を頂点とする社会のヒエラルキーを想定する意見があるとすれば、これまでの調査結果にもとづかない。すくなくとも、他を圧する特定の集落・集団・個人の存在を質的的に肯定するいかなる考古学的データは、弥生時代中期における畿内の集落址にはこれまでみいだせていないし、その存在をに説明しうる論議もない。

たとえば、河内平野に位置する瓜生堂遺跡が、各種生産物の未成品の出土がすくないこと、および大型の方形周溝墓の発見されたことを理由に、他の諸集落と比較してなんらかの政治的傑出性をもつと評価する意見があれば、データの実状と大社会の構造から判断して妥当ではない。

拠点集落の間隔 大阪湾沿岸各地に点在する拠点集落の間隔は、基本的には5kmの間隔をあけて点在する。



第184図 拠点集落による構成

5 Kmという基準値を設定した場合、それ以上離れて存する集落間の関係は、ただちに問題となるにしても、別に、きわめて近接して存する集落がいくつかあることに気づく。たとえば、攝津における勝部遺跡と田能遺跡、河内における瓜生堂遺跡と巨摩遺跡、あるいは国府遺跡と船橋遺跡、などがあげられる。これらは、いずれもかなりの部分を隣の遺跡と環境体と共有していくことになり、5 Km程度離れて存する集落間の関係とは、別のものであった可能性はつよい。

本稿では論じることはないが、時代におおむねて拠点集落の周囲に、いわゆる分村としての小集落が派生する動向も生じるけれども、これらの事例は、かなりはやい時点から長時間にわたって同一環境体のなかで、隣接・共存しており、その特異な関係は注目される。

拠点集落による空間構成 拠点集落あるいは、その役を有する時代にはたしたとみられるような集落の分布状況を概観すると、次のような空間構成となる。

旧河内湾の北側および南側には、複数の集落をもつて「面構成」をなす地帯がある。

河内平野では、鬼虎川・繩手・恩智・国府・瓜生堂・亀井・瓜破・森ノ宮・桑津・遠里小野遺跡などにより構成され、これを「河内面帶」とよぶ。

攝津平野では、安満・津之江・東奈良・柱木・太秦・垂水・崇禪寺・森小路・田ノ口の遺跡などにより構成され、これを「東攝津面帶」とよぶ。これらは、この面帶の中央部を流れる淀川は、その南北を二分する役ははたさない。

南北の面体は、生駒山脈の西麓の太秦——中垣内——鬼虎川遺跡の「旧河内湾東側の線帶」で結ばれる。両者の中央に広がる旧河内湾（市原・梶山1972年）は、埋積の過程であり、当然遺跡の分布はすぐない。

河内面帶の南西端は、遠里小野——四ツ池——池上——畠 → という「大阪湾東側沿岸の線帶」を構成する諸遺跡により、南方の紀伊へとむかう。畠遺跡と男の里遺跡間の実態は、未確定。

また南東端は、国府——喜志 → という「石川沿岸帶」の遺跡により、南方へとむかう。

東攝津面帶の西側には、勝部・田能・宮ノ前・攝津加茂・上津島・不ノ田・武庫莊をはじめとした諸遺跡により構成される「西攝津面帶」がつながる。

東攝津面帶の北東側へは、安満を起点として山城の遺跡群へとつなぐ。

生駒山脈の東側・大和盆地には10余遺跡程度（推定）の拠点集落による面構成「大和面帶」がある。

分布状況を観察すると、5 Kmという数値は地形や面積に規制されない一般的な陸路による拠点集落間の間隔であることがわかる。大きな川・渕・海という水路による結びつきは、この距離とはことなるだろう。

3 生産物の移動による拠点集落のつながり

生産物の移動には、「極部的移動」、「地域的移動」、「社会的移動」、そして「越社会的移動」の

四種（酒井1976）があり、また「相互移動」と「一方的移動」の基本的区別が必要である。

拠点集落間は、このうち生産物の社会的・相互移動により結びつく。（第185図）

生産物移動の諸レベル 先ず、自らの環境体の中で素材が産出し、製作すべき諸道具がその生活領域内で出土する場合は、その生産物が集団内で生産されたと判断してよいだろう。例えば、池上遺跡では、花粉分析や種子・葉の同定結果から周辺に大型樹木の植生が推定され、各種木器の未成品が大量に出土し、その製作に必要な大型船刀石斧・方柱片刃石斧・扁平片刃石斧もまた大量に出土する。これらのことから、ここで木製品の製作がおこなわれた可能性は、事実に近い度合で認めうる。

同じく亀井遺跡でも、同様に花粉分析の結果から周辺にカシ等の植生が想定され、やはり大型船刀石斧・方柱片刃石斧・扁平片刃石斧の出土がかなりある。池上遺跡における状況を踏え、亀井遺跡での観察事項を評価すれば、ここでも木器の製作がおこなわれた可能性を認めることができよう。河内平野の鬼虎川遺跡も同様である。

ところが、同じ河内平野にあっても、瓜生堂遺跡では、周辺が草地であった可能性を花粉分析等より示唆され、また大型船刀石斧の出土数も他遺跡と比べて極端に少ない（酒井1981年）。この現象を認めるるとすると、少なくとも瓜生堂遺跡の生活集団が自らの環境体の中で大型の樹木を伐載した蓋然性は極めて低いことになる。もちろん少數ながら大型船刀石斧の出土をみており、その作業は時としておこなわれたことは考えられる。ただし、その頻度は少ないだろう。対して、方柱片刃石斧と扁平片刃石斧は、大型船刀石斧と比べて出土する数は多く、また完成した木器も多款出土する。このことは、他環境体から素材となる材木・板材あるいは半成品を搬入し、その最終的な加工・調整作業はこの集団内でなされた可能性を示唆している。こうした観点でみれば、池上遺跡における木器は自らの環境体内で生みだされたものであるに対して、瓜生堂遺跡における同じ木器は他の集団からもたらされた可能性が考えられる。ここで、ある工程以前の未成品が出土しないこと、石庖丁や大型の石槍（石剣）のように半成品として畿内各地を移動するものがあること等を考えあわせれば、瓜生堂の木器についても同様な加工段階で搬入されたとみるのも妥当性がある。この区別を認めて、池上遺跡の事例のように一環境体の中で製作され（その内部の集団、たとえ分村に住まう集団であっても）、使用されるべく移動するものを「板部的移動」、対して、瓜生堂遺跡の事例のように他の環境体に住まう集団の手により搬出され、地域社会を越えて搬入されるものを「社会的移動」するものと呼ぶ。

この他、径5kmの環境体の中には産出しないけれども、他の集団の手をわざわざしたとは考えられない可能性のある、例えば、大型船刀石斧の素材のような事例もみられる。すなわち、ある生活集団が自らの環境体を越えて独自で入手し搬入した可能性のもので、これを「地域的移動」したものと呼ぶことになる。

これらの生産物とは別に、畿内の地に全く素材が産出しないにもかかわらず、大量の製品のみが出土するものがある。例えば、鉄器や青銅器にかかる素材である。既に、剣、戈、鐸といった

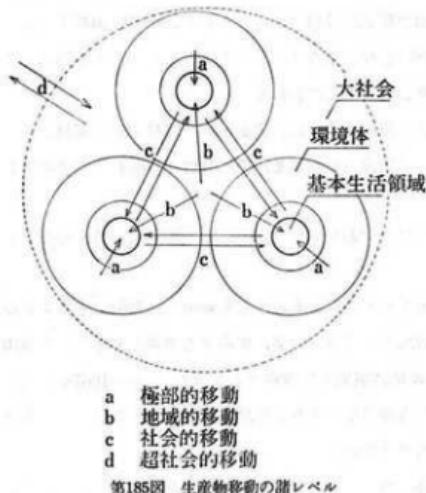
青銅祭器については、畿内の各地で鋳型の出土をみており、その製作のかなりがこの地でおこなわれたことは明らかである。また、製品の分布が畿内大社会内部、およびそれを核とする広範囲におよんでいるとともに、各地の集落内でそれらの細片の出土例も増加しつつあり、その消費の主体がここにあったことも示唆している。このように大社会外部の遠隔地、すなわち日常生活レベルで結びつきのない他の大社会からもたらされた製品や素材を、「超社会的移動」と呼ぶことになる。もちろん、畿内大社会個別の生産物が、他の大社会へ移動したものについても同様である。

生産物の相互移動と一方的移動 各地の拠点集落は、その地理的諸条件にもとづいて、それぞれ個別の環境体をもつことになる。例えば、河内平野の厚い沖積土壌上に立地する全集落は、石器用素材のすべてを他地域から搬入せざるをえない条件が当初より与えられる。また、大型樹木のない地域にあっては、やはり木器用素材についても同様の条件が与えられる。サヌカイトを産する二上山地域に近接する集団は、それを大量に入手できる機会が大であり、結晶片岩を産する紀ノ川流域の集団も同様の条件をうる。粘板岩や頁岩を産する円波山地に近接する集団も、また同様の機会をえるであろう。

このような地理的状況のもとにあって、素材の産出の豊富な地域から、それを全く産出しない地へ素材や半成品が移動しておれば、それが交易のような両地域の集団による交換行為によると理解することは、あながち不当ではない。もちろんこの可能性を想定するには、産出地に近接して当該集落地がみいだせることが前程となる。さらに、別の物品が逆方向に移動している事実が検証できれば、その蓋然性はまた高くなる。再び、瓜生堂遺跡を例にとれば、なおまだ木器や石器用素材の搬入を、ある意味の政治性を想定し理解するむきもあるけれど、こうした考えにもとづいて、地理的条件に起因した交換の結果とみても妥当の範囲にある。むしろ、瓜生堂集団の社会的傑出性を説明する方がむつかしい。とすれば、ただちに思いおこされるのは、畿内各地に大量に搬出されたいわゆる河内の土器である。必ずしも、瓜生堂遺跡にてそれらが製作されたとはいえないとしても、沖積平野上に立地している集団から由来していることは既に指摘されるところである。神経質にまで調整・加飾されたこれらの土器は、またそれにふさわしい薄く硬く焼きあがるべく適切な粘土をも使用している。生駒山脈を形成する岩脈の風化バイラン土壤による粘土の産出は、この地に所在する諸集団のもつ地理的特質である。すぐれた土器製作をおこなった河内の地にも、また他地方からのすぐれない土器も相当量搬入されている事実もあることから、搬出された河内の土器そのものがすべて交換品であったといいがたいとしても、各種の素材を大量に搬入せざるをえない条件のもとでは、何か搬出すべき特産品を創りださねばならぬ必然性が、かれらに課せられていた。

このような考え方により、ある生産物の移動が一方向だけでなく、逆の方向にも確認されていれば、交換という相互行為によるものと理解できる。ただし、この考え方は、いずれの遺物ともそれぞれの生活領域に出土があることを考古学的に検証できる、という条件がつく。

それでは、移動する生産物の出土が先の生活領域以外の地にあるものについては、どのように考えればよいのだろうか。仮に、ある特定の物品について、幾度となくそうした出土の状態が確かめられれば、それは生産地の集団がみずからだけの意志で搬出させたか、あるいは、その近辺の集団が何かとの交換でそれを入手した後、離れた地へ再び搬出したか、いずれかの理由が考えられる。ただし、出土地の近辺に該当する集落がない場合、および、逆方向の生産物の移動が確かめられない場合は、前者の理由にもとづく移動と認められる。例えば、人里離れた地にて出土する銅鐸については、こうした理解が可能であろう。



また、いざれにも所属しない空白の環境からの生産物の採集および搬入も、(諸)集団独自の手でおこなわれたこともあろう。このようなものを「一方的移動」されたとみなし、交換により相互方向に移動するものとは区別しておく。生産物の交換による関係体(大社会)の構成 以上の観点にもとづいて、畿内各地における拠点集落での生産物の生産と消費のありかたを概観すれば、各種の生産物の大量移動の事実が確認され、一つのネットワークともいべき相互関係を、弥生時代中期には構成していることがわかる。その範囲は、摂津・河内・山城、大和・和泉・紀伊の諸地方をおおう。

そのなかでは、地域性として、南辺から産する生産物を主に使用する「南部型」と、北辺から産するものを主に使用する「北部型」に区別されるが、それは生産地からの地理的条件にもとづく相補現象で、中央部の生産物はあまねく大社会全域に移動する。これまでの知見によるかぎり、まんべんなく移動しており、極端なたよりはみとめられない。

各地に点在する拠点集落の等質性、規模の画一性、文化的類似性、変化の同時性など、畿内の弥生集落間の関係を特徴づける諸現象はすべてこのスムーズな生産物の移動ネットワークの存在をもってのみ説明が可能である。

3 畿内大社会の祭祀イデオロギー

各地に点在する拠点集落と、それらを結びつける生産物の相互移動のネットワークにより構成される大社会は、個別の祭祀イデオロギーにより個性づけられ、他の大社会と区別される。畿内

大社会は、銅鐸という特定祭器を媒介とする祈願型の祭礼型態をもって特徴づけられる。

祭祀イデオロギーの諸段階 生産物の移動が、拠点集落間を具体的に結合させものであるに対して、祭祀イデオロギーは、また拠点集落間を概念的に結合させ。歴史的にみれば、不特定多数の諸物や環境があいまいな意味での祭器の役割をはたした段階（第Ⅰ段階）——石、木、その他日常に使用する物品と同素材による特定形状のものが祭器の役割をはたした段階（第Ⅱ段階）——青銅その他、日常生活とはことなった素材による特定形状のものが祭器の役割をはたした段階（第Ⅲ段階）——一般諸成員のなかの特定の人間が、あいまいな意味での祭器の役割をはたした段階（第Ⅳ段階）——そして、一般諸成員とはことなる特定の人間が、あいまいな意味での祭器の役割をはたした段階（第Ⅴ段階）に、訴願型祭祀は分類される。それぞれ明確な画期をもってかならずしも転換するものではなく、その移行過程に重複することもありうるが、一般的に言えば歴史的経過としては順次それぞれの段階をふむものと思われる。

この観点からみれば、弥生時代中期における畿内大社会は、青銅という非日常的な素材によりつくられた銅鐸をその特定祭器としており、諸段階のうち第Ⅲ段階に位置づけられる祭祀型態をもつ。

ちなみに、同時代の北九州の大社会も、やはり青銅を素材とする戈、鉢、劍が特定祭器であり、同祭祀型態をもつ。

従来、銅鐸を、鐸身に農耕にかかわる絵画をもつ事例のあることを理由に、農耕の豊穣を祈願する祭器と、対する銅鉢・銅戈・銅劍を、対馬という海上の島に集中する事例のあることを理由に、海上航海の安全を訴願する祭器と、基本的に区別して理解されてきた。（小林1967年）ただし、この推論は、銅鐸・鉢・戈・劍にかかわる諸現象のうち、特異な事例にのみ着目して、全体を評価したものであって、かならずしも妥当ではない。

これらの特定青銅器類は、いずれの大社会にあっても、共通なありかたをしめす。すなわち、素材はいずれの大社会内部の自然環境では産出しない。ところが素材を大量に搬入し、両大社会の独自の主体性をもって、各地で製作し、大社会内部の各地にくわえて、それを核とする広範囲に搬出する。これらの祭器の社会的特徴は、特定集団により保有されることにあるのではなく、集団や大社会の外側へ搬出されることにある。また、実際に出土する諸地には、かならずしも有力な当該集団が存するとはかぎらず、またそれぞれの地から、青銅器類の製作地への逆方向の生産物の大量移動の事実もみとめられない。さきにのべた考えかたからすれば、こうした特定青銅器類は、いずれも主体的意識にもとづいて、なんらかの理由で、一方的に搬出がなされたものである。すくなくとも、銅鐸・鉢・戈・劍の性格に、基本的な区別はなく、考古学的にも、鐸と武器類の共存する事例をもってそれを説明できる。かようなありかたと、歴史的経過とは、共通の現象をみており、その社会的、歴史的にはたした役割はおなじと理解することが妥当である。

銅鐸および銅鉢・戈・劍といった青銅器類は、別稿で論じられるとおり、集団や大社会を、外

から浸してくる悪靈・害敵などから觀念的にふせぎとめるための結界行為に供されたものと理解している（春成1978年、酒井1978年、1980年）。

おわりに

このたび調査がなされた亀井遺跡は、以上のような畿内大社会を構成する拠点集落の一例である。

〔文献〕

- 瓜生堂遺跡調査会 1972 「瓜生堂遺跡（資料編）」
- 1973 「瓜生堂遺跡Ⅰ」
- 1981 「瓜生堂遺跡Ⅱ」
- 大阪府教育委員会
1975 「池上遺跡発掘調査概要Ⅴ」
- 大阪府教育委員会（財）大阪文化財センター
1981 「亀井遺跡現地説明会資料Ⅰ」
- 1981 「亀井・城山」（寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書）
- 1980 「瓜生堂」（近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書）
- 小林行雄 1967 「国民の歴史1」（女王國の出現）
- 堀山彦太郎・市原実
1972 「大阪平野の発達史」「地質学論集」7
- 酒井龍一 1976 「弥生社会の体系的理解に関する認識論」「大阪文化誌」第5号
- 1978 「銅鐸・その内なる世界」「攝河泉文化資料」第3巻第2号
- 1980 「銅鐸（邪氣と封じこめたオブジェ）論」「攝河泉文化資料」第5巻第3号
- 1981 「亀井遺跡の石器生產」（前掲）「亀井・城山」
- 1982 「集落址からみる人間の精神構造」「歴史公論」第八卷第九号
- 第2阪和国道内遺跡調査会
1971 「池上・四ツ池」
- 1971 「第2阪和国道内遺跡調査報告書4」
- 春成秀爾 1976 「銅鐸の埋納と分布の意味」「歴史公論」第4巻3号
- 安田嘉憲 1973 「瓜生堂遺跡の瓦土の花粉分析」（前掲）「瓜生堂遺跡Ⅱ」

